高槻市文化財調査報告書　第11冊

郡家今城遺跡発掘調査報告書

― 旧石器時代遺構の調査 ―

I

1978年３月

高槻市教育委員会

高槻市文化財調査報告書　第11冊

郡家今城遺跡発掘調査報告書

― 旧石器時代遺構の調査 ―

1978年３月

高槻市教育委員会

序　文

丹波山地から連なる洪積丘陵は、本市のほぼ中央に位置し、三島地方における文化の黎明を知るうえで、重要な地域となっております。

この洪積丘陵から広がる沃野には、本市を等分するかのように芥川・桧尾川・女瀬川の３河川が南流し、ともに淀川へとそそいでいます。

この芥川と女瀬川に囲まれたところには、史跡今城塚古墳をはじめ、嶋上郡衙跡など淀川にはぐくまれた文化を理解するうえで欠くことのできない重要な遺跡群が存在しています。

とくに、近年の発掘調査により、三島地方の最初の住人ともいうべき旧石器時代人のあしあとの広がりが知られるようになり、全国的にも注目されるようになってきております。近い将来、遠き古代の姿を復原することも可能であるといえましょう。

このような貴重な文化遺産を保存・保護していくことは、われわれに課せられた責務であります。しかし、急激で持続する開発の波により、貴重な文化財が少なからず消滅しつつある今日、これらの文化財を保存・保護していくことはたいへん困難となってきております。

さて、ここにまとめました報告書は、本市教育委員会が昭和48年～49年にかけて調査をおこないました郡家今城遺跡の調査報告書であります。本調査では、奈良時代の村落も明らかになっておりますが、とくに本書は旧石器時代の遺構をとりあげたものであります。この報告書が、旧石器時代研究や、私たちの祖先のあゆみを知るうえで少しでも役立つならば幸いに存じます。

なお、調査および調査報告書の刊行にあたり、御協力をいただきました関係各位に心から感謝の意を表します。

1978年３月

高槻市教育委員会

教育長　平　井　正　吾

例　言

1．本書は、昭和48年10月15日から昭和49年４月30日まで、高槻市教育委員会が調査主体となって実施した、高槻市氷室町１丁目に所在する郡家今城遺跡の調査報告書のうち旧石器時代編をなすものである。

2．調査は、高槻市文化財保護審議会委員原口正三氏の指導のもと、高槻市教育委員会冨成哲也・大船孝弘がおこなった。

3．出土遺物の整理と報告書の作成は、原口正三氏の指導のもとに、大船が担当した。

実測・製図および写真撮影は大船がおこない、写真撮影に際しては、立命館大学学生鐘ヶ江一朗氏の援助を得た。

4．石器の石材鑑定については、大阪市立自然史博物館の石井久夫氏にお願いした。

5．執筆は、第Ⅰ章～第Ⅲ章を冨成が、第Ⅳ章～第Ⅵ章を大船が担当した。なお、英文要約は大船昭子氏が作成し、嵯峨根清・David Hale 両氏に校閲していただいた。

6．本書の作成および出土品の整理にあたって、上記の方々のほか下記の方方に協力を得た。記して感謝の意を表します。

田代克己・石田志朗・山中一郎・松沢亜生・石神　怡・松下晴子・西口陽一・武村雅一・吉田房子・岸本雅敏・橋本　正・吉水康夫・奥　義次・永木綾三郎・西田正義・久保田実・藤井泰雄・阪口善就・清水重幸

（順不同・敬称略）

目　次

第Ⅰ章　位置と環境 …… 1

第Ⅱ章　調査経過 …… 3

第Ⅲ章　遺構の調査について …… 5

第１節　調査の方法

第２節　層　序

第Ⅳ章　遺　構 …… 7

第１節　Ａ群の遺構

第２節　Ｂ群の遺構

第３節　Ｃ群の遺構

第４節　Ｄ群の遺構

第５節　Ｅ群の遺構

第６節　Ｆ群の遺構

第７節　Ｇ群の遺構

第８節　Ｈ群の遺構

第Ⅴ章　遺　物 …… 15

第１節　石　器　類

第２節　礫　類

第Ⅵ章　結　語 …… 25

石　器　観　察　表

English Summary

図　版　目　次

PLATE 1　a．郡家今城遺跡航空写真
b．遺跡遠景（南側上空から）

2　調査地区全景（南側から）

3　a．発掘地区全景(南東側から)
b．発掘地区全景(北西側から)

4　a．A群の遺物出土状況(南側から)
b．B群の遺物出土状況(北西側から)

5　a．C群の遺物出土状況(北西側から)
b．C_1ブロックの遺物出土状況(西側から)

6　a．C群の遺物出土状況(西側から)
b．C_2ブロックの遺物出土状況(南側から)

7　a．D_3ブロック・F群の遺物出土状況(西側から)
b．D_4ブロックの遺物出土状況(西側から)

8　a．F群の遺物出土状況(南東側から)
b．F_1ブロックの遺物出土状況(南側から)

9　a．F_1ブロックの遺物出土状況(南側から)
b．F_1ブロックの遺物出土状況(細部・南側から)

10　a．G群の遺物出土状況(南側から)
b．G群の遺物出土状況(南側から)

11　a．H群の遺物出土状況(西側から)
b．H_1ブロックの遺物出土状況(西側から)

12　a．A群出土のナイフ形石器(B面)
b．同　上(A面)

13　a．A群出土のナイフ形石器・二次加工のある剥片・翼状剥片(B面)
b．同　上(A面)

14　a．A群出土の翼状剥片・叩き石(B面)
b．同　上(A面)

15　a．A群出土の翼状剥片と接合剥片(1)　b．同　左(2)
c．同　上(3)　d．A群出土の剥片

16　a．A群出土の剥片
b．A群出土の剥片

17　a．B群出土のナイフ形石器・翼状剥片・剥片(B面)
b．同　上(A面)

18　a．C群出土のナイフ形石器(B面)
b．同　上(A面)

19　a．C群出土のナイフ形石器・彫器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片(B面)
b．同　上(A面)

20　a．C群出土の使用痕のある剥片・翼状剥片(B面)
b．同　上(A面)

21　a．C群出土の翼状剥片(B面)
b．同　上(A面)

22　a．C群出土の翼状剥片(B面)
b．同　上(A面)

23　a．C群出土の翼状剥片・叩き石(B面)
b．同　上(A面)

24　a．C群出土の接合剥片・掻器(B面)　b．同　左(A面)
c．C_1ブロック出土の剥片　d．C_3ブロック出土の剥片

PLATE 25 a．C_2ブロック出土の剥片
b．C_4ブロック出土の剥片
26 a．D群出土のナイフ形石器・縦長剥片(B面)
b．同　上(A面)
27 a．D群出土の使用痕のある剥片・掻器・翼状剥片(B面)
b．同　上(A面)
28 a．D群出土の翼状剥片(B面)　b．同　左(A面)
c．D群出土の翼状剥片(B面)　d．同　左(A面)
29 a．D群出土の翼状剥片・翼状剥片石核・剥片(B面)
b．同　上(A面)
30 a．D群出土の翼状剥片石核・剥片(B面)
b．同　上(A面)
31 a．D_1ブロック出土の剥片
b．D_3ブロック出土の剥片
32 a．E群出土のナイフ形石器(B面)
b．同　上(A面)
33 a．E群出土のナイフ形石器(B面)
b．同　上(A面)
34 a．E群出土のナイフ形石器(B面)
b．同　上(A面)
35 a．E群出土のナイフ形石器(B面)
b．同　上(A面)
36 a．E群出土の使用痕のある剥片・縦長剥片・翼状剥片(B面)
b．同　上(A面)
37 a．E群出土の翼状剥片・打面調整剥片・縦長剥片石核・剥片・翼状剥片石核(B面)
b．同　上(A面)
38 a．E群出土の翼状剥片石核・接合剥片(B面)
b．同　上(A面)
39 a．E群出土の翼状剥片石核と接合剥片(1)
b．同　上(2)　c．同　上(3)
40 a．E群出土の剥片
b．E群出土の剥片
41 a．F群出土のナイフ形石器・掻器(B面)
b．同　上(A面)
42 a．F群出土の彫器・縦長剥片・翼状剥片(B面)
b．同　上(A面)
43 a．F群出土の翼状剥片(B面)
b．同　上(A面)
44 a．F群出土の翼状剥片・翼状剥片石核(B面)
b．同　上(A面)
45 a．F群出土の接合剥片・叩き石(B面)
b．同　上(A面)
46 F群出土の彫器と接合剥片
47 a．F_1ブロック出土の剥片
b．F_1ブロック出土の剥片
48 a．F_1ブロック出土の剥片
b．F_2・F_3・F_4ブロック出土の剥片
49 a．G群出土のナイフ形石器・掻器(B面)
b．同　上(A面)
50 a．G群出土の翼状剥片(B面)
b．同　上(A面)

PLATE 51　a．G群出土の翼状剥片・剥片(B面)
b．同　上(A面)

52　a．G群出土の翼状剥片・剥片・翼状剥片石核(B面)
b．同　上(A面)

53　a．G群出土の剥片・接合剥片(B面)
b．同　上(A面)

54　a．G群出土の剥片
b．G群出土の剥片

55　a．G群出土の剥片
b．G群出土の剥片

56　a．H群出土のナイフ形石器・掻器(B面)
b．同　上(A面)

57　a．H群出土の使用痕のある剥片・剥片(B面)
b．同　上(A面)

58　a．H群出土の翼状剥片石核・剥片・翼状剥片(B面)
b．同　上(A面)

59　a．H群出土の接合剥片(B面)　b．同　左(A面)
c．H_1・H_2ブロック出土の剥片

60　a．H_3ブロック出土の剥片
b．H_4ブロック出土の剥片

61　a．表面採集のナイフ形石器・掻器(B面)
b．同　上(A面)

62　a．表面採集の掻器・彫器・縦長剥片・剥片・叩き石(B面)
b．同　上(A面)

63　a．表面採集の翼状剥片・翼状剥片石核・剥片(B面)
b．同　上(A面)

64　a．表面採集の剥片
b．表面採集の石鏃

65　a．A群出土の礫　b．B群出土の礫
c．C_1ブロック出土の礫

66　a．C_1ブロック出土の礫
b．C_2ブロック出土の礫

67　a．C_2ブロック出土の礫
b．C_3ブロック出土の礫

68　a．C_4ブロック出土の礫
b．D_1ブロック出土の礫

69　a．D_1ブロック出土の礫
b．D_2ブロック出土の礫

70　a．D_3ブロック出土の礫
b．D_3ブロック出土の礫

71　a．D_3ブロック出土の礫
b．D_4ブロック出土の礫

72　a．E群出土の礫
b．E群出土の礫

73　a．F_1ブロック出土の礫
b．F_1ブロック出土の礫

74　a．F_2ブロック出土の礫
b．F_3ブロック出土の礫

75　a．G群出土の礫
b．G群出土の礫

76　a．G群出土の礫
b．H_1ブロック出土の礫
c．H_2ブロック出土の礫

PLATE 77 a．E群の石器組成
b．A群の石器組成
78 C群の石器組成
79 D群の石器組成
80 F群の石器組成
81 G群の石器組成
82 H群の石器組成
83 ナイフ形石器
84 使用痕(1)
85 使用痕(2)
86 F群出土の叩き石　展開
87 表面採集の叩き石　展開と細部
88 F群出土の掻器　展開と細部
89 A群出土のナイフ形石器
90 A群出土のナイフ形石器・二次加工のある剥片・翼状剥片
91 A群出土の翼状剥片・叩き石・B群出土のナイフ形石器・翼状剥片
92 C群出土のナイフ形石器
93 C群出土の彫器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片
94 C群出土の使用痕のある剥片・翼状剥片
95 C群出土の翼状剥片
96 C群出土の翼状剥片・叩き石・接合剥片・掻器
97 D群出土のナイフ形石器・縦長剥片・使用痕のある剥片
98 D群出土の掻器・翼状剥片
99 D群出土の翼状剥片・翼状剥片石核
100 D群出土の剥片・翼状剥片石核
101 E群出土のナイフ形石器
102 E群出土のナイフ形石器
103 E群出土のナイフ形石器
104 E群出土のナイフ形石器・使用痕のある剥片・縦長剥片・翼状剥片・剥片
105 E群出土の翼状剥片・打面調整剥片・縦長剥片石核・翼状剥片石核
106 E群出土の翼状剥片石核・接合剥片
107 F群出土のナイフ形石器
108 F群出土の掻器・彫器・接合剥片・縦長剥片・翼状剥片
109 F群出土の翼状剥片
110 F群出土の翼状剥片・翼状剥片石核・剥片
111 F群出土の接合剥片・叩き石
112 G群出土のナイフ形石器・掻器
113 G群出土の翼状剥片
114 G群出土の翼状剥片・剥片
115 G群出土の翼状剥片・翼状剥片石核・剥片・接合剥片

PLATE 116　H群出土のナイフ形石器・使用痕のある剥片
117　H群出土の使用痕のある剥片・剥片・掻器・打面調整剥片・翼状剥片石核
118　H群出土の剥片・接合剥片・翼状剥片石核
119　表面採集のナイフ形石器・掻器
120　表面採集の彫器・翼状剥片・翼状剥片石核・縦長剥片・叩き石

別　添　図　版　目　次（箱入）

PLATE 121　旧石器時代遺構調査地区割図
122　旧石器時代遺物出土全体図
123　A群の遺物出土状況
124　A群の石器出土と接合状況
125　A群の礫出土と接合状況
126　B群の遺物出土状況
127　B群の石器出土と接合状況
128　C群の遺物出土状況
129　C群の石器出土と接合状況
130　C群の礫出土と接合状況
131　D群の遺物出土状況
132　D群の石器出土と接合状況
133　D群の礫出土と接合状況
134　F群の遺物出土状況
135　F群の石器出土と接合状況
136　F群の礫出土と接合状況
137　G群の遺物出土状況
138　G群の石器出土と接合状況
139　G群の礫出土と接合状況
140　H群の遺物出土状況
141　H群の石器出土と接合状況
142　郡家今城遺跡石器器種別一覧表

挿　図　目　次

挿図1　郡家今城遺跡の位置…… 1
2　郡家今城遺跡の発掘区域…… 3
3　調査風景…… 4
4　南北トレンチ断面図…… 6
5　東西トレンチNo.1断面図…… 6
6　東西トレンチNo.2断面図…… 6
7　ナイフ形石器の長さと重量…… 16
8　翼状剥片の長さと重量…… 16
9　ナイフ形石器と翼状剥片の幅…… 16
10　縄文時代の石鏃 …… 22
11　ナイフ形石器・有舌尖頭器・石鏃の長さ・幅・厚さ・重量 …… 29
12　郡家今城遺跡の想像復原図 ……31

表　目　次

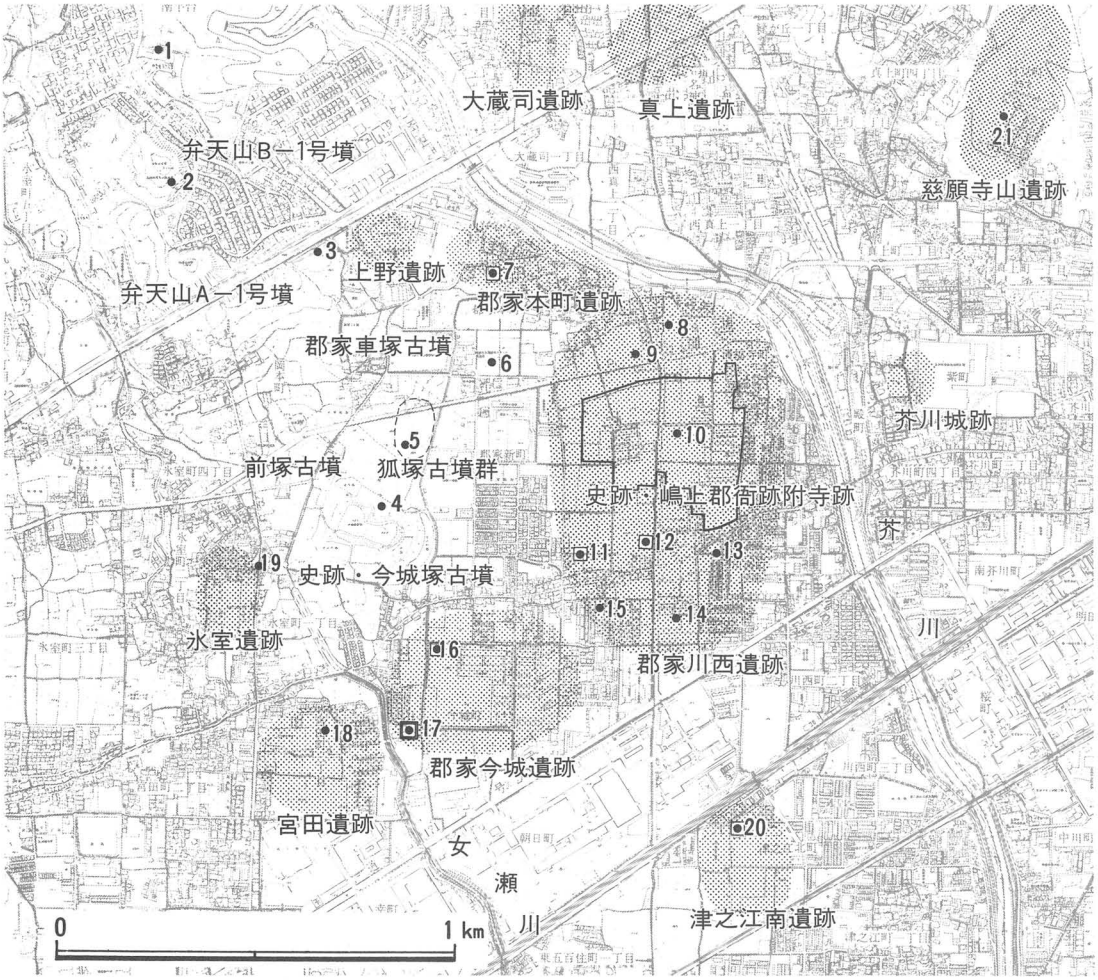
表1　群別石器組成一覧…… 17
2　石材別石器組成…… 17
3　群別礫一覧…… 24
4　A群出土の石器観察表……（i）33
5　B群出土の石器観察表……（ii）
6　C群出土の石器観察表……（iii）
7　D群出土の石器観察表……（v）
8　E群出土の石器観察表……（vii）
9　F群出土の石器観察表……（xi）
10　G群出土の石器観察表……（xiii）
11　H群出土の石器観察表……（xiv）
12　表面採集の石器観察表……（xvi）

第Ⅰ章　　位置と環境

大阪平野の北東方に位置する高槻市は、歴史的にも、文化的にも南を流れる淀川にはぐくまれて発展してきたところである。

この淀川は、高槻市の東方、大阪府と京都府との府境付近、桂川・宇治川・木津川の三川合流点にはじまり、およそ35km西流してやがて大阪湾にそそぐ。

高槻市の地形は、古生層からなる山間部と大阪層群からなる丘陵地帯、低位段丘・沖積地からなる平野部に大別できる。しかも、丘陵地帯の先端部を東西に「真上断層帯」が走るため、丘陵部と平野部を明確に区別することができる。また、古生層の山合からは３河川が流れ出し、東から桧尾川・芥川・女瀬川と呼ばれ、ともに南流してやがて淀川に合流する。とくに、芥川の西に横たわる南平台丘陵南縁は、この芥川によって形成された低位段丘(富田礫層)が広がり、芥川の東に広がる平野部と大きな違いをみせている。①



挿図１　郡家今城遺跡の位置

１．弁天山Ｄ地点	６．郡家川西Ｃ地点	11．郡家川西Ｈ地点	16．郡家今城Ａ地点	21．慈願寺山遺跡
２．弁天山Ｃ地点	７．郡家本町遺跡	12．郡家川西Ｉ地点	**17．郡家今城Ｃ地点**	
３．弁天山Ｂ地点	８．郡家川西Ｆ地点	13．郡家川西Ａ地点	18．宮田遺跡	
４．今城塚遺跡	９．郡家川西Ｅ地点	14．郡家川西Ｂ地点	19．氷室遺跡	
５．狐塚遺跡	10．郡家川西Ｄ地点	15．郡家川西Ｊ地点	20．津之江南遺跡	

この低位段丘の面積はおよそ8㎢で、若干南北に長い舌状を呈している。標高は南端で14m、北部で32mを測るが、沖積平野との比高差は、南端で5～6m、西側で8～10mである。東側では、その差はほとんど認められない。

この低位段丘上に位置する郡家今城遺跡は、芥川と女瀬川との合流点から女瀬川を約2.4㎞さかのぼった東岸に接し、低位段丘のほぼ中央部に位置する。遺跡の範囲は府立三島高校を中心に、東西約0.5㎞、南北約0.4㎞で、標高19～20mを測る。女瀬川との比高差は約1mである。

郡家今城遺跡が立地する低位段丘上には、各時代にわたる数多くの遺跡が分布し、付近一帯が古代から三島地方における中心地域であったことが想定される。とくに、芥川西岸一帯は、弥生時代中期から中世に至るまで連綿と存続した郡家川西遺跡があり、その中心地域は「摂津三島上郡」の郡衙が置かれたところとして、中心部98011.63㎡が「史跡・嶋上郡衙跡附寺跡」として史跡指定されている。② この西方には、真の継体天皇陵に比定されている「史跡・今城塚古墳」があり、背後に横たわる南平台丘陵上に造営された古墳時代前期の弁天山古墳群③から郡家車塚古墳、凝灰岩製の長持形石棺の出土した前塚古墳、氷室塚古墳へと、その王権の系譜をたどることができる。そのほか、歴史時代の集落としては、郡家今城遺跡の西を流れる女瀬川をはさんで宮田遺跡がある。さらに、南東約0.8㎞に津之江南遺跡④、南約1.8㎞に富田遺跡があり、南平台丘陵南斜面には嶋上郡衙跡と密接な関係にある岡本山火葬墓群⑤が知られる。

このような芥川西岸の遺跡群に対し、東岸では、やや異なった様相を呈している。桧尾川と芥川にはさまれた日吉台丘陵の南側一帯は沖積地の平野部が広がり、ここには弥生時代前期にはじまり、中世まで存続する安満遺跡⑥、弥生時代後期の大蔵司遺跡、奈良時代の水田遺構と木簡が検出された上田部遺跡⑦、中世の芥川城跡・天川遺跡などが知られている。この沖積地後背丘陵上には、弥生時代中期にはじまる天神山遺跡、慈願寺山遺跡、奥天神山遺跡、芝谷遺跡、古曽部遺跡や、後期に属する紅茸山遺跡などがあり、丘陵上を次々と集落が移動したことが近年明らかとなっている。また、この丘陵上に造営された古墳は、三角縁神獣鏡が出土した伊勢寺古墳、中将塚古墳、内部主体は横穴式石室と考えられる宿弥塚古墳、丘陵端部を利用した昼神車塚古墳などがある。また、すぐ西側には慈願寺山古墳をはじめ、横穴式石室を有する慈願寺山古墳群、「史跡・石川年足墓」があり、東側には紅茸山古墳群、奥坂古墳群⑧、羅王山古墳が造営されている。なお、日吉台丘陵の東側を流れる桧尾川の東岸にも、萩ノ庄古墳群をはじめ、安満山古墳群、梶原古墳群など、比較的小規模な古墳群が点在している。奈良時代の遺跡としては、嶋上郡衙跡にある芥川廃寺と同様な規模と推定される梶原寺跡がある。

以上述べたように、芥川をはさんで西と東では、遺跡のあり方・密度など、かなりの相違がみられる。このことは、旧石器時代遺跡の分布についてもあてはまる。南平台・日吉台両丘陵の南面する斜面などからは、単独発見ながら多数のナイフ形石器が採集されているが、近年、南平台丘陵の南一帯に広がる低位段丘上で、数多くの遺跡が発見されるに至った。遺構の検出例こそ少ないが、とくに国府期の遺跡では比較的多数の製品が確認され、旧石器時代遺跡を面としてとらえることが可能になった。これらの製品は、郡家今城遺跡A地点⑨をはじめ、津之江南遺跡・郡家川西遺跡⑩などでは、多くの場合礫群に伴って発見される。こうした礫群は、当時の生活に何らかの関係を有したと考えざるをえないが、石器群と礫群の統一的な分析を通して、徐々にではあるが旧石器時代の様相が明らかになろうとしている。

第II章　調査経過

女瀬川東岸に広がる郡家今城遺跡は、大阪府教育委員会が府立三島高校建設予定地について、昭和44年以来、数次にわたる調査を実施したところ、同校を中心にほぼ300ｍ四方の広範囲にわたる、奈良時代の集落跡の存在が明らかとなった。ところが、この奈良時代の地山面に相当する黄褐色粘土層は旧芥川によって形成された低位段丘の表面にあたり、昭和45年３月、同校建設工事に先立っておこなわれた調査で、この粘土層中から多数のナイフ形石器と石屑を検出し、旧石器時代の遺跡の存在が確認された(郡家今城遺跡Ａ地点)。

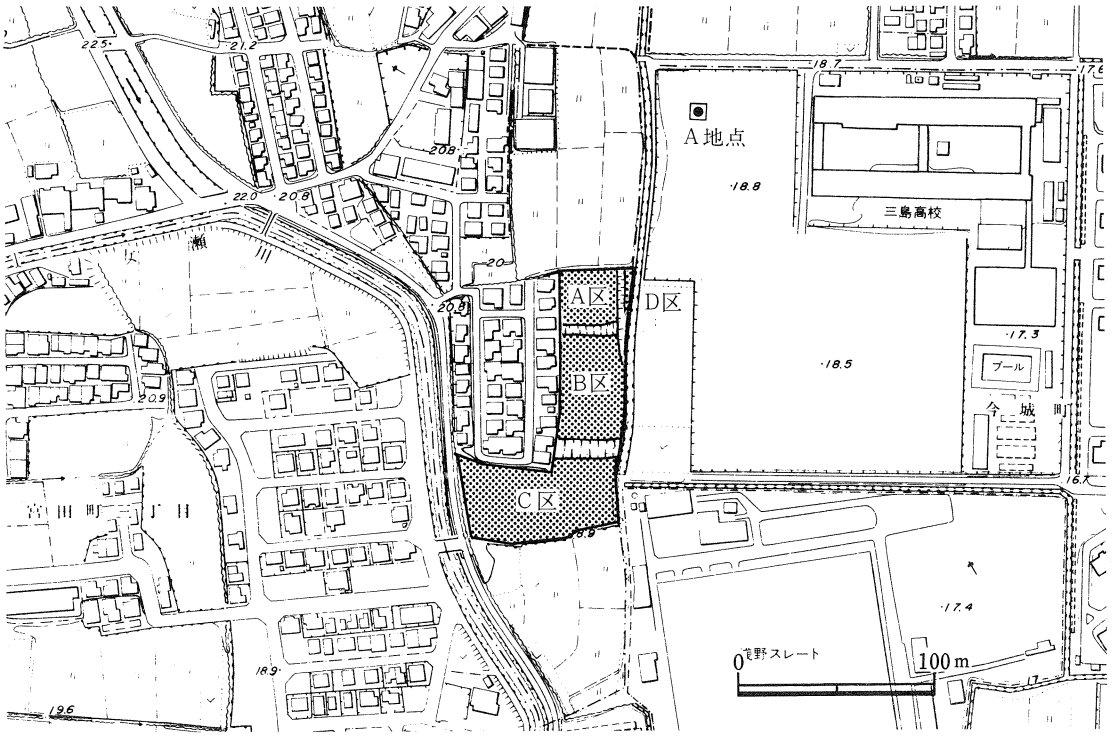
昭和48年３月、同校と女瀬川にはさまれた東西35ｍ、南北130ｍにおよぶ女瀬川に隣接した地域が開発されることとなった。この開発予定地は郡家今城遺跡の西端にあたり、遺構の密度が明らかでないため、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会および宅地造成業者との協議の結果、まず開発予定地内の遺構確認調査を実施し、その結果をまって取り扱いを協議することとなった。

昭和48年８月、遺構確認調査をおこなったところ、開発予定地全域にわたって奈良時代遺構の分布状況を知るに至ったため、再度協議を重ねた結果、開発予定地全域の発掘調査を実施することになった。

調査は高槻市文化財保護審議会委員・原口正三氏の指導のもとに、高槻市教育委員会が担当し、調査経費は全額宅地造成業者が負担した。

調査は昭和48年10月15日から、重機を用いて耕土・床土を除去して奈良時代遺構の検出作業を進め、昭和49年４月30日に完了した。

奈良時代の遺構は、東西に走る２条の大溝および南北に走る１条の大溝によって大きく区画された敷地(Ａ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区)内に、掘立柱建物跡・井戸・土坑墓等が、それぞれの区画内で整

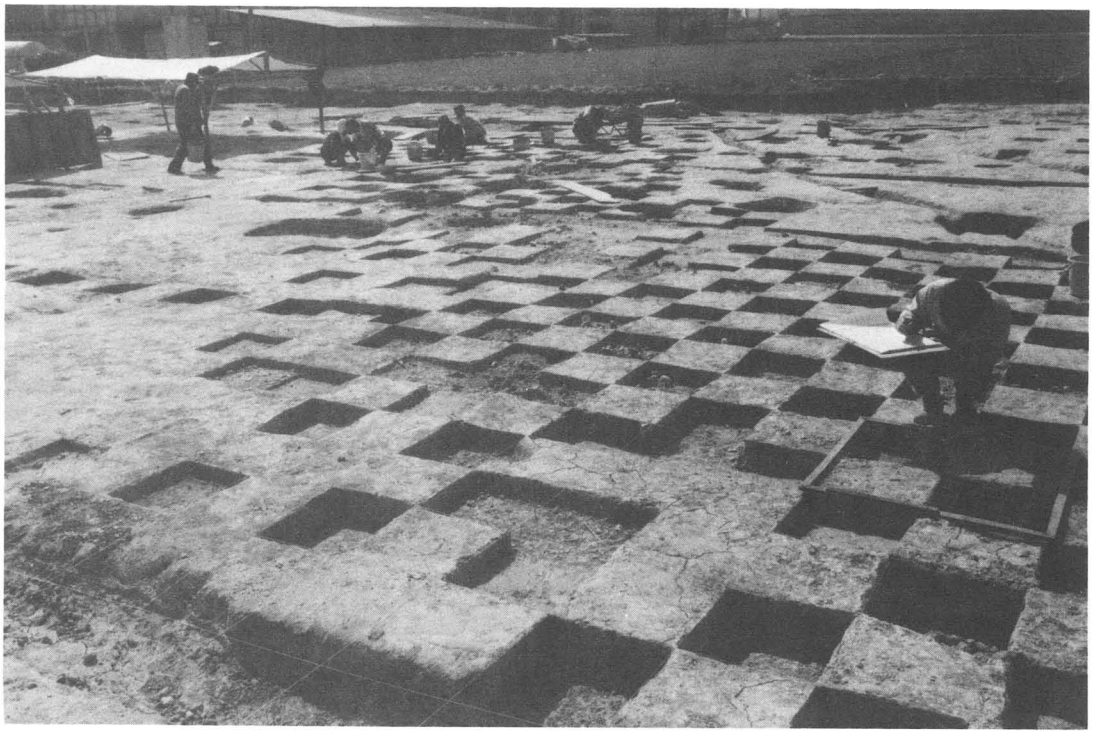


挿図２　郡家今城遺跡の発掘区域

然と配置されていた。

旧石器時代の遺物は、重機による耕土・床土の排土作業を進めている段階で、C区の一部分に遺存していることを発見した。その後、奈良時代遺構の調査を進めていくうち、掘立柱建物跡の柱穴壁面に若干の石器を発見するにいたり、調査区全域について旧石器時代遺物の分布状況を調査するとともに、まず奈良時代遺構の調査を完了させることになった。

旧石器時代遺構の調査は昭和49年3月から本格的な調査を開始し、4月30日に完了した。



挿図3　調査風景

第Ⅲ章　遺構の調査について

第１節　調査の方法

近畿地方における旧石器時代遺構の調査は、これまで幾度となく試みられてはいるが、自然的・歴史的にも遺存条件に限界があり、十分な調査ができずにきた。全国的には、遺存状況の良好な遺跡において様々な方法を駆使した調査が進められてきてはいるが、いずれの場合も、出土地点およびそれに伴う層位的関係等に重点が置かれてきたように思われる。

本遺跡の場合、層序については単一層である。調査地Ｃ区から奈良時代遺構に伴って検出された旧石器時代の石器は、昭和45年３月調査のＡ地点と同様に、黄褐色砂質粘土層中に認められた。さらに、津之江南遺跡でみられたと同様に小礫を伴っていることも確認できた。このような状況は、以前の調査結果からも、旧石器時代遺構が良好な状態でＣ区全域に広がっていることを予想させた。そこで、石器の出土状況およびその広がり等について正確な記録をとるために、本遺跡の基準軸（Ｎ－７°－Ｅ）を用いて50cmグリッドを基本単位とし、Ｃ区内に設定したＷ115・Ｓ175を原点に、西から東へＡ・Ｂ・Ｃ…、北から南へ１・２・３…と記号を附してＡ－１、Ｂ－２のグリッド名で表示し、出土地点の相互関係を明らかにすることとした（Ｐ1．121）。

調査は、掘立柱建物跡の柱穴壁面に遺物が露出している地区や、奈良時代遺構の調査中に遺物が出土した地区から始めた。その際、グリッドを順次広げていくのではなく、市松にグリッドを掘りすすめ、全体の状況を把握しながら残った市松グリッドを調査することとした。この場合の調査器具は、対象遺物が極小片であるところから、遺物の検出に遺漏のないように、細身の洋食用ナイフを採用した。検出したすべての遺物（石器から小礫砕片に至るあらゆるもの）は、必ず出土状態を撮影し、図化完了段階まで維持した。

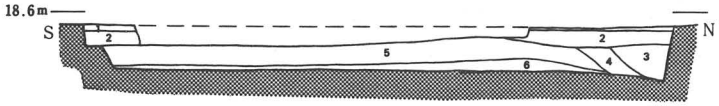
図化は、出土状態を正確に記録し、かつ、より精密・多角的な整理作業に耐えうるよう実物大でおこない、周囲に配した同一レベルによる高低の測定をおこなった。遺物には、すべてグリット番号とグリット内の一連番号を附した。これは、遺物出土状態を、今後如何なる場所においても復原しうることを可能にしたものであろう。

第２節　層　序

郡家今城遺跡の層序は、現状が水田であったため、第Ⅰ層は黒色土層（耕土・約0.3ｍ）、第Ⅱ層は黄褐色土層（床土・約0.1ｍ）、第Ⅲ層は奈良時代の地山面である黄褐色砂質粘土層（旧石器時代の包含層・約0.1～0.2ｍ）となっている。それより下層は、東西トレンチを入れて確認したところ、バラス層が地表面下約２ｍまで互層になって堆積し、段丘面の上部が形成された後に、Ｂ区からＣ区の中央部にかけて、女瀬川の旧河道が走っていたことがわかった。そこで、国府文化の遺物群は、旧河道が土砂の堆積によって埋没し、水成の薄い黄褐色～灰褐色粘土層が新しく堆積した中に包含されていたことになる。

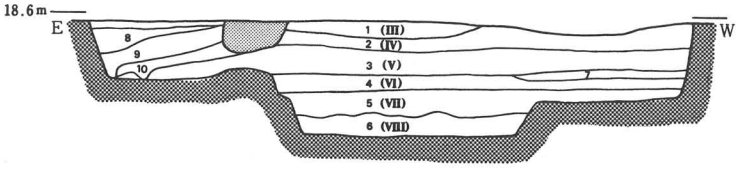
女瀬川の旧河道によって攪乱されていない東西トレンチのNo.１トレンチをみると、第Ⅳ層は褐色粘土層（約0.3ｍ）、第Ⅴ層は淡緑灰色粘土層（約0.25ｍ）、第Ⅵ層は灰色粘土層（約0.2ｍ）、第Ⅶ層は暗

茶色粘土層(約0.2m)、第Ⅷ層は茶青灰色砂層であり、ほぼ平均した厚さの堆積状況を示している。しかし、その下の層序については、手掘りによる掘削のため確認することができなかった。ただ、府立三島高校建設時におこなったボーリング調査において、地表面下約3.5mで、厚さ約12mの富田礫層(低位段丘基盤層)に達している。



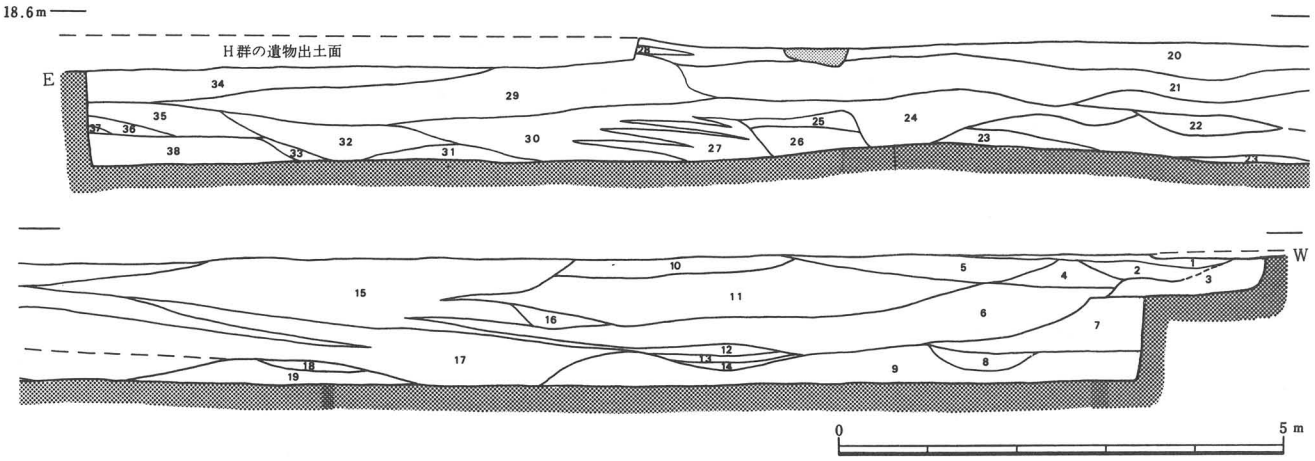
挿図4　南北トレンチ断面図

1．灰黄褐色粘土層　4．灰褐色砂層
2．灰褐色粘土層　5．灰褐色粘土層(砂を含む)
3．茶灰黄色砂礫層　6．灰色砂質土層



挿図5　東西トレンチNo.1断面図

1．灰黄褐色粘土層　6．茶青灰色砂層
2．褐色粘土層　7．灰色粘土層
3．淡緑灰色粘土層　8．灰褐色粘土層
4．灰色粘土層　9．灰褐色砂質土層
5．暗茶灰色粘土層　10．茶灰色砂層



挿図6　東西トレンチNo.2断面図

1．黄褐色粘土層
2．灰褐色砂質土層
3．灰褐色砂質粘土層
4．灰色砂層
5．淡茶褐色砂質土層
6．灰色砂層
7．灰色粘土層
8．茶灰色砂層
9．灰褐色砂層
10．黄灰色土質砂層
11．灰色砂礫層
12．茶灰色砂層
13．灰色砂層
14．灰色砂層
15．灰褐色粘土層(砂混)
16．淡黄色砂層
17．灰褐色砂礫層
18．淡茶灰色砂層
19．灰色砂礫層
20．灰褐色粘土層
21．灰褐色砂質粘土層
22．茶灰色砂層
23．灰色砂層
24．淡茶灰色細砂層
25．灰色砂層(小石含)
26．褐色砂層(小石含)
27．灰色砂層(小石含)
28．灰白色砂層
29．灰褐色粘土層
30．灰色砂層
31．灰褐色砂礫層
32．灰色細砂層
33．灰色粗砂層
34．灰色粘土層
35．灰白色粘土層
36．褐色粘土層
37．青灰色粘土層
38．灰色細砂層

第Ⅳ章　遺　構

今回調査した旧石器時代の遺構は、多数の礫類と石器類のブロックからなり、C区全域において、A群からH群までの大きな8単位を確認することができた。旧石器時代の遺物は、奈良時代の地山面である黄褐色～灰褐色砂質粘土層中に浅く包含されていた。検出したC群～H群の遺物の広がりは、ほぼ同じ大きさの規模を持ち、それぞれが重複することなく分布している。また、出土遺物についても非常に近似した石器組成を示している。これらの群は、それぞれ小さな4個のブロックから構成されており、各ブロックごとに調理・石器製作などの多くの作業がおこなわれたことを示している。

第1節　A群の遺構（P1.4－a、123～125）

A群はC区の南西部に位置する。奈良時代の地山面の高さは、標高18.55ｍである。遺物の出土範囲は、東西約3.0ｍ、南北約2.0ｍの長円形を呈している。包含層の厚さは、中心部で約0.2ｍを測る。出土遺物は、少数の礫と多数の石器類がある。

小礫がK－60地区を中心として径約1ｍの範囲に少数分布する。礫の接合例は2例ある。

石器は、K－59地区を中心として、径約1ｍの範囲に小さな剥片が分布し、その周辺に、ナイフ形石器・翼状剥片・二次加工のある剥片などが分布する傾向を示す。出土した石器の一部は、製作中に破損したものであり、多くの接合例がある。たとえば、ナイフ形石器(9)は、折れた本体同士が最高1.8ｍの距離をおいて接合する。また、石器製作を示すものとして、K－60地区から破損した叩き石(21)が出土している。この群でおこなわれた石器製作は、出土する小さな剥片や、製作途中に破損した多数のナイフ形石器、あるいは小さな叩き石が示すように、ナイフ形石器を製作する程度のものであったことがわかる。その他、出土した石器のなかには、完形品のナイフ形石器（3・4・5）、使用痕のある翼状剥片(17・20)などがあり、少数の破砕した礫の出土とともに、調理もおこなわれた場所であったことが推測される。しかし、遺物の出土範囲が限られているため、他の群のように全体的な構成については明らかでない。

第2節　B群の遺構（P1.4－b、126、127）

B群はC区の北西部に位置する。その北・西側は調査地区外にあり、南側は奈良時代の溝によって攪乱されている。奈良時代の地山面の高さは、18.55ｍである。遺物の出土範囲は、東西約3.0ｍ、南北約1.5ｍで、包含層の厚さは約0.3ｍを測る。

遺物は、西半分に石器類が集中し、北西から南東方向に礫が点々と並び、L・M－11地区で大形の礫がややまとまって分布する。遺物の垂直分布状況は、製品であるナイフ形石器と礫の大部分がほぼ水平な位置を示しており、当時の生活面が奈良時代の地山面より約0.3ｍ下であったことがわかる。

出土した石器は、石材の種類が4種類あり、残された剥片とナイフ形石器を識別すると、石材が異なることから、他の遺跡から持ちこまれたものであることは確実である。石器の接合例は2例、

礫の接合例はない。B群も限られた範囲の調査であったが、石器製作および調理作業がおこなわれたことは、推測するに十分である。また石器の接合例の中には、約9mの距離をおいてC_3ブロック出土の破損した翼状剥片と接合して、完形の翼状剥片になるものがあって、C群との関連を知ることができる。

第3節　C群の遺構（P1.5、6、128～130）

C群はC区の北西部に位置する。奈良時代の地山面の高さは、18.55mである。遺物の分布範囲は、東西約7.0m、南北約6.5mのほぼ円形を呈する。C群は、遺物の接合状況から、C_1ブロックからC_4ブロックの4つの小さな単位に分けることができる。C_4ブロックは、南東部でD群と接するが、礫の接合状況によって、明確に分離される。C_2ブロックは、他のブロックに比べ、包含状態がやや高い位置にある。出土遺物は、多数の礫と石器がある。

C_1ブロック

これはC群の北西部に位置する。プランは東西約2.0m、南北約3.1mの規模で、包含層の厚さは約0.1mを測る。

礫の出土は、O－21地区を中心として径約2.0mの範囲に密集し、Nラインより西側には、まばらである。礫の大きさは、他のブロックに比べて大きく、量も多い。全体的に、南側に大きい礫が集中する。

N－18・19・20・21地区では、礫の密集部がほぼ等間隔に存在し、それぞれ中央部に径約0.1mの空白部分があることから、なんらかの構造物であった可能性が高い。

礫の接合例は35例、うちC_4ブロックとの接合例が4例あり、両ブロックの関係が確認される。

石器の出土は、礫群の北側から中央部にかけて分布する。完形品のナイフ形石器(10)・彫器(11)・使用痕のある剥片(14・18)の4点は、N－21地区の小範囲からまとまって出土した。また、P－20地区からは破損した叩き石(34)が出土しているが、石器製作がおこなわれたかどうか明確にできない。

C_2ブロック

これはC群の北東部に位置する。プランは東西約2.6m、南北約2.3mの規模で、包含層の厚さは約0.1mを測る。

礫は、T－20地区を中心として径約1.5mの範囲に集中する。それらは南側に大きいものが多い。礫の接合例は18例ある。

石器は、礫の分布とほぼ重複し、径約2mの範囲に、小さな剥片を多数伴って分布する。また、Y－21地区では使用痕のある剥片(15)が単独で出土している。

このブロックでは、石器の接合例が9例あり、小単位での作業内容を知ることができる。7点の剥片が接合した接合剥片(35)は、剥離された本体がないので、正確な剥離目的を知ることができないが、他に同質の剥片もないところから、翼状剥片の器厚を薄くするためのものであったと推測される。掻器(36)は、刃部調整剥片と接合し、このブロックで素材から製作されたことがわかる。その他の製品としては、完形品で使用痕のある剥片(17)と翼状剥片(21)があるが、出土した剥片が小さく、少数であることなどから、他から持ちこまれたものである可能性が強い。また、破損したも

のとして、ナイフ形石器(7・8・9)・翼状剥片(20)がある。翼状剥片は使用によって破損したものであるが、ナイフ形石器3点は、素材から製作途中に破損したものと思われる。

C_3ブロック

これはC群の南西部に位置する。プランは東西約2.7m、南北約2.5mの規模で、包含層の厚さは約0.1mを測る。

礫は、全体的に小さく少数で、まばらに分布する。礫の接合例は4例ある。

石器は、礫と同様にまばらに分布するが、北側にやや密な傾向を示す。このブロックは、他のブロックに比べて剥片が少なく、完形品が多い。ナイフ形石器（2・3・4・6）・二次加工のある剥片(16)・翼状剥片(19・23・26・27・30)は、すべて完形品である。これらは、(16)をのぞき、すべて別々の石材によって製作され、製品としてこのブロックに持ちこまれている。ただ使用痕のある剥片(16)のみは、同質の剥片が付近から9点出土し、このブロックで製作された可能性が強い。しかし石核は、次のキャンプ地に持ち去られたらしく、見当らない。

C_4ブロック

これはC群の南東部に位置する。プランは東西約3.0m、南北約1.6mの東西にやや長い広がりを呈し、C_3ブロックとの境界は明確でない。包含層の厚さは約0.15mを測る。

礫は、ブロック全体に広がりをみるが、とくに集中する部分はない。礫の接合例は19例あり、うちC_1ブロックとの接合例は4例ある、このブロックがC_1ブロックと密接な関係にあったことは前述したとおりである。礫の大きさは全体的にC_1ブロックに比べて小さく、とくに東半の礫群が、C_1ブロックに移動させられた可能性が強い。

石器は、礫群に重複して分布し、剥片が多く出土する。製品は、ナイフ形石器(5)・彫器(12)・翼状剥片(28・29)の4点のみである。剥片には、原礫面を残すものが5点あり、石核の打面調整の剥離がおこなわれている。

第4節　D群の遺構（P1.7、131～133）

D群はC区の中央部西側に位置する。奈良時代の地山面の高さは18.54mである。遺構の分布範囲は東西約5.0m、南北約8.0mの南北に長い円形を呈する。この群も4つのブロックに分たれ、西側中央部の空白地をとり囲むように、各ブロックが分布する。各ブロックは、奈良時代の柱穴によって攪乱を受けている部分が多く、C群のように全貌を明らかにすることはできなかった。

D_1ブロック

これはD群の北西部に位置する。プランは東西約2.5m、南北約3.5mの規模をもち、包含層の厚さは約0.15mを測る。中央部と南側の2ヶ所は、奈良時代の柱穴によって攪乱されている。このブロックは北側でC_4ブロックと接する。

礫は、a－28地区を中心として、径約1.8mの範囲に、径10cm前後の比較的大きなものが集中し、その周囲に小さな礫群がやや離れて分布する。礫の接合例は3例ある。

石器は、北側でC_4ブロックと約1mの空間地を隔てて、ほぼ礫の分布と重複している。製品としては、ナイフ形石器(1)・掻器(12)・使用痕のある剥片(11)・翼状剥片(13・15)・縦長剥片(8)が、

礫の周辺から出土する。剥片の出土点数は少なく、3㎝以下のものが大部分である。特異なものとして、硬質頁岩製の剥片がａ－27地区から１点出土している。また、叩き石の破損品らしい粘板岩製のものがｂ－29地区から出土している。

D_2ブロック

これはＤ群の北東部に位置する。プランは東西約2.5ｍ、南北約3.5ｍの規模をもち、包含層の厚さは約0.15ｍを測る。周囲は奈良時代の柱穴によって攪乱されている。

礫は、ｆ－32地区を中心として径約1.5ｍの範囲に、径約５㎝～10㎝のものが集中している。礫の接合例は４例ある。

石器は、全体的に少なく、ブロック全域に散在している。製品としては、奈良時代の柱穴から出土したナイフ形石器(６)・翼状剥片(14・18・20)・縦長剥片(24)・翼状剥片石核(22)がある。剥片は、出土点数が少ない割に、３㎝以上の大きなものが５点出土している。

D_3ブロック

これはＤ群の南東部に位置する。プランは東西約2.8ｍ、南北約2.6ｍの規模をもち、包含層の厚さは約0.2ｍを測る。中央部は奈良時代の柱穴によって攪乱されている。

礫は、全体的に小さく破砕したものであるが、南側では原形に近い礫が集中し、中央部の小さな礫と接合する。また柱穴の北側と中央部の間にも接合例があり、合計16例ある。西側中央部にはこの遺跡で最大のものが１点ある。それは水平な面を上にして、据えられたような状態で出土した。

石器は、北側に大小の剥片が出土したのに比べ、南側では製品が多い。南西部の礫の周辺には翼状剥片(17・19・21)が集中し、製作中に破損したと考えられるナイフ形石器(４・５)も近接して出土した。小さな翼状剥片石核(27)は、距離約１ｍをおいて打面調整剥片と接合する。石器の接合例は２例ある。

D_4ブロック

これはＤ群の南西部に位置する。プランは東西約1.8ｍ、南北約1.5ｍの規模をもち、包含層の厚さは約0.1ｍを測る。

礫は、比較的小さなものが多く、分布範囲も他のブロックに比べて小さい。礫の接合例は３例ある。

石器は、Ｚ－40地区から使用痕のある翼状剥片(16)が、ただ１点出土した。

第５節　Ｅ群の遺構

この群はＣ区の中央西南部、すなわちＤ群の西側に位置する。奈良時代の地山面の高さは18.55ｍを測る。Ｃ・Ｄ群の遺構面が検出されて周囲の広がりを探索した時点では、遺物の包含状態が他の群よりもやや深かったため、この群の遺構面は発見されなかった。はじめて遺構を検出したのは、調査終了時であって、Ｃ・Ｄ群の最後のダメ押しをおこなった際、多数のナイフ形石器と共に、多くの礫がみつかった。そのため、他の群のように、遺物の正確な出土地点やレベルを取ることができなかった。しかし、遺物の分布範囲が、東西約5.5ｍ、南北約7.0ｍの規模をもち、包含層の厚さは約0.15ｍであったことは確認できた。包含位置は他の群よりやや深い。

第６節　Ｆ群の遺構（Ｐ1.8、9、134～136）

この群はＣ区の中央南側に位置する。奈良時代の地山面は18.37ｍ～18.45ｍである。遺物の出土範囲は、東西約7.2ｍ、南北約5.0ｍの東西に長い円形を呈する。Ｆ群も、Ｃ群・Ｄ群と同様に、出土遺物の分布状態によって、４つのブロックに分けることができる。F_1ブロックでは、不整形な土坑を検出した。

F_1ブロック

これはＦ群の西側に位置する。プランは東西約2.8ｍ、南北約3.2ｍの規模をもち、包含層の厚さは約0.2ｍを測る。

礫は、ｈ－47地区を中心として、東西約2.0ｍ、南北約1.8ｍの範囲に集中し、東側で石器の出土範囲と重複している。このブロックの礫には、火熱を受け内部まで赤変したものが多く、全体的に小さく破砕している。礫の接合例は９例あり、うちF_3ブロックとの接合例が２例ある。このブロックについてはF_3ブロックとの関係が考えられる。

このブロックの南東部にあたって、土坑を検出した。土坑の規模は、長径１.４ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.15ｍを計り、埋土は地山面と同じ灰褐色土であった。土坑内からの出土遺物には、径約５cmのチャートの円礫をはじめ、硬質頁岩製の掻器(７)・珪岩製の叩き石(27)・ナイフ形石器(２)・翼状剥片(18・20)があり、この土拡とこれらの出土遺物を合せ考えるなら、興味深い事例であろう。

石器は、ｉ－47地区を中心として径約１.５ｍの範囲に大小の剥片が多数分布し、他のブロックの場合と同様に、製品であるナイフ形石器(1・3)・翼状剥片(16・17)は、剥片の分布範囲の外辺部から出土した。その他、特殊な出土例として、ｉ－47地区から先端部の尖っていないナイフ形石器（４）と、３点の翼状剥片(13・14・19)の完形品が一括出土している。

このブロックから出土したサヌカイトの石材は、11種類以上あって、製品はすべて異なった石材の石核から剥離されていることがわかる。また、このブロックで製作されたことが明らかなものとしては、ｊ－47地区出土の打面調整剥片と接合する翼状剥片石核(22)・不定形な接合剥片（24・25・26)などがある。このうち接合剥片(24・26)には、Ｇ群から出土した剥片が含まれ、一連の石器製作中においても、場所の移動があったことを推測させる。しかし、これらの剥片・接合剥片や石核は、出土した製品に対して量的に僅少であり、石材も異なっている。このことは、製品の多くが、他から持ちこまれたことを示している。

なお、ナイフ形石器(４)は同じ石質の背部調整剥片が出土しており、ｊ－46地区出土の叩き折りによる二次加工がおこなわれている翼状剥片(21)と同じく、このブロックで製作されたもので残された、数少ない例である。

F_2ブロック

これはＦ群の中央部に位置する。プランは東西約1.1ｍ、南北約2.0ｍの南北に長い円形を呈し、包含層の厚さは約0.1ｍを測る。

礫は、全体的に小さなものが多い。それらは集中することなく分布する。礫の接合例は２例ある。

石器は、剥片３点と、ｎ－43地区から小さな翼状剥片(15)、ｍ－44地区出土のチャート製の縦長剥片(11)がある。また、F_3ブロックとの間では、ナイフ形石器と剥片４点を検出した。

F_3ブロック

これはＦ群の北東部に位置する。プランは東西約2.1ｍ、南北約2.0ｍの規模で、包含層の厚さは約0.15ｍを測る。南側は奈良時代の土坑によって攪乱されている。

礫は、ｓ－43地区を中心として径約１ｍの範囲に集中する。礫の大きさは比較的大きい。礫の接合例は２例ある。

石器は、北側からナイフ形石器(５)、南側から彫器(８)があるほか、大小の剥片6点が出土した。彫器は、このブロックで刃部を再生したらしく、接合する刃部再生剥片がF_4ブロックから２点出土している。

F_4ブロック

これはＦ群の南東部に位置する。プランは東西約1.1ｍ、南北約1.4ｍの規模で、包含層の厚さは約0.1ｍを測る。北側は奈良時代の土坑によって攪乱されている。

礫は少数で、全体的に小さい。礫の接合例はない。

石器は、彫器の刃部再生剥片(９・10)のほか、剥片２点がある。

第７節　Ｇ群の遺構（Ｐ1.10、137～139）

この群はＣ区の中央南東側に位置する。奈良時代の地山面の高さは、18.30ｍ～18.35ｍである。遺物の出土範囲は、東西約4.0ｍ、南北約4.5ｍの半円形を呈する。Ｇ群は礫が小範囲に密集するため、他の群のようにブロックに細別することができなかったが、旧石器時代の遺構の平面的広がりを明確に摑むことができた。

礫は、他の群のブロックよりもいくぶん密集している程度であり、量的にも他の群とほぼ匹敵している。中央部には、東西約0.5ｍ、南北約0.7ｍの長円形を呈する石囲いがあり、炉跡の可能性が強い。

礫は全体的に小さく破砕しており、消耗が相当激しかったことが考えられる。とくに多くの礫が全域にわたって接合し、礫の接合例は、56例に達する。こうした礫の接合関係は、人為的な移動を反映していると考えられるが、この群では礫が特定の場所に集中する傾向は認められない。また、炉跡と推定される石囲いの礫も、群全域にわたって接合関係を有する。

出土礫中、最も多く接合した例では12片が接合しており、原礫面のカーブから推定すると、大部分の礫は、約10cm前後の河原石であったことがわかる。これらの礫は、何回も場所を変えて使用するなかで、すこしずつ破損し、最終的には小さくなりすぎてその機能を果せず、放棄されたのであろう。しかし、残された最終的な状態では大きな礫の使用がみられないところから、新しい礫の補充がなく、かなり破砕しても、使用できたと考えられる。なお、Ｇ群から出土した礫は、母岩を識別することによって、50個程度であったことが知られる。

また、礫の垂直分布状況から推して、当時の生活面は、北側と南側で約0.1ｍの比高差があり、やや南に向って傾斜した地形であったことがわかる。

石器は、他の群に比べて、小さな剥片を最も多く出土したことが特徴としてあげられる。これらの二次調整剥片は、Ｄ′－51地区を中心として、径約２ｍの範囲に分布し、Ｄ′－52地区付近が最も密集している。これに対し北側では、ナイフ形石器(４・５)・翼状剥片(９・10・15)・大きな剥片(18)・翼状剥片石核(21)などの製品が出土する。東側では、すこし離れて単独で掻器(７)が出土し

ている。また、破損したナイフ形石器(１・２・６)は、剥片の分布範囲のほぼ中央部から出土している。おそらく製作中に破損したものであろう。そのほか、剥片の分布範囲のほぼ中央から出土した翼状剥片(12・17・19)を除けば、他の群の例と同様に、剥片の分布範囲の外辺部から、製品が出土する傾向を示している。こうした状況は、さきの掻器の場合と合わせて、群の内部における作業場所の違いがあったことを推測させる。

石器の接合例は、15例あり、剥片が密集する地域に多くみられる。大きく原礫面をもった４点の剥片が接合したほか、ナイフ形石器(３)では、先端部の背部調整剥片が約0.7ｍの距離をおいて接合した。また、破損した大形の翼状剥片(11)は、約0.7ｍの距離をおいて接合し、持ちやすいように器厚を薄くした翼状剥片(19)は、すぐ近くの調整剥片と接合した。

さて、石器の出土・接合状況をふまえて、石器製作についてみると、原礫面をもつ大きな剥片には２種類あって、それらの範囲も東側と西側ではまとまっており、別々の石核からの石器製作がおこなわれたことがわかる。しかも、同質の石材から作られた製品は見出せず、持ち去られている。また、多数出土した小さな剥片は、ナイフ形石器製作の際に剥離した二次調整剥片であるが、大きな原礫面をもつ剥片と一連の製作過程にあったものであるかどうかは、不明である。そのほかB′・F′－51地区出土の剥片は、Ｆ群の接合剥片(24・26)に接合する。このことは前述したが、ほかにも同質の剥片がまだ約７点あり、Ｆ群からの剥片だけが何点も飛びこんだとは考えがたく、両群における石器製作の関係が注意される。

第８節　Ｈ群の遺構（Ｐ1.11、140、141）

この群はＣ区の北東部に位置する。奈良時代の地山面の高さは、18.30ｍ～18.35ｍである。遺物の出土範囲は、東西約6.0ｍ、南北約5.0ｍであるが、北東部の一部は水路の掘り方によって攪乱されている。Ｈ群も、他の群と同じく遺物の分布範囲によって４つのブロックに分たれ、北側中央部の空白地を取り囲むように分布している。

H_1ブロック

これはＨ群の西側に位置する。プランは東西約2.7ｍ、南北約2.3ｍの規模をもち、包含層の厚さは約0.2ｍを測る

礫は、南側に分布するが、他の群に比べて全体的に小さく、少数である。礫の接合例はない。

石器は、礫の分布とほぼ一致している。破損したナイフ形石器(３)・翼状剥片(17)・翼状剥片石核(19)が南側に集中し、中央部から完形品のナイフ形石器(２)・使用痕のある剥片(９・10)、北側から翼状剥片石核の残欠を利用した掻器(13)が出土している。

石器の接合例は７例あり、翼状剥片石核(17・19)と剥片の接合、使用により破損したナイフ形石器(３)の接合例に分かれる。このブロックで使用されている石器の石材は、７種類である。鉄石英製の使用痕のある剥片は、付近から同質の剥片５点が出土し、このブロックで製作・使用されたことがわかる。そのほか剥片の遺存状況をみると、同質の剥片が最も多く検出されたのは、掻器(13)のもので、剥片(16)をはじめ11点あり、残りの石材は１点から６点位のものばかりである。そこで、剥片(11・12)が、製品として持ちこまれたものであるか、それとも１回の調整がおこなわれた結果であるかが問題になる。これは、Ｄ群・Ｆ群出土の縦長剥片１点の出土例と同じ状況であり、現在は石器として認められていないが、製品であった可能性が非常に高い。

H_2ブロック

これはH群の南東部に位置する。プランは東西約1.0m、南北約0.75mの規模をもち、包含層の厚さは約0.1mを測る。

礫は、X′－26地区の小範囲に限られており、量も少なく、大きさも小さい。礫の接合例はない。

石器は、東側で完形品のナイフ形石器(１)がある。出土位置は他の遺物よりもやや深い。また、西側から出土した剥片２点は、H_1ブロック出土の剥片(16)と同質の石材である。H_1ブロックから飛びこんだものであろう。

H_3ブロック

これはH群の北東部に位置する。プランは東西約0.6m、南北約1.2mの規模をもち、包含層の厚さは約0.15を測る。東側は水路の掘り方によって攪乱されている。

石器は、１cm前後の小さな剥片と、原礫面をもつ大きな剥片があるが、大部分はナイフ形石器の背部調整の段階に剥離されるような小さなものである。ナイフ形石器が製作されたブロックであろう。また、完形品のナイフ形石器(４)が南側で出土している。礫は検出されなかった。

H_4ブロック

これはH群の中央東側に位置する。プランは東西約0.6m、南北約1.2mの規模をもち、包含層の厚さは約0.2mを測る。北側は水路の掘り方によって攪乱されている。

石器は、H_3ブロック出土の石材と同質のものが大部分である。翼状剥片石核(15)と打面調整剥片(14)などのまとまりから、翼状剥片がこのブロックで剥離されたことが推定される。しかし、石核は中央部でH_1ブロック出土の翼状剥片石核と同様に破損しており、完形品の翼状剥片が剥離されたかどうか、詳細はわからない。北側ではナイフ形石器(５・６・７)が出土するが、(６・７)の２点は破損している。また、小さな翼状剥片は、H_3ブロック出土の剥片と距離約2.8mを隔てて接合し、H_3ブロックとの関係が密接であったことがわかる。礫は検出されなかった。

第Ⅴ章　遺　物

本遺跡から出土した旧石器時代の遺物は、大きく石器類と礫類に分けることができる。石器類には、ナイフ形石器・掻器・彫器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・翼状剥片・縦長剥片・剥片・翼状剥片石核・縦長剥片石核・叩き石がある。これらの多くは、旧石器時代の遺構に伴って原位置から出土した。石器の大部分は実測図を作製し、剥片においても写真で各ブロックごとに掲載した。実測図所載の石器の詳細については、後掲の群別出土石器観察表を参照されたい。

礫類は、旧石器時代の遺構から多量に出土しているが、大部分は使用によって破砕している。接合・復元すれば、拳大の河原石である。したがって、すぐ西を流れる女瀬川から持ちこまれた可能性が強い。

第１節　石器類（Ｐ1.12～64、77～120）

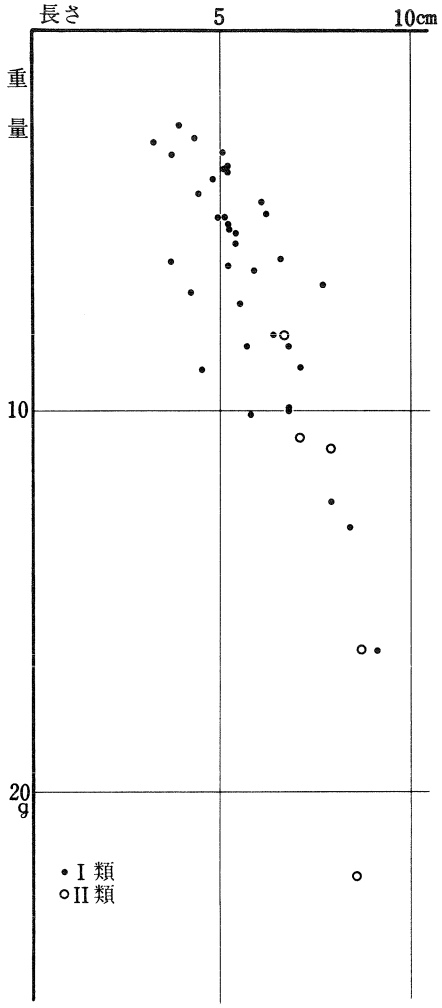
出土した石器は、瀬戸内技法によって剥離された典型的な翼状剥片などから、国府文化の時期でも最も技術的水準が高かったことが考えられる。これらの石器は、大部分が製品として本遺跡に持ちこまれたものである。

石器の石材は、大部分がサヌカイトを使用しているが、わずかにチャート・硬質頁岩・溶結凝灰岩・鉄石英・流紋岩・珪岩・粘板岩が、その石器の用途に応じて使用されている。すなわち、チャートは掻器１点・彫器３点・使用痕のある剥片３点・縦長剥片７点に、硬質頁岩は掻器１点に、溶結凝灰岩は使用痕のある剥片１点に、鉄石英は使用痕のある剥片３点に、流紋岩は縦長剥片１点に、珪岩は叩き石１点に、粘板岩は叩き石３点に、それぞれ使用されている（表２）。これは、ナイフ形石器・翼状剥片が、すべてサヌカイトを使用しているのと著しい対照をなしている。しかも、サヌカイト以外の石材の多くは、近畿地方に産出しないといわれているものであり、北陸地方から持ちこまれた可能性が非常に高い。

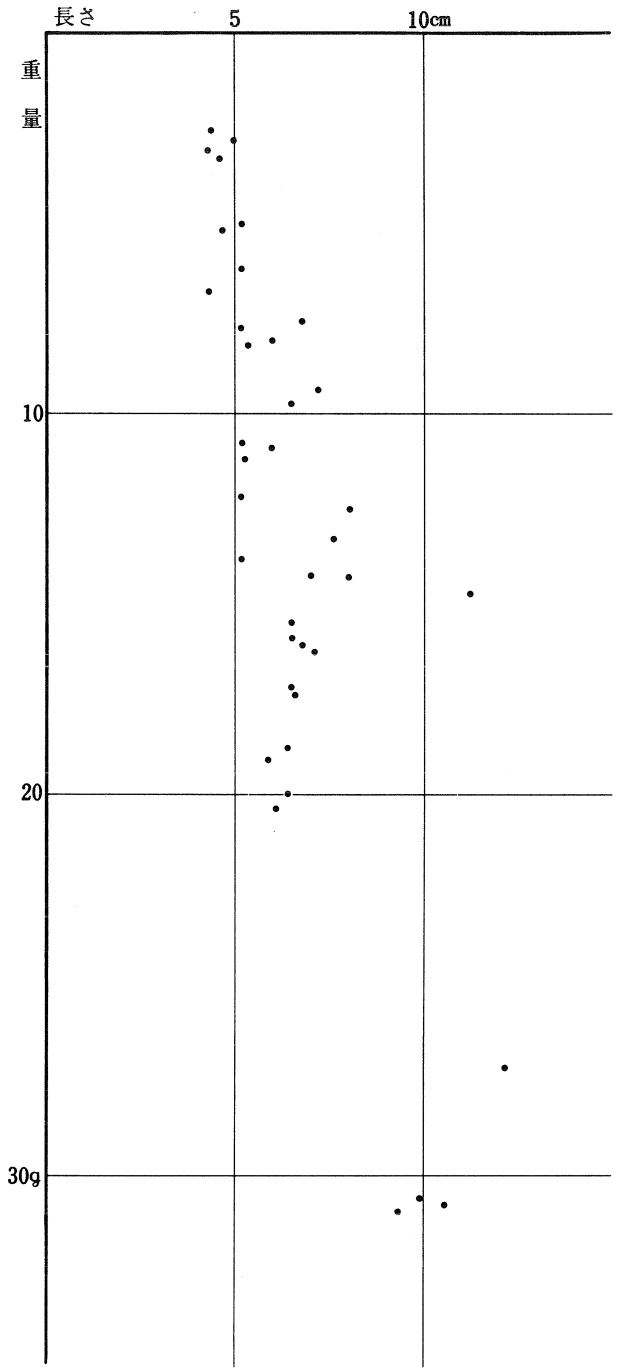
１．ナイフ形石器

ナイフ形石器は77点を数える。内訳は完形品42点、破損品35点で、すべてサヌカイト製である。Ｃ群出土のナイフ形石器(10)の１点を除けば、すべて翼状剥片を素材とした国府型ナイフ形石器の範疇に含まれるものである。

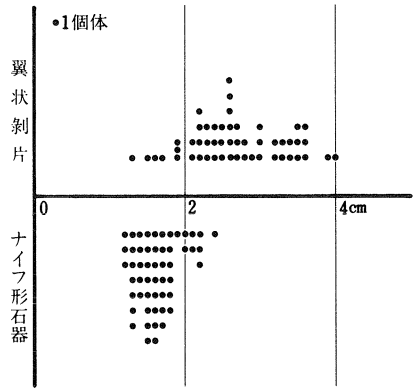
国府型ナイフ形石器は、素材である翼状剥片の形態によって、先端部の位置および背部調整のあり方が大きく左右され、大小各様のものが作られている。背部調整についてみると、刃縁のカーブと密接な関係にあることがわかる。翼状剥片の刃縁が、大きくカーブするものや先端部近くで急カーブするものは、背部調整が比較的直線に近い。また、刃縁があまりカーブしないものは、背部調整側をすこしカーブさせ、先端を中央線上近くにもってくる。このことは、背部調整が、より使用目的にかなう道具を作るための調整であって、先端を鋭利に尖らし、幅を一定にせばめていることがわかる。しかも、ナイフ形石器は、国府文化の石器組成のなかでは、最も二次調整が丁寧におこなれる器種であり、構成比率も高い(郡家今城遺跡では全製品中42%)ことから、主要な生産用具であったことはまちがいないであろう。



挿図7　ナイフ形石器の長さと重量



挿図8　翼状剝片の長さと重量



挿図9　ナイフ形石器と翼状剝片の幅

器種 / 群	ナイフ形石器		掻器	彫器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	翼状剥片		縦長剥片	剥片			翼状剥片石核	縦長剥片石核	叩き石	計
	完形品	破損品					完形品	破損品		3cm以上	3cm以下	サヌカイト以外				
A 群	5 39.75	9 43.2			1 13.7		4 62.8	1 3.2		3 11.85	104 30.45	1 1.9			1 24.2	129 231.05
B 群	1 2.4	1 8.7						7 45.4		2 6.5	4 1.1					15 64.1
C 群	6 45.85	4 9.5	1 43.4	2 43.7	1 4.3	5 85.75	8 102.15	7 45.35		12 68.65	83 86.4	12 17.2			1 20.0	142 572.25
D 群	1 8.0	5 23.1	1 13.25			2 22.9	9 140.85	1 11.1	3 25.3	13 169.6	30 11.1	6 22. 2	3 128.85			74 576.25
E 群	15 99.15	9 40.7	1 28.3			1 8.1	5 52.25	1 4.25	3 11.2	12 150.7	91 95.3	7 12.3	3 98.95	1 21.85		149 623.05
F 群	6 56.7		1 13.0	1 11.85			8 124.0	2 42.3	1 18.1	21 146.65	91 52.75	2 4.85	1 25.2		1 165.5	135 660.9
G 群	3 31.85	3 8.85	1 16.4				9 132.95	2 5.1		23 153.0	257 35.5	1 40.6				299 424.25
H 群	5 26.96	2 11.15	1 32.5			3 40.0		1 7.25		22 179.6	80 28.4	5 6.65	3 170.8			122 503.31
表採		2 17.25	5 124.05	1 13.6			1 6.8	1 5.6	1 9.4	14 134.2	20 12.5	2 6.3	1 22.5		1 91.2	49 443.4
計	42 310.66	35 162.45	11 270.9	4 69.15	2 18.0	11 156.75	44 621.8	23 169.55	8 64.0	122 1020.75	760 353.5	36 112.0	11 446.3	1 21.85	4 300.9	1114 4098.56

表1　群別石器組成一覧

各欄の上段は個体数（点）、下段は重量（g）

器種 / 石材	ナイフ形石器	掻器	彫器	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	翼状剥片	縦長剥片	叩き石	合計	製品重量（g）	石材別重量（剥片等含む）
サヌカイト	77	9	1	2	4	67			160	1388.36	3539.46
チャート		1	3		3		7		14	132.2	192.0
硬質頁岩		1							1	13.1	13.7 (1)
溶結凝灰岩					1				1	10.3	19.3 (2)
鉄石英					3				3	40.0	46.7 (3)
流紋岩							1		1	6.4	6.4
珪岩								1	1	165.5	165.5
粘板岩								3	3	115.5	115.5

(1) 剥片はD群に1点
(2) 剥片はC群に9点
(3) 剥片はH群に5点

表2　石材別石器組成

出土したナイフ形石器のなかから完形品を選びだして、長さ・重量をグラフにすると、挿図７のようになる。先述したように、背部調整や、大小、重量の違いは、素材とする翼状剥片に規定されるため、それだけをとりあげても、分類の基準とはならない。しかし、ナイフ形石器の機能に注目するならば、先端部の形状から、先端の尖っているもの(Ⅰ類)、先端のあまり尖らないもの(Ⅱ類)に分類することができる。Ⅰ類は、ナイフ形石器の大部分を占め、先端部は鋭利で、長さは５cm～６cmのものが最も多く、重量も10ｇまでのものが全体の80％を占める。それに比べてⅡ類は、数量も少なく、全体的に大きく重い(Ｐ1.83参照)。

また、ナイフ形石器の主剥離面(Ａ面)を下面に、先端部を上方に向けて置いた場合、右刃になるもの23点、左刃になるもの19点で、やや右刃のものが多い。

２．掻　器

掻器は11点を数える。石材別ではサヌカイト製９点、チャート製１点、硬質頁岩製１点である。素材には、剥片を利用したもの８点、翼状剥片石核の残欠を利用したもの３点であり、瀬戸内技法によって剥離される翼状剥片は、まったく利用されていない。これは、国府文化の基盤をなす瀬戸内技法が、ナイフ形石器と翼状剥片を作りだすための技法なのであって、獣皮の加工に用いる掻器等については、同技法による必要はなかったためと考えられる。また、器種構成のうえでは少数である。

しかしながら、掻器は、旧石器時代の生活復原に大きな意味をもっている。今回出土した掻器は、表採の５点を除き、Ｃ群からＨ群まで各群ごとに１点出土し、出土地点も群の外辺部に偏在する傾向を示している。これは、掻器の機能および使用場所が限られるためで、各群における分布のあり方を正確に摑むことによって、住居等の位置推定も可能になるであろう。

３．彫　器

彫器は４点を数える。石材別ではサヌカイト製１点、チャート製３点である。Ｃ群で２点、Ｆ群で１点が出土し、表採で１点を得ているが、器種構成のうえでは、少数である。

Ｆ群出土のチャート製の彫器は、刃部再生剥片２点と接合し、この遺跡で刃部の再生および使用がおこなわれていることが知られる。またＣ群出土のサヌカイト製の彫器も、刃部再生剥片が付近から出土している。これらのことから、彫器は刃部の消耗が激しく、使用場所において何回かの刃部再生剥離がおこなわれたと推定される。

４．二次加工のある剥片

二次加工のある剥片は２点を数える。いずれもサヌカイト製である。Ａ群出土のものは、部厚い翼状剥片の上半部を荒い調整によって切断し、四角形に整形している。Ｃ群出土のものは、翼状剥片の端部を利用し、先端部を細く尖らしている。Ａ群出土のものは削器、Ｃ群出土のものは石錐のような機能が考えられる。

５．使用痕のある剥片

これは11点を数える。石材別ではサヌカイト製４点、チャート製３点、溶結凝灰岩製１点、鉄石英製３点である。ここには、翼状剥片は加えていない。

サヌカイト製のものは、刃こぼれが面に対して比較的浅い角度のものが多いのに対し、サヌカイ

ト以外の石材のものには、とくに急角度で不規則な剝離痕が残っている。これは、使用痕のある剝片の機能に、「切る」「掻く」「削る」の３つが想定され、それぞれに使用される石材、使用方法に差異があったことを示している。「掻く」機能を有するものにはＣ群出土の溶結凝灰岩製のものがある。これは３ヵ所に径約１cmの円形の使用痕があり、対象物が細くて丸いものであったことがわかる。同様の使用痕を有するものにはＦ群出土の掻器の左側縁がある。また、ここには含めていないが、Ｈ群出土の翼状剝片石核の残欠(15)の右側縁にも同様の使用痕がある。これらは、１回ないし数回の使用によってできたものであるが、同じ個所を長期間使用すれば、Ｃ－15、Ｄ－10・11のように、刃縁が急角度の剝離痕によって凹凸の激しいものになることが推定される(Ｐ1.84参照)。

６．翼状剝片

翼状剝片は67点を数える。その内訳は完形品44点、破損品23点で、石材はすべてサヌカイトである。この遺跡における翼状剝片の出土点数は、ナイフ形石器に次いで多く、全製品中36％を占める。

出土した翼状剝片の全体的な特徴を列挙すれば、長さで最大のものはＤ－17の12.1cmで、最小のものはＥ－41の３.８cmである。平均的な長さは４cm～８cmのもので、約85％を占める。幅は、２cm～４cmのものが大部分で、ナイフ形石器の幅１cm～２cmに比べた場合、翼状剝片からナイフ形石器を製作するに際して、いかに幅をせばめることに力をそそいでいるかがわかる（挿図８、挿図９参照)。また、背面(Ｂ面)の稜線上に打撃痕を有するもの７点、器厚を薄くするため打面側から調整を加えたもの２点がある。

これらの翼状剝片は、出土剝片の母岩識別 ― 具体的には風化の進行度の違い ― から、この遺跡で製作されたものでないことが明らかである。また、それらの出土状況は、礫群の周辺に散在する傾向があって、翼状剝片が石器製作址と考えられる剝片の分布範囲とは、もともと直接関連をもたないことを示している。このことは、翼状剝片が、ナイフ形石器の素材としてだけではなく、製品としてこの遺跡に持ちこまれ、放棄されたことを示すと考えられる。翼状剝片にみられる使用痕のあり方は、この考えを補強すると共に、おそらくは削器として使用されたことをも示唆するものである。しかも、使用中に破損したものや、ナイフ形石器を製作する際の打撃によって破損したものを除けば、ほとんど完形品で、使用場所にそのまま放置されていた可能性が強い。

刃縁に残された使用痕についてみると、使用痕の認められるものは８例あって、刃縁の内彎部に集中するもの１例、刃縁のほぼ全縁にわたるもの４例、刃縁の一部にわずかに認められるもの３例である。これらの使用痕には、非常に小さなものから、比較的大きな剝離面を残すものまでさまざまであるが、全般に剝離角度は浅い。出土総数からすれば、使用痕の残っているものは少ないが、これは翼状剝片が成品でなく単なる素材に過ぎないということを意味しない。使用痕の有無は、対象物の差異(たとえば硬軟)あるいは、「切る」「削る」という機能の違いを表わしていると理解される。

顕著に使用痕の認められるＡ－20、Ｃ－19についてみると、Ａ面側の上半分に使用痕が集中すれば、Ｂ面側には下半分に限って残り、どちらの面でも一定方向の運動による刃こぼれであることがわかる。すなわち翼状剝片を右手で握り、刃部を下にして使用する場合、手前から外側に向って削る作業をしないと、このような刃こぼれが生じないことになり、現在のナイフの使い方と同じであったことがわかる(Ｐ1.85参照)。

そのほか、翼状剝片の使用方法を知るものとして、接合剝片の資料がある。Ａ－18は、小さな調整剝片が上端・下端に接合し、上端は打面側からの打撃によって切り出し状の刃部を作り、下端はＡ面側からの急角度の剝離によって直線に整形して、使用目的に沿った二次加工をおこなっている

ことがわかる。F－21は、扁平で幅広の大きなものであったが、長すぎたものか下半部を叩き折りによって整形している。G－19は、A面の打点近くのふくらみが邪魔になるらしく、打面側からの3回以上の打撃によって器厚を薄くしている。また使用により破損した結果、破棄されたと推定されるものでは、接合(C－20・F－17・G－11)してみると、全体的に器厚が薄く亀裂の跡が残っているものが多い。

7．縦長剥片

これは8点を数える。石材別ではチャート製7点、流紋岩製1点である。E群出土の破損品を除けば、すべて別の石材から剥離されたもので、製品としてこの遺跡に持ちこまれている。付近から石核および調整剥片は出土していない。

打面は全体的に小さく平坦であり、B面は1～3条の稜線が走るが、一部に原礫面を残すものが5例ある。B面の剥離方向は、下方からのもの(D－9)があり、一定していない。D－8は、B面左側縁中央部に小さな使用痕を残している。その他のものについては、まったく使用痕も認められず、使用方法などはわからない。

8．剥　　片

本遺跡出土の石器類の80%以上は、小さな剥片である。この項で剥片としてとりあげるのは、製品である翼状剥片・縦長剥片のような定形化した目的剥片でなく、まったく石屑と呼ばれるものである。これらの剥片は、一度石器および石核から剥離されると、ほとんど原位置から移動されることがなく、当時おこなわれた石器製作の内容や石器の使用場所を、端的に示すものと考えられる。

今回出土した剥片は、大きさ3cm以上と3cm以下のものに区別し、どちらの剥片が密集するかによって、石器製作の内容をある程度推定できるようにした。しかし、さきにも述べたように、この遺跡で製作されたほとんどの石器は、つぎのキャンプ地に持ち去られているため、剥片と製品が接合した例は少なく、石器製作の内容の全貌を知るまでに至っていないことを指摘したうえで記述をすすめる。

A群は、遺物の出土状況などから、翼状剥片からナイフ形石器の製作がおこなわれた場所であると推定される。ここから出土した剥片の大部分は1cm前後の小さなものであって、3cm以上の大きな剥片はほとんど出土していない。二次調整剥離作業では、3cm以上の大きな剥片はほとんど生じないとみてよかろう。A群と似た状況は、H_3ブロックでも観察される。また、これとは反対に、原礫面を残す大きな剥片が出土したD群・F群・G群は、翼状剥片石核の残欠が伴出し、石核から翼状剥片を剥離する作業段階があったことを示している。しかも付近からは、二次調整時に生じるような小さな剥片が多数出土し、石器製作の内容に違いがあるにもかかわらず、場所の移動がおこなわれなかったことがわかる。これらのことから、剥片の大小は、石器製作の内容を推定する指針となることが明らかとなった。

そのほか、剥片の出土によって知りえたことを次に列挙する。C_3ブロック出土の溶結凝灰岩の剥片9点は、石器製作後、製品と石核が持ち去られたことを意味する。D_1ブロック出土の硬質頁岩の剥片1点は、なんらかの原因で破損したものと考えられるが、この遺跡では少なくとも2点の硬質頁岩製の石器が使用されていたことがわかる。また、H_1ブロック出土の鉄石英の剥片5点は、H－8・9・10には接合せず、石核の持ち去りがあったことを示している。

9．翼状剥片石核

これは11点を数える。Ａ群・Ｃ群を除くすべての群から出土している。出土した石核は、すべて小さくなった残欠か、破損したものであり、破損しているＨ－19が最大のものである。

翼状剥片石核は、原石から大きな盤状剥片を何枚か剥離し、その盤状剥片を翼状剥片石核の素材として用いることが、すでに知られている。この遺跡出土の石核は、打面側に原礫面を残すもの４点と、平坦面をもつもの８点に分かれ、盤状剥片が石核の素材であったことがわかる。

また、翼状剥片石核に翼状剥片が接合したものは２例あり、相当小さくなった石核からでも、翼状剥片を剥離していることが知られる。そのほか、石核の残欠が掻器に再利用されているもの3例、使用痕が認められるもの１例を数える。

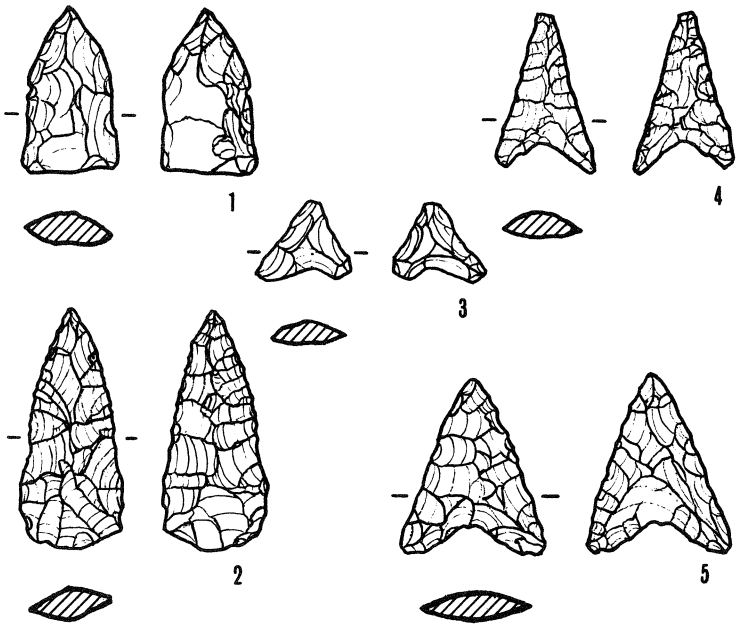
10．叩 き 石

叩き石は４点を数える。石材別にみると粘板岩製３点、珪岩製１点である。また、機能別にみると、打撃痕の違いによって、二次調整用のものと、石核から剥片を剥離するためのものに分けられる。Ａ群・Ｃ群からは破損した二次調整用の叩き石が出土し、Ｆ群からは珪岩製の打撃痕に覆われた剥片剥離用の叩き石が出土している。また、調査地域のＢ区からは、二次調整用の柱状の叩き石が出土している（Ｐ1.86、87参照）。

これらの叩き石は、打撃個所が相当消耗していることから、長期間にわたっての使用が考えられる。また、持ち方については、一定していなかったらしく、両端に打撃痕が顕著に認められる。石材は相当厳選されたらしく、珪岩製のものは北陸地方からわざわざ運ばれてきたものである。

11．石　　鏃（挿図10、Ｐ1.64－ｂ）

奈良時代の包含層から、縄文時代に属する石鏃が２点出土している。１は長さ22㎜、幅13㎜、厚



Scale 1:1

挿図10　縄文時代の石鏃

さ４㎜、重量１.２ｇを測る。石材はサヌカイトで、表面の風化が著しく、調整については明確でない。２は長さ32㎜、幅13㎜、厚さ５㎜、重量1.95ｇを測る。石材は灰緑色のチャートで、調整は非常に丁寧である。

3～5は、府立三島高校敷地内の調査によって出土したものである。３は旧石器時代の遺構（Ａ地点)から出土し、４・５はその付近からの表採である。３は長さ11㎜、幅12㎜、厚さ３㎜、重量0.3gを測る。石材はサヌカイトで、表面は風化が著しく白色化しており、調整は明確でない。４は長さ21㎜、幅14㎜、厚さ3.5㎜、重量0.6ｇを測る。石材は赤色のチャートで、調整は非常に丁寧におこなわれている。５は長さ23㎜、幅19㎜、厚さ４㎜、重量1.1gを測る。石材はサヌカイトで、他の２点に比べて風化はさほど進んでいない。調整は丁寧である。

第２節　礫　　類（Ｐ1.65～76）

礫は、旧石器時代の遺物のうち最も出土量が多く、今回は総重量95.2kgの出土をみた。旧石器時代の遺跡から普遍的に出土する礫は、大部分が火熱により表面が変化し、またしばしばタール状の付着物が検出されることから、土器を持たない当時の人々の調理用具であったことが推測されている。

今回出土した礫は、大部分が小さく破砕しており、とくに砂岩・泥岩・輝緑岩では、表面が火熱により著しい変化を示していた。しかし、礫の大部分を占めるチャートは、変成岩であるためか、表面にほとんど熱変化の痕跡を認められない。また、各群・各ブロックの石材別出土量は、表３に示すとおりである。

各ブロック出土の礫は、破砕しているため個体数は多くなっているが、母岩識別によってまとめてみると、本来は各ブロックあたり約20個～30個程度であったことがわかる。

礫の接合は、各ブロック内において多くみられたが、Ｃ群・Ｆ群のように、ブロックをとび越えて接合する場合もあり、礫の使用場所が人為的に移動されたことが推定される。とくにＣ群の場合、C_4ブロックの礫の大部分が、C_1ブロックに移動され使用されていたことは、接合関係と礫群の遺存状況から、ほぼ確実である。接合の結果復元できた礫は、拳大の大きさのもので、原礫面の状態から河原石であることがわかる。

こうした礫群が具体的にどのような状態で使用されたかは、発掘時の状況はもちろん、その後の整理作業を経てはじめて知りうるのであって、各ブロックの礫の出土状況だけからでは、すぐに理解することはできない。そこで、比較的良好な出土状況を示すＧ群についてみることにする。

使用された礫の最終的状態は明確でなく、中央部に径約０.７ｍの小さな石囲いが確認される程度である。しかも大部分は破砕して小さくなったものばかりで、大きい完形品といえるようなものはない。１回の使用でどれほどの破損があったかは不明であるが、使用のたびに新しい礫を補充したとは考えられず、小さく破砕した礫を続けて使用していたことが考えられる。

関東地方の旧石器時代の遺構から出土する礫には、拳大、幼児の頭大と小さないも石と呼ばれる３種類があり、いずれも同じ調理用のものであったことが推定されている。礫の機能は、礫の大小にはあまり関係がなかったとみるべきであろう。この遺跡についても同様なことが考えられ、破損しやすい礫でも、長期間にわたる使用が可能であったとみられる。

また、出土した礫のなかで特異なものとして、D_3ブロックの大きな完形礫と、F_1ブロックの径５㎝の円礫がある。大きな完形礫は、長さ22㎝、幅13㎝、厚さ10㎝、重量約４kgで、この遺跡出土

遺物のなかで最大のものである。出土状況も、礫群の西端に据えられたように置かれ、他の調理用礫との関係がどのようなものであったか注目される。小さな円礫は、他の礫と比べ形状も丸く完形品である。出土地点は、この遺跡で検出した唯一の土坑内の北側である。加工こそされていないが、当時の人々にとって特別な意味をもつものであったと考えられる。

群＼石材		チャート	砂岩	泥岩	石英斑岩	輝緑岩	粘板岩	安山岩	花崗岩	群別計
A		375 (10)		20 (1)	115 (3)		10 (1)			**520 (15)**
B		295 (6)	150 (4)	315 (2)		430 (1)				**1190 (13)**
C	C_1	6420 (15)	1200 (5)	2325 (5)						9945 (25)
	C_2	1960 (10)	1120 (3)	630 (5)	410 (3)	220 (2)				4340 (23)
	C_3	1100 (10)	800 (3)	250 (5)	460 (3)					2610 (21)
	C_4	2450 (15)	1220 (5)	400 (3)	260 (3)	95 (1)				4425 (27)
	計	11930 (50)	4340 (16)	3605 (18)	1130 (9)	315 (3)				**21320 (96)**
D	D_1	3320 (15)	1350 (5)	890 (5)	810 (3)	1050 (2)	35 (1)			7455 (31)
	D_2	2100 (15)	1345 (8)	510 (5)	150 (1)			140 (1)		4245 (30)
	D_3	8100 (15)	2700 (8)	2480 (10)	1295 (2)					14575 (35)
	D_4	1700 (15)		15 (1)	120 (2)					1835 (18)
	計	15220 (60)	5395 (21)	3895 (21)	2375 (8)	1050 (2)	35 (1)	140 (1)		**28110(114)**
E		4000 (20)	5100 (15)	1130 (10)	120 (2)	1300 (2)				**11650 (49)**
F	F_1	3080 (20)	1500 (7)	90 (3)	920 (3)					5590 (33)
	F_2	1060 (10)	200 (2)	240 (1)	160 (1)					1660 (14)
	F_3	1735 (10)	690 (5)	1170 (7)	150 (2)	1400 (1)				5145 (25)
	F_4	260 (5)	110 (2)	60 (2)	100 (1)					530 (10)
	計	6135 (45)	2500 (16)	1560 (13)	1330 (7)	1400 (1)				**12925 (82)**
G		11900 (30)	2600 (10)	2220 (10)	340 (2)				1175 (1)	**18235 (53)**
H	H_1	730 (15)	75 (2)	85 (2)	195 (3)					1085 (22)
	H_2	130 (5)		10 (1)	25 (1)					165 (7)
	計	860 (20)	75 (2)	95 (3)	220 (4)					**1250 (29)**
石材別計		50715(241)	20160 (84)	12840 (78)	5630 (35)	4495 (9)	45 (2)	140 (1)	1175 (1)	**95200(451)**

単位はｇ、(　)内は推定個体数

表3　群別礫一覧

第Ⅵ章　結　語

郡家今城遺跡西区の旧石器時代遺構は、府立三島高校敷地内のＡ地点同様、奈良時代の掘立柱建物跡を調査中に偶然発見されたものである。礫群などの遺構の一部は、奈良時代の遺構によって攪乱を受けていたが、Ｃ区全域から旧石器時代の多数の遺物と共に、当時の生活面を良好な状態で検出した。今回の旧石器時代遺構の調査は、近畿地方における初の本格的調査であり、西日本一帯に広い文化圏をもつ国府文化を究明するうえで、貴重な資料を提供するものといえよう。

最後に、今回の調査で検出した遺構・遺物から国府文化の分布・石器組成などに若干ふれて結語としたい。

郡家今城遺跡は、東西約2.5km、南北約3.0kmにおよぶ広大な低位段丘(富田礫層)のほぼ中央部に位置し、すぐ西側を女瀬川が南流する好条件を備えている。この低位段丘上には、北側の丘陵一帯も含め、旧石器時代の遺跡が数多く分布している。本遺跡の北約０.２kmには、昭和45年に２ｍ角の小規模な調査がおこなわれた郡家今城遺跡Ａ地点があり⑪、南東約０.８kmには、先年報告した津之江南遺跡がある⑫。また、北東約０.６kmには、現在も調査が継続中である郡家川西遺跡群がある。

うえにあげた遺跡の文化層はいずれも、低位段丘の上面を覆っている黄褐色砂質粘土の上部に包含されており、層序によって明確に分けることができないものであった。また、地表下約３.５ｍに存在する礫層までの層序についても、地質柱状図によるものであって、正確な観察がおこなれたことがなかった。そこで今回の調査では、包含層の北側で東西に細長くトレンチを設けて確認したところ、文化層のすぐ下層は、バラスが互層になった厚い堆積層であった。これらは堆積状況からみて、すぐ西側を流れる女瀬川の旧河道であったことが考えられ、遺跡は沖積地の上面に立地していたことになる。旧河道の堆積層をもって沖積地とするには、いささか問題があろうが、遺跡が形成される少し以前において、かなりの降雨量があり、女瀬川の流路が多量の土砂によって埋没し変化したことが考えられる。その後、水堆積層である砂質粘土が上部を薄く覆い、国府文化面が形成されたことになる。このことから、地表面下約３.５ｍの富田礫層の形成は、C^{14}年代測定により26,000±800Ｂ.Ｐ.の測定値が出されているが⑬、最上部の国府文化の所属年代を推測するには、手がかりとなしえない。しかも、低位段丘(富田礫層)の女瀬川から東半分は沖積地とする意見もあり⑭、国府文化はこれまで考えられていた以上に新しい時期の所産であるらしいことが考えられる。

本遺跡における旧石器時代の遺構は、Ｃ区の東西約40ｍ、南北約28ｍの調査範囲から、多数の礫群と石器群をブロックで検出した。礫群と石器群の多くは重複して検出されるが、石器群のなかでも製品と剥片類とは、調理用の礫群との関連によって、本質的な作業内容・時間的前後関係などにおいて区別されるべきものである。検出したブロック群は、４ブロックをもって１単位とするＡ群からＨ群までの８群に分けることができた。これらのブロックは、東京都野川遺跡においてはユニットと称され、遺跡の平面的な広がりと礫・石器の構成関係などによって、Ａ型からＦ型までの類型化をはかり、当時の人々の行動型を予見する方向が示されている⑮。

本遺跡で検出したブロックについては、火熱により破損した礫の接合状況によって、各ブロック間の有機的関係を調べた。その結果、とくにＣ群・Ｆ群では人為的に場所を移動して再利用されていることが推定された。この両群の礫の広がりは、長径約８ｍ、短径約６ｍのほぼ似た範囲を示し、いずれも４ブロックを包括していた。こうした４ブロックを１単位とする基準と分布範囲の大きさ

から、他の群をみていくと、D群はブロックを越える礫の接合はないが、ほぼ同様の広がりとブロック数を有する。G群は礫群をブロックに分離することができないけれども、他の群と同程度の出土量と分布状況から、1群にすることができる。H群についても、東側が攪乱されているが、同様な分布範囲とブロック数を有することから、1群にまとめることができる。そのほかのA群・B群・E群については、その分布範囲・出土状況が明確にできないが、他のブロック群については、C群・F群で得られた4ブロック1単位(群)は妥当すると考えられる。

これらの各群は、同様な大きさの分布範囲とブロック数を共通して有することから、集団を構成する特定の人々の活動範囲を示すものと考えられる。これらの群について出土した石器類からみてみると、国府文化の石器組成すなわちナイフ形石器・掻器・翼状剥片を各群ごとにセットで保有し、石器製作においてもほぼ似た作業段階を有し、使用した石核個体数が2～3個であることも共通している。とくに石器組成のなかで掻器は、各群に1点ずつ出土し、出土地点も中央部の礫群の外辺部に偏在する類似性を示している。このことは、群に分離する大きな目安になるとともに、この遺跡においてはさきの群の設定を補強する。このように各群から掻器が1点ずつ出土する例に、新潟県神山遺跡A_1群・B群⑯、東京都前原遺跡Ⅳ中2層文化の礫群⑰などがある。

そこで、掻器に注目して群の分析をすすめてみたい。掻器のもつ機能は、獣皮などの加工である。男女間の分業が存在したとすれば、その作業はおそらく女性に属するものであろう⑱。調理もまた同様である。一方、男性の作業としては、遺跡(キャンプ地)内では石器製作が考えられる。こうした男女の作業場が一体となって形成された群は、一家族の領域を示すものと考えてよいであろう。当時の集団が血縁的に強い結びつきを持った人々から構成されていたことは確実であって、家族単位で生活の場が営まれていたことは容易に理解されよう。こうして旧石器時代の遺構も、家族単位による生活領域と、男女間の分業の痕跡などから理解していくと、無規則に形成されたと考えられてきたブロックを相互に関連づけ、当時の生活をより一層復元することができるであろう。

さて、うえのようにこの遺跡を形成した集団を1単位(1群)をもって1家族とするならば、この集団は最低8家族以上からなっていたことになる。従来、旧石器時代の社会が普通2～3家族をもって1集団を形成していたと推定されていたけれども、ここではそれよりもかなり大きな集団が想定されることになる。各群が果たして同一時間内の所産であるのかについては、後の遺物の項でもふれるが、同一の石材で製作された石器が他の群から出土しないこと、遺物の包含状態が各群とも重複せず、垂直分布にしてもほとんど高低差がないことなどからも、各群は同時に存在した可能性が非常に高い。

つぎに、各群が家族単位で構成されたものであるならば、その中心となる住居(寝室)の位置が問題となるであろう。以下では、群の範囲が明確なC・D・F・G・H群をとりあげ、検討していきたい。

日本の旧石器時代の遺構面には、礫群・石器群・木炭粒群が検出されるが、その他の確実な遺構を検出できないのが普通である。この資料的限界から住居の位置は、外国例などを参考にして、一般に礫・木炭粒の集中個所を炉跡と推定し、それを中心とした住居の存在が想定されている⑲。しかしこの遺跡では、礫面の不均等な出土状況、最後の石器製作がおこなわれた場所であることなどから、礫群は、住居よりはむしろ、住居付近の屋外の作業場であったと理解される。しかも、礫の接合状況が示すように、礫の使用場所が移動していることは、礫群を住居にあてるならば、そのたびに住居もまた移動していることになり、不合理である。住居は、むしろ礫群の外辺部の何も出土していないところに存在していた可能性が高い⑳。しかしながら、前述したように遺構としては明確に

検出できないのであるから、周囲の礫群の分布状況・石器群の出土状況から推測していく以外にない。

ここで再び掻器に注目したい。掻器は、獲物の解体や調理ではなく、おもに獣皮などの加工に用いられることはさきに述べた。その作業には女性が携わるものとすれば、所有者もまた当然女性であり、作業内容から使用場所もおのずと限定されるであろう。また、各群の掻器の出土地点が礫群の外縁部、いいかえると群の外辺部であることは注目にあたいする。これをやや詳しくみれば、掻器は、あたかも弧状に配置されたブロック群の内弧の縁辺部から出土している。しかも、このような状況を顕著に示すD・G・H群では、内弧の内側には遺物は何ら検出されていない。さきに述べた礫群と住居の関係、掻器の出土状況や機能からくる特異性、ブロック群の配置などを考えあわせるならば、おそらくこの空間地にこそ、住居をあてるべきであろう。そうしてみれば、D群は西側中央部に、G群は東側に、H群は北側に、それぞれ住居を想定することができる。またさらに、掻器の出土地点の類似性から、C群は北側に、F群では南側中央部に、その位置を求めることができるであろう。他の群の住居推定位置については、礫群の広がる範囲でしか調査がおこなわれておらず明確でない。これからの調査においては、もっと広い範囲までの発掘が必要となるであろう。

つぎに、石器群について述べよう。石器製作によって作りだされる剥片類は、礫群と重複して検出されるが、作業内容・時間的前後関係によって、両者は分離されるべきものであることはさきに述べた。今回の調査では、出土したすべての石器を取りあげ、接合および母岩識別の作業をおこない、周囲の出土状況と考えあわせ石器個体がもっている特性を、なるべく正確に把握するようにつとめた。その結果、出土した石器の大部分は、製品の状態で持ちこまれたものであり、この遺跡内で製作された石器は意外に少数であることがわかった。一方、多数の剥片を剥離して製作された石器は、わずかのものを除いて、次のキャンプ地に持ち去られていることもわかった。このような石器製作は、この遺跡滞在期間中に、破損あるいは紛失した石器を補充するための作業であったと考えられ、つぎのキャンプ地に移動する直前におこなわれたことが推定される。こうして残された剥片類は、遺跡が形成された当初から使用されている礫群に比べ、やや高い位置から出土するのが普通である。本遺跡のように小さな剥片類が礫群の上部から出土する傾向は、野川遺跡においても注意されている。[21] これらのことから、当時のキャンプ地での石器製作は、一般的に移動を前提としておこなわれていたことが考えられる。

それでは、剥片類と、残された製品との関係はいかなるものであろうか。両者の出土地点の違いは、作業内容さらには当時の人々の生活を復元するうえで、重要である。そこで、製品と同様、持ちこまれ放棄されたパターンを示す礫群との関係に注目したい。礫群は調理に用いられたと考えられるが、その外縁部からは、とくにC_1ブロックやG群にみるように、翼状剥片・切削用のナイフ形石器(II類)・大形の使用痕のある剥片などが比較的まとまって出土する。しかもこれらは、各群ごとに4～8点が出土し、獲物の解体・調理作業に深く関わっていたことが考えられる。また、これらの器種は、全体的に完形品が多く残され、一遺跡のみの使用によって放棄された可能性が高い。

以上、今回の調査で検出した遺構・遺物について知見を述べた。つぎに、出土した石器から国府文化の石器組成・分布についてふれる。

出土した石器組成は、ナイフ形石器77点(7%)・掻器11点(1%)・彫器4点(0.4%)・二次加工のある剥片2点(0.2%)・使用痕のある剥片11点(1%)・翼状剥片67点(6%)・縦長剥片8点(0.7%)・剥片918点(82.2%)・翼状剥片石核11点(1%)・縦長剥片石核1点(0.1%)・叩き石4点(0.4%)である。各群別の明細は表1を参照されたい。

石器に使用されている石材は、サヌカイトが大部分であるが、わずかに他の石材を用い、石質の違いを利用した石器製作がおこなわれていることはすでに述べた。またサヌカイト以外の石材の大部分は、近畿地方に産出しない北陸産のものであって、当時の人々の交流を端的に示すものとして注意される。こうした近畿地方以外に産出する石材の使用は、高槻市津之江南遺跡、和歌山県土生池遺跡・野島壁川崎遺跡[22]などがある。そこで、日本海側の旧石器時代研究が最も進んでいる富山県をみると、瀬戸内技法によって製作された遺物は、直坂II遺跡第８ユニット[23]・七曲遺跡・安養寺遺跡第２群・眼目新丸山遺跡などから出土し、瀬戸内沿岸と日本海側との交流が確認されている[24]。今回の調査におけるサヌカイト以外の石材の検出は、国府文化の交流圏を近畿地方側で初めて明確に検証したものとして特筆される。また、日本海側の瀬戸内技法による遺物の分布は、さきにあげた以外に、新潟県御渕上遺跡、山形県越中山遺跡Ｋ地点と、さらに東方に広がっていることが知られる。こうした交流のおこなわれた時期は、富山県の先土器時代・縄文時代草創期の石器編年によれば[25]、富山県Ⅳ期ａに比定され[26]、ナイフ形石器文化のなかでも比較的新しい時期に考えられている。これは国府文化の時期が、近畿地方の旧石器時代編年において最も古く位置づけられているのと矛盾する。しかし、瀬戸内技法は、石刃技法の横形化と考えられること、また国府文化の包含状態が全体的に浅いことから、国府文化を新しく考える方向にあり、他の地域との編年対比はこれからの調査結果にまつべき点が多い。

それにしても、当時の人々の行動範囲は、我々が考えていた以上に大きく、広範囲にわたっていることがわかった。しかし、こうした集団の交流が、どのような理由でどの程度おこなわれていたかは、依然不明である。これからの大きな研究課題の１つとなろう。

つぎに、国府文化と瀬戸内技法の関係についてみていこう。国府文化の石器組成は、標式遺跡である藤井寺市国府遺跡・二上山北麓の旧石器時代遺跡群[27]・京都市広沢池[28]などにおいて、国府型ナイフ形石器、翼状剥片、サイド・スクレイパー、縦長剥片、翼状剥片石核、縦長剥片石核と、いずれもほぼ似た様相を示している。今回の発掘調査による出土遺物は、サヌカイト以外の石材の多用を示した以外には、ほとんど基本的に同様な石器組成をみせている。いままでの資料が限られたものであるだけに、伴出遺物をも含めた石器全体の分析・比較はできないが、小さな使用痕のある剥片などの石器がとくに注意される。従来ないとされていた彫器なども少数ながら存在することが確認された。この遺跡の石材別による石器組成についてみると、サヌカイトの石質と密接な関係にある瀬戸内技法によって製作されたものは、翼状剥片とナイフ形石器であり、製品全体の約80％を占める。そのほかの器種については、サヌカイト以外の石材が使用され、石質の違いを利用した器種構成であったことがわかる。ただ、この遺跡は当該集団が北陸地方との交流をおこなったのちに形成されたと考えられるので、多種の石材の使用を伴うこの遺跡の石器組成を、一般的な国府文化の石器組成としていいものか、疑問が残る。この点については、サヌカイトの石材のみを使用した場合の石器組成について明確なものがないため断定はひかえておく。

なお、二上山北麓で採集される截断面ある石器は、国府文化期の遺跡からは出土しないものであり、石器製作技術からみても新しい時期のものと推定[29]される。昭和52年度の郡家川西遺跡55－L･P地区の調査では、時期不明の縄文式土器片と打製石斧・削器・石核・多数の截断面ある石器が一括で出土し、截断面ある石器を細石器石核の残欠と推定している[30]。

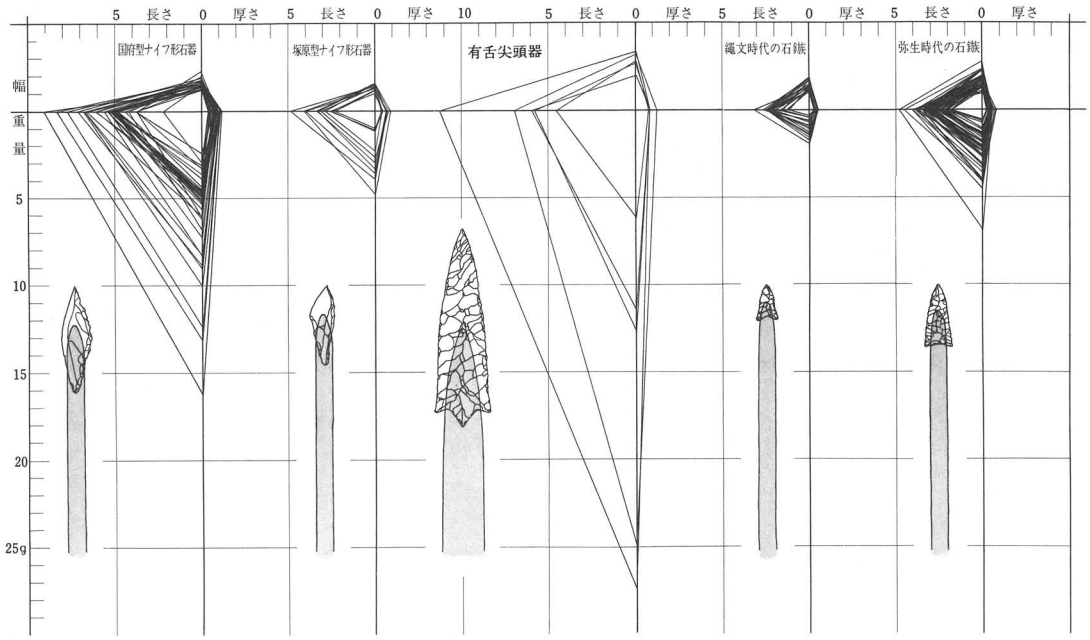
最後に、ナイフ形石器の機能について少しふれてみたい。ナイフ形石器は、石器組成のなかで最も高い比率を占め、他の石器に比べて二次調整が丁寧にほどこされていることから、主要な生産用具であったと考えられる。ナイフ形石器の大部分は、鋭利な刃縁を有することから、かって切削具

と考えられたことがある。しかし、ナイフ形石器文化の石器組成には、そのほかに狩猟具がないこと、ナイフ形石器の刃縁に刃こぼれがみられず、その他の器種に切削具と考えられるものがあることから、現在では鋭利な先端部に注目し、刺突具であったとされている。しかも、ナイフ形石器文化期の狩猟方法は、新石器時代の弓矢の使用以前の比較的生産性の低い段階と考えられ、片側縁加工のナイフ形石器から両面加工のポイントへと石器製作技術が変遷していったと推測されている。[31] その一方では、ナイフ形石器の大きさ・使用痕などから鏃であったとする意見もあり、[32] いまだナイフ形石器の機能については、完全な意見の一致をみていない。ナイフ形石器の本来の機能を推定するためには、石器自身が使用目的にそってどのような部分に重点をおいて製作されているか、正確に把握する必要がある。

そこで、今回出土した完形品のナイフ形石器の長さ・幅・厚さ・重量を計測し、塚原型ナイフ形石器、有舌尖頭器、縄文時代の石鏃、弥生時代の石鏃と比較したのが、挿図11である。[33] この図から興味ある事実がよみとれる。

国府型ナイフ形石器の長さは、石鏃に比べてやや長く、有舌尖頭器に近いものが多い。重量は、石鏃が５ｇ未満であるのに対し、最高16.25gまでのバラエティがあり、有舌尖頭器の小さなものに似る。厚さについては、石鏃に比べてわずかに厚い。また、装着する柄に規定される幅は、最大幅の計測値であるが、ナイフ形石器・石鏃がともに約1.5㎝前後であるのに比べ、有舌尖頭器では約2～3.5㎝に達する。

こうした計測値や石器の形状は、石器製作技術と不可分に結びついている。国府型ナイフ形石器は、翼状剥片を素材として、先端部を尖らし、幅をせばめるために丁寧な背部調整をおこなっているが、断面は台形で厚く、結果的に重量も重くなる。これに対し、有舌尖頭器・石鏃など両面加工の石器は、不定形な剥片から非常に丁寧な調整をおこなって形を整えるため、均一な長さ・幅・厚さを有し、断面は扁平な凸レンズ状を呈し、重量も軽くなる。このような、石器の素材を剥離する段階に重点をおくか、素材の制約を受けず、両面加工の技術をもって製作するかという石器製作技術の違いは、石器の形状や計測値にそのまま反映してくる。こうみていくと、ナイフ形石器と石鏃



挿図11　ナイフ形石器・有舌尖頭器・石鏃の長さ・幅・厚さ・重量

における重量の大きな差異は、石器製作における調整方法の差であり、両者の機能の違いを意味するものとはいえない。

さて、石器を矢柄あるいは木柄に装着する場合、石器の幅は、当然矢柄あるいは木柄に制約を受けると考えられる。縄文・弥生時代の石鏃の幅は、まさに経験的に使用されている矢柄の直径1cm前後に適合している。有舌尖頭器も、これを槍と考えるならば、それにふさわしい木柄を装着するに足る幅を有している。それでは、ナイフ形石器の幅が、石鏃とほぼ等しいことは、いかなる意味をもつのであろうか。矢柄は、それ自体で最低20～50gの重量を有する。これに仮に25g程度の先端部を装着したとしても、飛翔することは明らかである。しかも、ナイフ形石器の重量が5g前後であることを考えれば、これが大部分は、鏃としての機能を有していたものであろう。また、小形・軽量な縄文時代の石鏃は、ハンターよりはむしろ、定住者としてのより安定した採集民の生活を反映しているものと考えられる。

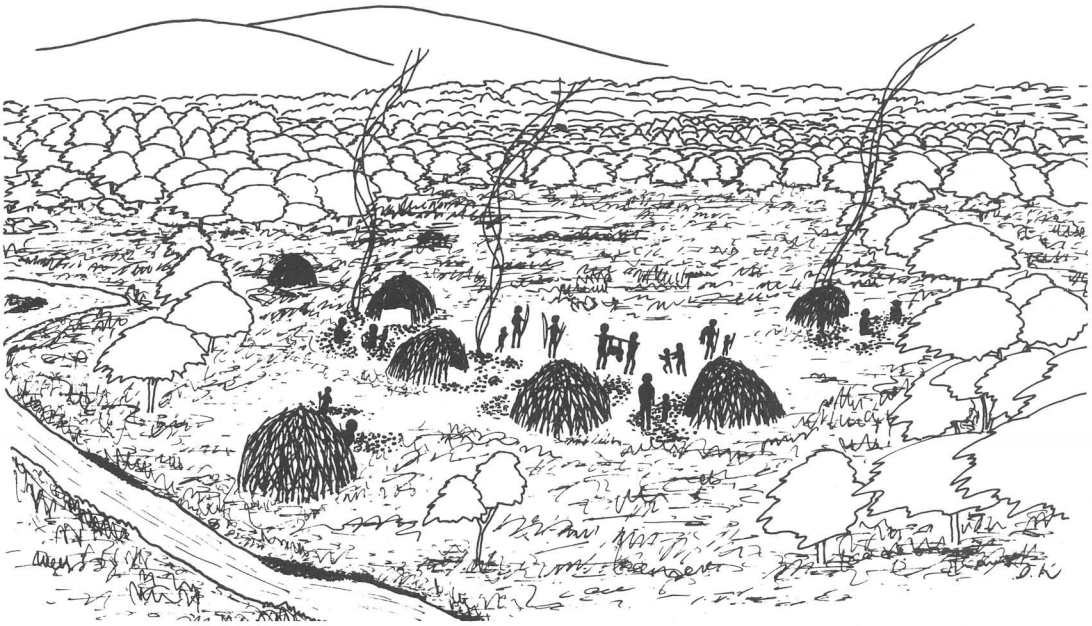
ナイフ形石器の使用痕については、この遺跡のものがサヌカイト製であるため明確に残っていない。しかし、滝沢浩氏が提示されたナイフ形石器の擦傷の位置と方向は、北海道川東羽田発見の石刃鏃においても顕著に認められ、鏃の機能に適応する使用痕として評価されている。[34] また、基部調整のあり方などからもナイフ形石器が鏃に使用されたことが推測される。

さて、ナイフ形石器を組み合わせ具とする見解があるけれども、以下の諸点から否定的に考えている。すなわち、出土状況から、ナイフ形石器がまとまって、あるいは組み合わせ具を想定させるような出土を示さないこと、彫器の出土が際立って少数であること。また、ナイフ形石器の形状が多様で、断面が扁平でなく台形や三角形を呈すること、刃縁に刃こぼれなどが認められず、基部調整をおこなっているものがあること、などである。

さきにナイフ形石器に鏃としての機能を推定した。ナイフ形石器の多数の出土は、さきの推定を仮に考慮しないとしても、それを装着する木・竹類の加工を考えないわけにはいかない。おそらく石器製作と一体となって、木などの加工がおこなわれていたのであろう。こうした「木工」の機能を有する石器には、急角度の使用痕のある剝片をあてることができよう。これらは小さな剝片が利用されていることから、大きいもの、あるいは太いものを加工するには適さない石器であることも注意される。

以上、ナイフ形石器の機能について述べてきた。ナイフ形石器だけでなく、出土状況や他の石器とのセットなど総合的にみていくと、ナイフ形石器は、実際上は石鏃としての機能を有するものであった可能性が非常に高い。しかしながら、現段階ではナイフ形石器の機能を決定できるだけの資料はなく、将来にまつほかない。

（追　記）今回報告した調査地点から北東約600mの郡家川西H地点では、舟底形石器の製作がおこなわれたキャンプ地を検出した。（昭和52年11月）



挿図12　郡家今城遺跡の想像復原図

註

① 西川団体研究グループ・桂高校地学グループ「高槻北方丘陵の大阪層群」(『地球科学』24巻6号 1970)

② 田代克己・堀江門也『嶋上郡衙跡発掘調査概要・II』 大阪府教育委員会　1972

③ 大阪府教育委員会「弁天山古墳群の調査」(『大阪府文化財調査報告』第17輯　1967)

④ 冨成哲也・大船孝弘「津之江南遺跡発掘調査報告書」(『高槻市文化財調査報告書』第8冊　1976)

⑤ 西谷　正「紅茸山及岡本山東地区遺跡の調査」(『高槻市文化財調査報告書』第2冊　1966)

⑥ 森田克行・橋本久和「安満遺跡発掘調査報告書」(『高槻市文化財調査報告書』第10冊　1977)

⑦ 原口正三『上田部遺跡調査概報』1969

⑧ 橋本久和「奥坂古墳群発掘調査報告書」(『高槻市文化財調査報告書』第9冊　1976)

⑨ 原口正三「先土器時代」(『高槻市史』第6巻　考古編　1973)

⑩ 大船孝弘・橋本久和・森田克行『嶋上郡衙跡発掘調査概要・2』高槻市教育委員会　1978

⑪ ⑨に同じ

⑫ ④に同じ

⑬ 市原　実・木越邦彦「大阪付近の沖積層・段丘堆積層から産出した泥炭・木材の絶対年代」(『地球科学』58　1962)

⑭ 小林健太郎 「高槻の自然環境」(『高槻市史』第1巻　本編I　1977)

⑮ 小林達雄・小田静夫・羽島謙三・鈴木正男「野川先土器時代遺跡の研究」(『第四紀研究』第10巻第4号　1971)

⑯ 芹沢長介・中村一明・麻生　優『神山』 津南町教育委員会　1959

⑰ 小田静夫・金山喜昭「前原遺跡Ⅳ中2層文化の礫群」(『考古学研究』第23巻第1号　1976)

⑱ 東アフリカの狩猟採集民ハッァピ族の女性の仕事を見ると、果実・根茎の採集を主とし、狩猟においても、獲物の発見や追跡に加わっている。しかし、女性の役割はむしろ獲物の解体後の処理

にある。特に皮をなめして敷物・衣料をつくること、アキレス腱の部分から、腱をとってほぐし、糸のようにしてからより合せ紐にする、などである。富田浩造「ハッァピ族の生活と社会」（『アフリカ社会の研究』上巻　1970）

⑲ 近藤義郎「先土器時代の集団構成」（『考古学研究』第22巻第４号　1976）
橋本　正「直坂Ⅱ遺跡第５ユニットから」（『季刊どるめん』第15号　1977）

⑳ 春成秀爾「先土器・縄文時代の画期について(1)」（『考古学研究』第22巻第４号　1976）
小野　昭「後期旧石器時代の集団関係」（『考古学研究』第23巻第１号　1976）

㉑ 野川遺跡調査会「東京・野川遺跡の発掘調査」（『考古学ジャーナル』第49号　1970）

㉒ 中原正光「紀北の先土器時代―ナイフ形石器の広がりについて―」（『歴史手帖』第３巻４号　1975）

㉓ 橋本　正『富山県大沢野町直坂Ⅱ遺跡発掘調査概要』　富山県教育委員会　1976

㉔ 橋本　正「富山県における先土器時代石器群の概要と問題」（『物質文化』24　1975）　なお、富山県から出土した旧石器時代の遺物は、県立埋蔵文化財センターで橋本氏から見せていただき、石材等についても種々教示を受けた。

㉕ 松藤和人「国府型ナイフ形石器をめぐる諸問題」（『プレリュード』19　1974）

㉖ ㉓に同じ

㉗ 同志社大学旧石器文化談話会『ふたがみ―二上山北麓石器時代遺跡群分布調査報告書―』　1974

㉘ 四手井晴子・木村孝雄・武山峯久「京都市広沢池・沢池の石器」（『古代文化』第24巻第10号　1972）

㉙ 柳田俊雄「截断面ある石器」（『ふたがみ』　1974）

㉚ ⑩に同じ

㉛ 稲田孝司「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」（『考古学研究』第15巻第３号　1969）

㉜ 宮坂英式・宮坂虎次『蓼科』尖石考古博物館研究報告叢書　第２冊　1966
滝沢　浩「ナイフ形石器の機能」（『下総考古学』第１号　1964）

㉝ 計測・図化した資料は以下のとおりである。重量が明らかでないものは省略せざるをえなかった。
国府型ナイフ形石器：郡家今城遺跡出土のナイフ形石器のうち、Ⅰ類の完形品30点
塚原型ナイフ形石器：高槻市塚原遺跡表採、完形品11点　『津之江南遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会　1976
有舌尖頭器：５点「山城盆地における有柄尖頭器の資料」（『古代文化』20－8・9　1968）、『泉南郡阪南町鳥取地区埋蔵文化財分布調査報告書』大阪文化財センター　1976、前掲『津之江南遺跡発掘調査報告書』
縄文時代の石鏃：17点「三島地方採集の石器」（『大阪文化誌』３－２　1977）
弥生時代の石鏃：40点『勝部遺跡』豊中市教育委員会　1972　より各型式上下限を抽出。

㉞ 戸沢充則・鶴丸俊明「北海道川東羽田発見の石刃鏃とその遺跡」（『考古学集刊』第４巻第２号　1968）

石　器　観　察　表

	図　版	名　称	法　量	重　量			備　考
PLATE	12 － 89	ナイフ形石器	長さ　21 幅　6 厚さ　4.5	0.55			上段は石材
群別個体番号	1		単位はcm	単位はg			

表４　Ａ群出土の石器観察表（１～21）

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
12－89 1	ナイフ形石器	長さ 21 幅 6 厚さ 4.5	0.55	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○下半部折損 ○断面は三角形	K－60	サヌカイト
12－89 2	ナイフ形石器	長さ 40 幅 16 厚さ 7	4.20	○素材は翼状剥片○先端は尖っていない○下半部折損○刃部は鋭利で下端近くにキズあり ○断面は三角形	M－59	サヌカイト
12－89 3	ナイフ形石器	長さ 51 幅 16 厚さ 7	5.20	○素材は翼状剥片○先端は尖らずやや丸味をおびる○基部は刃部下半がＡ面側からの調整によって細くなっている○Ａ面には背部調整の打撃痕が３ヵ所残る○基端部は他の剥離面が小さく残る○断面は三角形	M－60	サヌカイト ○完形品（左刃）
12－89 4	ナイフ形石器	長さ 52 幅 14 厚さ 7	4.90	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端は直線に整形されている○刃縁は鋭利でやや外彎し、Ｂ面の稜線はほぼ平行する○断面は台形	K－61	サヌカイト ○完形品（右刃）
12－89 5	ナイフ形石器	長さ 37 幅 15 厚さ 9	3.25	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端折損 ○断面は三角形	K－60	流理構造のみえる サヌカイト ○完形品（右刃）
12－89 6	ナイフ形石器	長さ 27 幅 13 厚さ 4	1.10	○素材は扁平な翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端折損○刃縁は直線で、Ｂ面の稜線は刃縁にほぼ平行する ○断面は台形	K－59	流理構造のみえる サヌカイト
12－89 7	ナイフ形石器	長さ 35 幅 13 厚さ 9	4.10	○素材は翼状剥片○先端折損○基端はＡ面からの打撃によって整形○稜線が少し残る ○断面は三角形	K－61	サヌカイト
12－89 8	ナイフ形石器	長さ 56 幅 13 厚さ 5	4.30	○素材は翼状剥片○先端・基端とも尖っていない○基端は原礫面を残す○刃縁はやや外彎する○刃縁に平行にＢ面に稜線あり○断面は台形	L－60	サヌカイト
12－89 9	ナイフ形石器	長さ 56 幅 22 厚さ 10	10.70	○素材は翼状剥片○両端は尖っていない○中央部で折れる○Ｂ面に刃縁とほぼ平行する稜線あり○Ａ面には背部に接して多数の打撃痕あり○断面は台形	上半部 M－60 下半部 K－58	サヌカイト ○約1.8 m離れて接合
13－89 10	ナイフ形石器	長さ 18 幅 10 厚さ 5	0.75	○素材は翼状剥片○先端・中央部とも折損 ○断面は三角形	K－58	サヌカイト
13－89 11	ナイフ形石器	長さ 28 幅 15 厚さ 10	3.95	○素材は翼状剥片○先端・基端とも折損 ○断面は三角形	M－60	サヌカイト
13－89 12	ナイフ形石器	長さ 77 幅 20 厚さ 8	11.20	○素材は翼状剥片○先端は尖る○基端は尖らず、原礫面を残す○背部調整中に基部近くで２点に破損○Ｂ面中央部にわずかに稜線残る○断面は台形	先端部 M－59 基端部 M－60	サヌカイト ○約0.35m離れて接合
13－90 13	ナイフ形石器	長さ 48 幅 17 厚さ 9.5	5.50	○素材は翼状剥片○２～３点に破損、下半部は欠失 ○背部調整は荒い ○断面は三角形	先端部 K－60 中央部 及び調 整剥片 J－61	サヌカイト ○背部調整剥片も接合する

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
13－90 14	ナイフ形石器 A群	長さ 63 幅 27 厚さ 13	18.75	○素材は翼状剥片○先端折損○背部および基端に原礫面を残す○B面に稜線をもたない ○断面は三角形	L－58	サヌカイト
13－90 15	二次加工のある剥片	長さ 40 幅 30 厚さ 14	13.70	○素材は厚く剥離面の多い翼状剥片○A面側から強く2回、弱く数回の打撃によって四角形につくる○右辺縁を刃部として使用可能○断面は台形	M－60	サヌカイト
13－90 16	翼状剥片	長さ 45 幅 22 厚さ 4.5	4.65	○扁平○上端部は斜めに下端部は直角に折れている○打点は山形に調整された頂点にある○断面は平行四辺形	K－60	風化のすすんだサヌカイト
14－90 17	翼状剥片	長さ 74 幅 25 厚さ 7	12.90	○典型的形態○上端部は新たに折損○下端部は細く尖り原礫面を残す○打点は山形に調整された頂点にある○刃縁中央部に小さな刃こぼれあり○断面は平行四辺形	N－59	流理構造のみえるサヌカイト ○P1.85を参照
14－90 18	翼状剥片	長さ 51 幅 24 厚さ 11	12.15	○典型的形態○上端部は打面調整部から2回の剥離をおこない切出し状縁につくる○下端部はA面側から急角度の調整によって折られている	K－60	サヌカイト○上端部・下端部の剥片ともにK－60出土
14－91 19	翼状剥片	長さ 34 幅 18 厚さ 7	3.70	○典型的形態○下半大半を折損○打面に打撃痕○刃部上端部近くに小剥離あり ○断面は平行四辺形	M－59	サヌカイト
14－91 20	翼状剥片	長さ 97 幅 35 厚さ 11	30.65	○大形の典型品○上端は、細く尖り下端は尖っていない○打面調整は小さくていねい○打点は山形の頂点にある○刃縁B面は下半部、A面は上半部に刃こぼれ顕著○断面は平行四辺形	K－59	サヌカイト ○P1.85を参照
14－91 21	叩き石	長さ 53 幅 26 厚さ 13	24.30	○扁平な角柱状○下半部折損○上端の尖った部分に打撃痕顕著	K－60	粘板岩

表5　B群出土の石器観察表（1～5）

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
17－91 1	ナイフ形石器	長さ 38 幅 12 厚さ 7	2.40	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端は尖らず、原礫面を残す○B面は稜線なし ○断面は三角形	J－8	流理構造のみえるサヌカイト ○完形品（左刃）
17－91 2	ナイフ形石器	長さ 46 幅 19 厚さ 7	8.70	○素材は典形的翼状剥片○先端部折損○基端は直線に整形されている○B面の刃縁には小さな刃こぼれあり ○断面は台形	H－11	気泡の多いサヌカイト
17－91 3	翼状剥片	長さ 31 幅 24 厚さ 5.5	3.20	○扁平○上端は尖る○下半部折損	J－8	風化の著しいサヌカイト
17－91 4	翼状剥片 及び　石核	長さ 34 幅 24 厚さ 10	9.35	○打面調整は比較的ていねい○翼状剥片底面に多数の亀裂あり○下半部を折損する翼状剥片と翼状剥片石核が接合する	G－10 石核 G－9	サヌカイト 石核の正確な出土位置不明
17－91 5	翼状剥片	長さ 47 幅 26 厚さ 9	10.15	○左右不揃い、両端とも尖っていない○A面上端部には斜めの他の剥離面あり ○断面は台形	I－10	風化の著しいサヌカイト

表6　C群出土の石器観察表（1～36）

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
18－92 1	ナイフ形石器	長さ 24 幅 13 厚さ 6	1.90	○素材は翼状剥片○先端は細く尖る○背部調整中に下半部を折損 ○断面は台形	P－19	サヌカイト
18－92 2	ナイフ形石器	長さ 48 幅 13 厚さ 7	3.90	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端は直線に整形されている○B面は稜線を残す ○断面は台形	P－25	サヌカイト ○完形品（左刃）
18－92 3	ナイフ形石器	長さ 50 幅 14 厚さ 5	3.60	○素材は翼状剥片、B面に2面の剥離面あり○両端とも鋭利に尖る○刃縁中央部から基部に小さな刃こぼれあり ○断面は台形	Q－25	サヌカイト ○完形品（左刃）
18－92 4	ナイフ形石器	長さ 61 幅 18 厚さ 5	4.80	○素材は扁平な翼状剥片○両端ともに尖るが、先端がより鋭利○刃縁はやや外彎し、B面の稜線は刃縁に平行する ○断面は台形	R－23	サヌカイト ○完形品（左刃）
18－92 5	ナイフ形石器	長さ 78 幅 18 厚さ 11	12.40	○素材は翼状剥片、稜線上に打撃痕残る○先端は鋭利に尖る○基端は尖っていない○背部調整はA面から急角波におこなった後B面からもおこなっている○刃縁は先端部近くで大きく外彎する ○断面は三角形	Y－24	サヌカイト ○完形品（右刃）
18－92 6	ナイフ形石器	長さ 51 幅 17 厚さ 7	5.10	○素材は翼状剥片、刃縁が大きく外彎する○先端は鋭利に尖る○基端は丸く整形されている○中央部先端よりで折れている○刃縁下半部に刃こぼれあり ○断面は台形	上半部 O－25 下半部 P－25	サヌカイト ○完形品（左刃） ○約0.3m離れて接合
18－92 7	ナイフ形石器	長さ 16 幅 11 厚さ 5	0.80	○素材は翼状剥片○先端は丸味おびる○背部調整中に下半部折損 ○断面は台形	U－19	サヌカイト
18－92 8	ナイフ形石器	長さ 25 幅 12 厚さ 6.5	1.70	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○背部調整中に下半部折損 ○断面は台形	U－18	サヌカイト
18－92 9	ナイフ形石器	長さ 31 幅 19 厚さ 8	5.00	○素材は翼状剥片○基端は直線に整形されている○背部調整中に上半部折損か ○断面は台形	T－19	サヌカイト
19－92 10	ナイフ形石器	長さ 86 幅 25 厚さ 9.5	16.25	○素材は不定形の剥片、原礫面を残す○先端は尖っていない○基部はA・B面とも両側縁から調整をおこない、細く整形されている○B面右側縁に2～5㎜の小さな刃こぼれあり ○断面は刃部が三角形、基部は六角形	N－21	サヌカイト ○完形品（右刃）
19－93 11	彫器	長さ 50 幅 30 厚さ 21	30.20	○素材は不定形の剥片、原礫面を残す○薄くなっている縁部を上下端から加撃して刃部をつくる	N－21	サヌカイト○刃部を再生した剥片がN－19から出土
19－93 12	彫器	長さ 39 幅 27 厚さ 16	13.75	○素材は不定形の剥片、分厚く、剥離面多数○上端から2回以上の打撃を加えて斜めの刃部をつくる○上面に打撃痕あり	V－25	黄灰色のチャート
19－93 13	二次加工のある剥片	長さ 39 幅 17 厚さ 7	4.30	○素材は翼状剥片の端部○上端部はA面から上端を尖らすように二次加工をおこなう○下端は尖らず、原礫面が少し残る ○断面は台形	R－25	サヌカイト ○翼状剥片の再利用か

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
20－93 14	使用痕のある剥片 C 群	長さ 70 幅 29 厚さ 10	16.00	○素材はやや縦長の扁平な剥片○B面右側縁は直線で、5㎜前後の刃こぼれあり○背部は原礫面を残す ○断面は三角形○P1.85を参照	N－21	サヌカイト○B面右側縁の刃こぼれは使用痕
19－93 15	使用痕のある剥片	長さ 32 幅 22 厚さ 5	4.40	○素材は不定形な剥片○B面左側縁に2～3㎜の急角度に剥離した小さな刃こぼれ○右側縁に比較的大きな内彎した刃こぼれあり○A面に小さな打瘤あり○断面は三角形○P1.84参照	Y－21	灰色のチャート ○B面左右側縁の刃こぼれは使用痕
19－93 16	使用痕のある剥片	長さ 41 幅 34 厚さ 12	10.30	○素材は不定形な剥片、原礫面を残す○打面をのぞく3辺にはA面から各1ヵ所の刃こぼれあり ○断面は三角形○P1.84を参照	R－24	白色の溶結疑灰岩 ○3辺の刃こぼれは使用痕
20－93 17	使用痕のある縦長剥片	長さ 86 幅 33 厚さ 17	43.80	○素材は縦長の剥片、原礫面を残す○打面は小さい○下端部A面には2面の剥離面、左側縁に小さな刃こぼれあり○B面の打撃は下方からおこなう（A面と逆）○断面は三角形	V－20	サヌカイト ○刃こぼれは使用痕○P1.85を参照
20－94 18	使用痕のある剥片	長さ 59 幅 32 厚さ 7	11.25	○素材は横長、扁平な剥片○先端は尖っていない○A面左側縁に荒い刃こぼれあり ○断面は平行四辺形	N－20	サヌカイト ○A面左側縁の刃こぼれは使用痕
20－94 19	翼状剥片	長さ 79 幅 25 厚さ 8.5	14.30	○稜線上に打撃痕あり○上・下端とも尖る○打面は平坦○A面上から約3分の2に1㎝前後の荒い刃こぼれ、B面下から約3分の1に小さな刃こぼれあり○断面は平行四辺形	P－24	流理構造のみえるサヌカイト ○P1.85を参照
21－94 20	翼状剥片	長さ 55 幅 21 厚さ 5	6.10	○扁平○上端は尖っていない○中央部で接合するも下半部折損○B面の破損個所に亀裂あり ○断面は台形	上部 U－18 下部 T－21	サヌカイト ○約 1.5m離れて接合
21－94 21	翼状剥片	長さ 59 幅 27 厚さ 6	8.10	○上下不揃い○下端は、他の剥離面とA面が交差して尖っている○B面の多くの剥離面は打面側から場所を変えて剥離されている○断面は平行四辺形	V－19	サヌカイト
21－94 22	翼状剥片	長さ 67 幅 28 厚さ 7	7.60	○稜線上に打撃痕が残る○上部と下部は群を越えて接合する ○断面は平行四辺形	上部 J－9 下部 S－25	サヌカイト○完形品○約9m離れて接合
21－94 23	翼状剥片	長さ 68 幅 36 厚さ 9	16.10	○横長、A面に稜線が残る○A面左側縁はやや外彎し、鋭利 ○断面は平行四辺形	R－23	風化のすすんだサヌカイト
21－95 24	翼状剥片	長さ 27 幅 15 厚さ 5	1.50	○薄い典型的な翼状剥片の上端部	P－21	サヌカイト
21－95 25	翼状剥片	長さ 24 幅 15 厚さ 4	1.65	○薄い典型的な翼状剥片の上端部○上端は原礫面を残す	V－19	サヌカイト
22－95 26	翼状剥片	長さ 79 幅 33 厚さ 20	37.60	○打面に比して底面が幅広い○打面調整は比較的ていねいで打点は山形に調整された平坦部にある○上下端とも尖っていない○上端は原礫面を残す○断面は平行四辺形	Q－27	サヌカイト
22－95 27	翼状剥片	長さ 77 幅 42 厚さ 18	33.60	○上下が不揃い○上端は尖る○下端は幅広くなり、原礫面を残す○打面は山形に調整され、打点は頂点にある○刃縁には小さな刃こぼれあり○断面は平行四辺形	Q－27	サヌカイト ○P1.85を参照

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
22－95 28	翼状剥片 C群	長さ 72 幅 22 厚さ 7	9.40	○典型的形態、薄い○打面は山形に整形され、打点は頂点にある ○断面は平行四辺形	Y－23	風化が著しいサヌカイト
23－95 29	翼状剥片	長さ 51 幅 23 厚さ 8	7.75	○上下不揃い、B面に剥離面多し ○断面は平行四辺形	Z－24	サヌカイト
23－95 30	翼状剥片	長さ 75 幅 17 厚さ 6	3.30	○典型的形態、小さい○上端は鋭利に尖る○打面は山形に整形され、打点は頂点にある ○断面は平行四辺形	P－25	サヌカイト
23－96 31	翼状剥片	長さ 39 幅 20 厚さ 8	3.50	○上端部の刃縁が内彎する○上端は原礫面を残す○下半部を折損 ○断面は平行四辺形	T－22	サヌカイト
23－96 32	翼状剥片	長さ 39 幅 24 厚さ 5	5.25	○稜線上に打撃痕あり○上半部折損 ○断面は平行四辺形	N－18	サヌカイト
23－96 33	翼状剥片	長さ 48 幅 35 厚さ 11	20.10	○下端部の刃縁が内彎する○下端部は原礫面を残す○上半部折損 ○断面は変形な平行四辺形	Q－25	サヌカイト
23－96 34	叩き石	長さ 55 幅 26 厚さ 12	20.00	○素材は、丸く扁平な柱状の礫○右上端部に打撃痕が集中し小さな剥離痕あり○上半部は接合するも下半部折損 ○断面はほぼ楕円形	P－20	粘板岩○同一グリッド内で約0.1m離れて接合
24－96 35	接合剥片	長さ 33 幅 60 厚さ 9	12.00	○打撃点を左に移動しながら剥離された8点の小さな剥片の接合資料○打面は平坦	U－18 ・20・21 T－18 ・19	サヌカイト ○約1.7m離れて接合
24－96 36	掻器	長さ 45 幅 58 厚さ 13	43.40	○厚い横長剥片○刃部は下端部を急角度にA面から剥離し、やや内彎ぎみにつくる○刃部調整による剥片は、周囲約1mの範囲に出土し、うち1点が接合する	T－17 剥片 T－21	○粒子の荒いサヌカイト○約1.6m離れて接合

表7　D群出土の石器観察表（1～28）

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
26－97 1	ナイフ形石器	長さ 38 幅 18 厚さ 9	5.65	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○下端は直線に折れ、下半部欠失 ○断面は台形	a－27	流理構造のみえるサヌカイト
26－97 2	ナイフ形石器	長さ 26 幅 16 厚さ 11	4.80	○素材は翼状剥片○先端は尖っていない○下端は直線に折れ下半部欠失○両側縁はA面から調整 ○断面は変形な台形	c・d－ 28・29	粒子の荒いサヌカイト○基部の可能性あり
26－97 3	ナイフ形石器	長さ 35 幅 15 厚さ 9.5	3.95	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○下端は直線に折れ、下半部欠失○両側縁はA面から調整 ○断面は変形な台形	b－28 の柱穴	サヌカイト
26－97 4	ナイフ形石器	長さ 20 幅 14 厚さ 6	1.45	○素材は翼状剥片○先端は尖っていない○背部調整中に下半部折損○折損個所に亀裂あり ○断面は三角形	f－40	サヌカイト

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
26－97 5	ナイフ形石器 D群	長さ 39 幅 22 厚さ 13	7.20	○素材は厚い翼状剥片○先端は尖る○下半部折損○両側縁はA面から調整 ○断面は台形	e－41	サヌカイト
26－97 6	ナイフ形石器	長さ 64 幅 16 厚さ 9.5	8.00	○素材は翼状剥片○先端は尖る○基端は直線に整形○背部調整はA・B両面からおこない、稜線は残っていない ○断面は三角形	e－30の柱穴	サヌカイト
26－97 7	縦長剥片	長さ 78 幅 23 厚さ 8	16.20	○2条の稜線がはしる縦長剥片○下端は斜めに切れている○B面の左側面に原礫面を残す○打面は平坦○A面に大きな打瘤あり○断面は三角形	b－28の柱穴	茶灰色のチャート
26－97 8	縦長剥片	長さ 42 幅 19 厚さ 4	2.70	○1条の稜線がはしり、扁平○打面は非常に小さい○A面に打瘤なし○B面左側縁に小さな刃こぼれあり ○断面は台形	Z－28	黒灰色のチャート ○刃こぼれは使用痕○P1.84を参照
26－97 9	縦長剥片	長さ 54 幅 21 厚さ 5	6.40	○剥離面多し○A面にある8面のうち5面は下方からの剥離による○打面は非常に小さい ○断面は台形	f－32	黒色、流紋岩か
27－97 10	使用痕のある剥片	長さ 37 幅 25 厚さ 8	5.90	○素材は不定形、扁平な剥片○B面上端部に原礫面を残す○A面右側縁上部に1～2mmの小さな刃こぼれ、B面右側縁に急角度の荒い刃こぼれあり ○断面は平行四辺形	c・d－28・29	黄灰色チャート ○両側縁の刃こぼれは使用痕 ○P1.84を参照
27－97 11	使用痕のある剥片	長さ 63 幅 30 厚さ 10	17.00	○素材は扁平な剥片○上・下端とも原礫面を残す○左右両側縁にA面からの急角度の荒い刃こぼれあり ○断面は台形○P1.84を参照	Y－29	茶・緑・白色の縞状チャート○刃こぼれは使用痕
27－98 12	掻器	長さ 46 幅 32 厚さ 16	13.25	○素材は不定形な剥片○刃部はA面から急角度に剥離し、丸く仕上げる○風化のため調整等細部不明	X－30	流理構造の著しいサヌカイト○風化が著しい
27－98 13	翼状剥片	長さ 46 幅 25 厚さ 8	6.20	○上下不揃い○上・下端とも尖っていない ○断面は台形	a－31	サヌカイト
27－98 14	翼状剥片	長さ 42 幅 25 厚さ 4	3.10	○扁平で不揃い○上端は尖っていない○下端は切れたような形状を呈す ○断面は平行四辺形	g－35	サヌカイト
27－98 15	翼状剥片	長さ 51 幅 25 厚さ 6.5	5.00	○上下不揃い○上端は尖っていない○下端は尖る○B面に稜線なし ○断面は三角形	Z－32	サヌカイト
28－98 16	翼状剥片	長さ105 幅 31 厚さ 10	30.85	○大形○上・下端とも尖らず、原礫面を残す○刃縁は上・下端近くで内彎、稜線もほぼ平行する○打面はていねいに山形に整形され、打点は中央部の頂点にある○A面の刃縁上半部に荒い刃こぼれあり ○断面は平行四辺形	Z－40	サヌカイト ○P1.85を参照
28－98 17	翼状剥片	長さ121 幅 37 厚さ 8	27.20	○扁平で大形○上・下端とも尖らず、原礫面を残す○刃縁は直線で、稜線もほぼ平行する○打面は山形に整形され、打点は中央部の頂点にある○打瘤がA面に残る ○断面は平行四辺形	d－42	気泡の多いサヌカイト ○本遺跡最大の翼状剥片

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
27－99 18	翼状剥片 D群	長さ 59 幅 35 厚さ 9	19.10	○四角形、打面は平坦○刃縁は直線で鋭利○B面の下端部には他の剥離面があり、打面側からの剥離面も2ヵ所ある ○断面は台形	c・d－35	粒子の荒いサヌカイト
28－99 19	翼状剥片	長さ 64 幅 27 厚さ 6	9.75	○扁平、稜線上に打撃痕あり○上・下端とも尖り、刃縁は大きく外彎する○打面はていねいに山形に整形され、打点は中央部の頂点にある○断面は平行四辺形	c－40	サヌカイト
28－99 20	翼状剥片	長さ 48 幅 16 厚さ 4.5	2.85	○小形○上・下端とも尖る○打面は平坦 ○断面は平行四辺形	e－32	サヌカイト
29－99 21	翼状剥片	長さ 57 幅 37 厚さ 19	36.80	○不整形、稜線上に打撃痕あり○上端は原礫面を残す ○断面は平行四辺形	c－42	サヌカイト
29－99 22	翼状剥片石核	長さ 51 幅 41 厚さ 19	35.10	○両側辺から打撃をおこなって翼状剥片を剥離した石核の残欠○A面は原礫面を多く残し、右側辺に打面調整が2面ある ○下半部折損	h－36	サヌカイト
29－99 23	翼状剥片石核	長さ 58 幅 52 厚さ 13	43.25	○下方からの打撃によって剥離された盤状剥片を素材とする○上端部に原礫面を残す○打面調整なし○2～3回おこなった打撃痕あり	c・d－28・29	サヌカイト
31-100 24	剥片	長さ 51 幅 25 厚さ 12	13.50	○縦長、B面に多くの剥離面あり○打面は平坦で、原礫面を残す	f－37	サヌカイト
-101 25	剥片	長さ 48 幅 58 厚さ 15	22.40	○不整形 ○打面は平坦	e－29	サヌカイト
29-100 26	剥片	長さ 42 幅 48 厚さ 15	20.80	○不整形○B面に多くの剥離面と原礫面あり ○打面は平坦	g－39	茶黒色の安山岩
30-100 27	翼状剥片石核	長さ 52 幅 56 厚さ 20	50.50	○底面が平坦でない石核の残欠である○打面調整の剥片が接合する	g－40 剥片 e－41	サヌカイト ○約1.1m離れて接合
31-100 28	剥片	長さ 54 幅 69 厚さ 16	47.50	○不整形、B面に多数の剥離面と原礫面あり ○打面は平坦○A面の打瘤は大きく長い	Z－30	サヌカイト

表8　E群出土の石器観察表（1～43）

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
32-101 1	ナイフ形石器	長さ 51 幅 12 厚さ 6	3.55	○素材は扁平な翼状剥片○先端は尖る○基端は尖らず、原礫面を残す○刃縁・背部ともやや外彎する ○細身○断面は台形	E群	サヌカイト ○完形品（右刃）
32-101 2	ナイフ形石器	長さ 50 幅 13.5 厚さ 6	4.60	○素材は扁平な翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端は直線に整形されている○刃縁・背部ともやや外彎する ○断面は台形	E群	サヌカイト ○完形品（右刃）

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
32-101 3	ナイフ形石器 E群	長さ 50 幅 14 厚さ 4	3.20	○素材は扁平な翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端は直線に整形され、刃縁の下部にA面からの基部調整あり ○断面は台形	E群	サヌカイト ○完形品（右刃）
35-101 4	ナイフ形石器	長さ 30 幅 18 厚さ 8	3.70	○素材は翼状剥片○背部調整中に上半部折損 ○断面は三角形	E群	サヌカイト
32-101 5	ナイフ形石器	長さ 48 幅 14 厚さ 9	4.90	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端は直線に整形されている○稜線は背部調整によって大部分なくなっている ○断面は三角形	E群	気泡のあるサヌカイト ○完形品（右刃）
32-101 6	ナイフ形石器	長さ 54 幅 16 厚さ 10	7.20	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端は小さな調整により丸く整形されている○刃縁は大きく外彎し、背部は直線 ○断面は三角形	E群	サヌカイト ○完形品（右刃）
33-101 7	ナイフ形石器	長さ 57 幅 17 厚さ 11	10.10	○素材は翼状剥片○先端は尖り、基端は尖っていない○刃縁は外彎し、背部は直線○A面背部に打撃痕が残る ○断面は台形	E群	サヌカイト ○完形品（右刃）
35-101 8	ナイフ形石器	長さ 31 幅 23 厚さ 6	3.00	○素材は翼状剥片○背部調整中に上半部折損 ○断面は台形	E群	サヌカイト
33-102 9	ナイフ形石器	長さ 61 幅 18 厚さ 4.5	4.50	○素材は扁平な翼状剥片○両端とも尖る○刃縁は大きく外彎し、稜線はほぼ平行○背部は直線で調整はA面から急角度におこなう○断面は台形	E群	サヌカイト ○完形品（右刃）
33-102 10	ナイフ形石器	長さ 67 幅 17 厚さ 11	9.00	○素材は翼状剥片、底面が広い○両端とも尖っていない○刃縁はやや外彎する○背部調整はA・B両面からおこなう ○断面は三角形	E群	サヌカイト ○完形品（右刃）
33-102 11	ナイフ形石器	長さ 71 幅 19 厚さ 10	8.85	○素材は翼状剥片、刃縁が内彎する○先端は鋭利に尖る○基端は尖っていない○背部はやや外彎し調整はA面から荒くおこなう○断面は三角形	E群	サヌカイト ○完形品（右刃）
35-102 12	ナイフ形石器	長さ 47 幅 21 厚さ 12	11.30	○素材は翼状剥片、底面が広い○背部調整中に先端を折損、尖っていない ○断面は三角形	E群	サヌカイト
35-102 13	ナイフ形石器	長さ 53 幅 18 厚さ 10	9.00	○素材は翼状剥片、底面が広い○両端とも背部調整中に折損 ○断面は三角形	E群	サヌカイト
33-102 14	ナイフ形石器	長さ 83 幅 19 厚さ 11	13.15	○素材は翼状剥片、底面が広い○先端は鋭利に尖る○基端は原礫面を残す○刃縁はやや外彎し、背部は直線○背部調整はA・B両面からおこなう○中央部で折れる○断面は三角形	E群	サヌカイト ○完形品（右刃）
35-103 15	ナイフ形石器	長さ 25 幅 14 厚さ 6	1.35	○素材は翼状剥片○先端は尖っていない○下半部折損 ○断面は三角形	E群	サヌカイト
34-103 16	ナイフ形石器	長さ 43 幅 13 厚さ 5	2.80	○素材は扁平な翼状剥片○先端は尖る○基端は直線に整形されている○背部はやや外彎し、調整はていねい ○断面は台形	E群	サヌカイト

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
34-103 17	ナイフ形石器 E群	長さ 52 幅 13 厚さ 9	4.70	○素材は翼状剥片、稜線に打撃痕あり○先端は鋭利に尖る○基端は細く尖る○刃部はやや外彎する○背部調整は両面からおこなわれ、調整痕あり○断面は三角形	E群	サヌカイト ○完形品（左刃）
34-103 18	ナイフ形石器	長さ 51 幅 17 厚さ 8	6.20	○素材は上下不揃いの翼状剥片○先端は尖る○基端は丸くなっている○A面に調整痕あり ○断面は台形	E群	サヌカイト ○完形品（左刃）
34-103 19	ナイフ形石器	長さ 56 幅 17 厚さ 10	8.30	○素材は翼状剥片、稜線に打撃痕あり○先端は鋭利に尖る○基端は直線に整形されている○A・B両面の刃縁に刃こぼれ顕著○断面は台形	E群	風化の著しいサヌカイト○完形品(左刃）○使用痕あり
34-103 20	ナイフ形石器	長さ 67 幅 14.5 厚さ 12	8.30	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端は尖っていない○中央部で折れている ○断面は三角形	E群	流理構造の著しいサヌカイト ○完形品（左刃）
35-103 21	ナイフ形石器	長さ 28 幅 21 厚さ 10	4.60	○素材は翼状剥片○基端は尖っていない○上半部折損 ○断面は三角形	E群	気泡の多いサヌカイト
36-104 22	ナイフ形石器	長さ 43 幅 10 厚さ 16	2.60	○素材は翼状剥片○先端は尖る○下半部折損○背部調整はA・B両面からおこなう○A面からの打面調整中に破損したもの○断面は台形	E群	サヌカイト
35-104 23	ナイフ形石器	長さ 44 幅 20 厚さ 8	4.25	○素材は翼状剥片、底面が広く扁平○先端は尖る○背部調整中に下半部折損 ○断面は三角形	E群	サヌカイト
35-104 24	ナイフ形石器	長さ 18 幅 10 厚さ 9	0.90	○素材は翼状剥片○先端は尖っていない○背部調整中に下半部折損 ○断面は三角形	E群	サヌカイト
36-104 25	使用痕のある剥片	長さ 52 幅 22 厚さ 8	8.10	○素材は縦長の剥片○B面右側縁上半部に、A面からの荒い刃こぼれが4ヵ所ある ○P1.85を参照	E群	サヌカイト○刃こぼれは使用痕、翼状剥片の例に似る
36-104 26	縦長剥片	長さ 27 幅 11 厚さ 3	1.00	○小さく、打面は平坦	E群	黒灰色のチャート
36-104 27	縦長剥片	長さ 24 幅 23 厚さ 9	5.70	○不定形○打面は平坦○A面左面に原礫面を残す	E群	茶色のチャート
36-104 28	縦長剥片	長さ 31 幅 20 厚さ 6	4.50	○不定形○打面は平坦○B面右面に原礫面を残す○A面に大きな打瘤を残す	E群	緑色のチャート
36-104 29	翼状剥片	長さ 47 幅 25 厚さ 5	5.20	○上端は直線で、下端も尖っていない○稜線はほとんど残っていない○打面は山形に整形され、打点は頂点にある ○断面は三角形	E群	サヌカイト
36-104 30	翼状剥片	長さ 46 幅 25 厚さ 8	4.25	○扁平○石核から剥離の際、中央部で3点以上に破損 ○断面は平行四辺形	E群	サヌカイト

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
36-104 31	翼状剥片 E群	長さ 64 幅 26 厚さ 13	15.55	○底面が広く、上下不揃い○上端は丸く、下端は直線に整形されている○A面上半部の刃縁に2～3mmの小さな刃こぼれあり○下半部の割口は新しい ○断面は三角形	E群	サヌカイト ○P1.85を参照
36-104 32	翼状剥片	長さ 46 幅 24 厚さ 6	5.10	○扁平○石核から剥離の際、中央部で2点に破損 ○断面は台形	E群	サヌカイト
37-104 33	剥片	長さ 48 幅 50 厚さ 25	45.00	○原礫面が多い○断面は三角形 ○B面の大きなネガティブ面を重視すれば、不整形な剥片をとる石核の可能性あり	E群	サヌカイト
37-105 34	翼状剥片	長さ 52 幅 31 厚さ 8	11.20	○打面は平坦○上・下端とも尖っていない○上端は原礫面を残す ○断面は平行四辺形	E群	サヌカイト
37-105 35	翼状剥片	長さ 52 幅 35 厚さ 8	10.80	○原礫面を打面とする○刃縁と稜線はほぼ平行する○A面に大きな打瘤あり ○断面は平行四辺形	E群	サヌカイト
37-105 36	打面調整剥片	長さ 38 幅 22 厚さ 7	5.00	○B面は左面に原礫面を残し、2～3面の右側からの剥離面あり ○A面は流理構造と約50～60度の角度で剥離されている	E群	サヌカイト
37-105 37	縦長剥片石核	長さ 32 幅 28 厚さ 21	21.85	○不定形な縦長剥片を剥離した石核の残欠○剥離は平坦な打面を上から垂直におこなった後、原礫面のある側面から切断する形でおこなう	E群	緑色のチャート
37-105 38	翼状剥片石核	長さ 53 幅 34 厚さ 11	15.50	○原礫面を打面とする盤状剥片を素材とした石核の残欠 ○打面調整は、下半部に3回の打撃をおこなう	E群	流理構造のみえるサヌカイト
38-105 39	翼状剥片石核	長さ 69 幅 44 厚さ 23	55.15	○素材は断面三角形の大きな剥片○底面を剥離した打撃痕はB面の稜線上に残っている○大きな剥片を剥離する前に、中央部で折れている○剥離する面は何回かの打撃によって潰れている	E群	サヌカイト
38-106 40	翼状剥片石核	長さ 46 幅 42 厚さ 15	23.90	○2点の打面調整剥片（42・43）と翼状剥片（41）が接合する○（43）が剥離された後、1～2回の打面調整がおこなわれ出土していない翼状剥片が剥離されている。ついで（42）が剥離され、最後に（41）の翼状剥片が剥離されている ○石核底面右側縁の外彎部を、打面側から調整している	E群	流理構造がみえるサヌカイト ○石核の残欠を掻器に利用している ○P1.39を参照
38-106 41	翼状剥片	長さ 38 幅 20 厚さ 8.5	4.40	○（40）の石核から最後に剥離されたもの○両端とも尖っていない ○断面は平行四辺形	E群	（40）と同質のサヌカイト
38-106 42	打面調整剥片	長さ 26 幅 17 厚さ 7	2.50	○B面は以前の打面調整剥離面が多く残る ○A面はややヒンヂぎみに剥離されている	E群	（40）と同質のサヌカイト
38-106 43	打面調整剥片	長さ 21 幅 30 厚さ 7	3.65	○打点はB面の左下端にある	E群	（40）と同質のサヌカイト

表９　Ｆ群出土の石器観察表（１～27）

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
41-107 1	ナイフ形石器	長さ 22 幅 15 厚さ 6	2.95	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端は直線に整形されている○刃縁はやや外彎し、背部は直線○Ａ面の刃縁下端にＢ面側からの剥離面が１つある○断面は台形	h－47	サヌカイト ○完形品（右刃）
41-107 2	ナイフ形石器	長さ 69 幅 21 厚さ 7.5	10.70	○素材は扁平な翼状剥片○先端は尖る○基端折損○基端から約３分の１で折れている○刃縁はやや外彎し、背部はほぼ直線○背部調整は先端まで至らない○断面は台形	上半部表採 下半部 k－49	サヌカイト
41-107 3	ナイフ形石器	長さ 85 幅 23 厚さ 12	22.20	○素材は厚い翼状剥片○先端は尖らず○基端直線に折る○Ａ面先端部に打面の一部が残る○背部調整は大きく荒く、急角度におこなうが、先端まで至らない○断面は台形	i－49	サヌカイト ○完形品（右刃）
41-107 4	ナイフ形石器	長さ 57 幅 23 厚さ 7	8.05	○素材は扁平な翼状剥片、稜線上に打撃痕あり○先端は尖らず○基端直線に折る○刃縁は外彎し上端部でやや内彎、背部は直線○Ａ面上部に打面調整が残る○背部調整は先端まで至らない○断面は台形	j－47	流理構造のみえるサヌカイト ○完形品（左刃）
41-107 5	ナイフ形石器	長さ 42 幅 20 厚さ 8	6.80	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端は直線に整形されている ○断面は台形	r－41	サヌカイト ○完形品（右刃）
41-107 6	ナイフ形石器	長さ 66 幅 14 厚さ 9	6.00	○素材は翼状剥片○両端とも鋭利に尖る○刃縁は外彎し、背部はほぼ直線○背部調整はＡ面から大きくおこなった後、Ｂ面から小さくおこなう○稜線なし○断面は三角形	p－42	サヌカイト ○完形品（左刃）
41-108 7	掻器	長さ 54 幅 27 厚さ 12	13.00	○素材は縦長剥片、Ｂ面に２条の稜線あり○下端部をＡ面から大きな３回の樋状剥離により丸く仕上げ、先刃形の掻器につくる○刃縁には小さな刃こぼれあり○左側縁には顕著な刃こぼれ○上端は折れているのか不明	k－49	硬質頁岩 ○Ｐ1.84･88を参照
42-108 8	彫器	長さ 43 幅 28 厚さ 10	11.85	○素材は扁平、板状の剥片○上方からの打撃による剥片が２点（９・10）接合する○上方からは最低７回の剥離がなされ打面にも２点の打撃痕あり○下方からの剥離は両側縁にある○左側は打面下端がＢ面から垂直方向に再生され、打点残らず○右側は打面再生後２回の剥離をおこなう	s－44	灰色のチャート ○（10）と約1.5ｍ離れて接合 ○Ｐ1.46を参照
42-108 9	彫器の刃部再生剥片	長さ 18 幅 12 厚さ 3	0.85	○Ｂ面には上方からの打撃によって剥離された剥離面が３面ある○切り合い関係から、（８）の左側刃部再生に時間的に先行して剥離されている	s－48	（８）と同質のチャート○（10）と約0.35ｍ離れて接合
42-108 10	彫器の刃部再生剥片	長さ 29 幅 14 厚さ 8	4.00	○Ｂ面には上方からの剥離面３面と、下方からの剥離面３面がある	r－47	（８）と同質のチャート
42-108 11	縦長剥片	長さ 54 幅 25 厚さ 13	18.10	○２条の稜線がはしる○打面は平坦○下端は尖っていない	m－44	黒色のチャート
42-108 12	翼状剥片	長さ 34 幅 25 厚さ 11	8.10	○扁平○上半部折損○下端は尖っていない	p－45の柱穴	気泡の多いサヌカイト
42-108 13	翼状剥片	長さ 92 幅 37 厚さ 12	31.00	○上下不揃い○打点より上部は薄く短く、下部は厚く長い○下端は尖り原礫面残す○稜線は上約３分の１で刃縁と接す○打点はていねいに山形に整形された頂点にある○断面三角形	j－47	新池・穴ヶ谷グループのサヌカイト

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
42-109 14	翼状剥片 F群	長さ 70 幅 28 厚さ 12	16.25	○底面が広い○上端は尖らず直線○下端は鋭利に尖る○刃縁は大きく外彎し、稜線もほぼ平行○打点はていねいに山形に整形された頂点にある○断面は台形	j－47	サヌカイト
42-109 15	翼状剥片	長さ 44 幅 14 厚さ 5	2.55	○小形○先端は鋭利に尖る○下端は尖っていない○稜線はB面先端部にわずかに残る ○断面は三角形	n－43	気泡の多いサヌカイト
43-109 16	翼状剥片	長さ 75 幅 28 厚さ 7	12.75	○典型的形態○上・下端とも細く尖る○刃縁はやや外彎し、稜線もほぼ平行する ○断面は平行四辺形	i－46	流理構造のみえる風化の著しいサヌカイト
43-109 17	翼状剥片	長さ 70 幅 29 厚さ 8	14.25	○上下不揃い○上・下端とも尖っていない○打点から上半部は厚く長く、下半部は薄く短い○下端から約3分の1で折れている○断面は平行四辺形	上半部 i－48 下半部 i－47	表面が虫蝕い状のサヌカイト○約0.05m離れて接合
43-109 18	翼状剥片	長さ 66 幅 35 厚さ 9	17.40	○稜線に打撃痕あり○上・下端とも細い○打点は中央にあり上半部が薄い○刃縁はやや外彎する ○断面は平行四辺形	k－49	流理構造のみえるサヌカイト
43-109 19	翼状剥片	長さ 64 幅 33 厚さ 12	15.90	○上下不揃い○上・下端とも尖っていない○打点は中央やや上にあり、上半部は薄い○稜線は明確でない ○断面は平行四辺形	j－47	粒子の荒いサヌカイト
44-110 20	翼状剥片	長さ 51 幅 43 厚さ 8	13.90	○幅広、上端に原礫面を残す○上・下端とも尖っていない○底面は上部ほど広い○打面調整は大きく、山形に整形され、打点は頂点にある○断面は平行四辺形	k－49	流理構造のみえるサヌカイト
44-110 21	翼状剥片	長さ 92 幅 42 厚さ 11	34.20	○幅広く、大形○上・下端とも尖っていない○中央部で叩き折られた下半部の1点が接合する ○断面は平行四辺形	上半部 j－46 下半部 j－44	粒子荒く流理構造みえるサヌカイト約1.35m距て接合
44-110 22	翼状剥片石核及び接合剥片	長さ 72 幅 48 厚さ 7	25.20	○大きな剥片は翼状剥片石核の残欠○接合する剥片は打面調整剥片○B面に翼状剥片を剥離した特徴的な稜線が残る	石核 j－47 剥片 i－47	黒い粒子が多いサヌカイト○約0.35m離れて接合
48-110 23	剥片	長さ 45 幅 57 厚さ 15	39.30	○扁平な礫の一部を大きく剥離した横長の剥片○原礫面を多く残す	r－43	サヌカイト
45-111 24	接合剥片	長さ 29 幅 50 厚さ 12	14.85	○3点の不整形な剥片が接合する○打面は平坦な原礫面○最初に剥離した剥片①はG群出土	①②③ B′ i h | | | 51 47 46	サヌカイト○①と②は約9.9m離れて接合
45-111 25	接合剥片	長さ 30 幅 48 厚さ 8	8.40	○（24）と同様に、打面が原礫面の不整形な剥片	h－47 i－49 i－47	（24）と同質のサヌカイト
45-111 26	接合剥片	長さ 36 幅 79 厚さ 43	29.75	○盤状剥片から原礫面を剥ぐように剥離された6点の不整形な剥片が接合する○小さな1点はG群出土	h－46 ・47 i－47 F′－51	（24）と同質のサヌカイト○最長約11.7m離れて接合
45-111 27	叩き石	長さ 77 幅 50 厚さ 30	165.50	○河原石を利用○上下端とも多くの打撃痕におおわれ、大きく消耗している○A面の右上部には、打撃の衝撃による大きな剥離面が残る	k－48	黄色の珪岩 ○P1.86を参照

表10　G群出土の石器観察表（1～22）

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
49-112 1	ナイフ形石器	長さ 25 幅 17 厚さ 7	2.40	○素材は翼状剥片○先端は尖らず、原礫面を残す○背部調整中に下半部折損 ○断面は三角形	D′－51	サヌカイト
49-112 2	ナイフ形石器	長さ 33 幅 18 厚さ 6	3.80	○素材は扁平な翼状剥片○先端は尖っていない○背部調整中に下半部折損 ○断面は台形	D′－51	流理構造がみえるサヌカイト
49-112 3	ナイフ形石器	長さ 54 幅 15 厚さ 9	5.60	○素材は翼状剥片、底面が広い○先端は鋭利に尖る○基端は尖っていない○背部調整は両面からおこなわれ両面に打撃痕残る○背部調整剥片が接合○断面は三角形	D′－53 剥片 C′－51	サヌカイト○完形品（右刃）○約0.75m離れて接合
49-112 4	ナイフ形石器	長さ 68 幅 16 厚さ 11	10.00	○素材は翼状剥片、底面が広い○先端は鋭利に尖る○基端は尖っていない○刃縁は大きく外彎○背部調整は両面からおこなわれ、背部は直線○A面に大きな打瘤痕○断面は三角形	D′－47	サヌカイト ○完形品（右刃）
49-112 5	ナイフ形石器	長さ 91 幅 18 厚さ 12	16.25	○大きく厚い翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端は直線、小さく原礫面残す○刃縁・背部共やや外彎○背部調整はA面から大きく全縁に、後B面から小さく先端部になす○断面台形	D′－47	流理構造みえるサヌカイト○本遺跡最大完形品(右刃)
49-112 6	ナイフ形石器	長さ 33 幅 17 厚さ 6	2.65	○素材は扁平な翼状剥片○背部調整中に上半部折損○基端は尖らず原礫面を残す ○断面は台形	E′－50	サヌカイト
49-112 7	掻器	長さ 55 幅 38 厚さ 9	16.40	○素材は扁平、やや縦長の剥片○打面は平坦な原礫面○刃部は下端の小範囲にB面から小さく調整○B面側下半部には広範囲に大きな剥離痕あり	I′－53	流理構造がみえるサヌカイト
50-113 8	翼状剥片	長さ 61 幅 20 厚さ 5	6.20	○上下不揃い、小形○上端は尖っていない○下端は尖る ○断面は平行四辺形	B′－52	流理構造が著しくみえるサヌカイト
50-113 9	翼状剥片	長さ 60 幅 26 厚さ 7	10.90	○扁平、典型的形態○上端部は折れているか不明○下端部は細い○打面は山形に整形され、打点は頂点にある○刃縁には小さな刃こぼれあり○断面は平行四辺形	C′－46	サヌカイト
50-113 10	翼状剥片	長さ 64 幅 29 厚さ 11	17.20	○厚く、上下不揃い○上・下端とも尖る○刃縁は大きく外彎する○B面には多くの打撃痕あり、打面上端にはA面剥離以前の打撃痕あり○断面は平行四辺形	D′－48	サヌカイト
51-113 11	翼状剥片	長さ110 幅 26 厚さ 8	14.75	○扁平、大形○先端は鋭利に尖る○下端は尖らず、原礫面を残す○ほぼ等しく3点に折れる○打面は山形に整形され打点は頂点にある○刃縁中央部に刃こぼれあり○断面平行四辺形	上端部 B′－51 中下端 C′－51	サヌカイト ○約0.7m離れて接合
51-113 12	翼状剥片	長さ 77 幅 23 厚さ 7	13.30	○扁平○上・下端とも尖っていない○打面は大きく山形に整形され、打点は頂点にある	D′－51	流理構造がみえるサヌカイト
50-114 13	翼状剥片	長さ 64 幅 35 厚さ 11	20.00	○稜線に打撃痕あり○上端は尖る○下端は尖らず、原礫面を残す○刃縁は大きく外彎○打面は山形に整形され、打点は頂点の平坦部にあり、3点の打撃痕あり○断面は平行四辺形	C′－49	サヌカイト
52-114 14	翼状剥片	長さ 60 幅 35 厚さ 11	20.35	○稜線がない○上端は尖らず、原礫面を残す○下端は尖る○打面は原礫面を少し調整し、山形にはつくらず○B面刃縁中央部に打撃痕あり○断面は三角形	F′－52	サヌカイト

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
52-114 15	翼状剥片 G群	長さ 38 幅 13 厚さ 4	2.40	○扁平、小形○上・下端とも直線で尖っていない、折れているのか不明 ○断面は平行四辺形	B′−48	サヌカイト
52-114 16	翼状剥片	長さ 29 幅 20 厚さ 5	2.70	○扁平、小形○上・下端とも直線で尖っていない、折れているのか不明 ○断面は平行四辺形	C′−49	サヌカイト
52-114 17	翼状剥片	長さ 54 幅 23 厚さ 8	8.25	○上・下不揃い○両端とも尖っていない○厚さは上部ほど薄い○打面は山形に整形され、打点は頂点にある ○断面は平行四辺形	D′−51	気泡の多いサヌカイト
51-114 18	剥片	長さ100 幅 51 厚さ 10	43.45	○不整形、やや縦長○下端は細く尖る○打面は平坦○A面右側縁に原礫面を残す	C′−46	サヌカイト
52-115 19	翼状剥片	長さ 63 幅 36 厚さ 15	18.85	○上下不揃い○上・下端とも尖っていない○A面右側は剥離後、打面から調整をおこなう○刃縁には大きな刃こぼれあり○A面の調整剥片が1点接合する	D′−51 剥片 D′−51	流理構造が著しいサヌカイト○約0.35m離れて接合
52-115 20	剥片	長さ 38 幅 32 厚さ 7	9.50	○やや縦長○B面には3面の剥離面あり	F′−52	流理構造著しいサヌカイト○G群内に同質の剥片なし
52-115 21	翼状剥片石核	長さ 56 幅 43 厚さ 15	40.60	○盤状剥片を素材とする石核○打面調整はA面の下方から5、6回おこなう○右側上端に打撃痕あり○下縁は原礫面を残す	C′−48	サヌカイト
53-115 22	接合剥片	長さ 50 幅 61 厚さ 22	34.20	○縦長の大きな剥片が4点接合する○剥片のA面には大きなウェーブが見られ、流理構造と剥離面との角度は約60度○B面は原礫面	C′−51 D′−50 D′−51	流理構造がみえるサヌカイト

表11　H群出土の石器観察表（1〜19）

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
56-116 1	ナイフ形石器	長さ 44 幅 14 厚さ 7	4.30	○素材は翼状剥片○先端は鋭利に尖る○基端は尖っていない○刃縁の基端から約3分の1ほどにA面からの基部調整あり○断面は台形	Y′−26	サヌカイト ○完形品（右刃）
56-116 2	ナイフ形石器	長さ 54 幅 15 厚さ 7	5.30	○素材は翼状剥片、底面が広い○両端とも尖っている○A面は、基部に打面の一部が残り、右側にB面からの小さな基部調整あり○断面は台形	T′−27	流理構造のみえるサヌカイト ○完形品（左刃）
56-116 3	ナイフ形石器	長さ 89 幅 22 厚さ 7	11.00	○素材は大形の翼状剥片○先端は尖っていない○3点に折れる○下端部に亀裂あり、背部調整中に破損後、A面から2〜3回基部調整○A面先端部右側に打面を一部残す○断面は台形	先端部 R′−28 中・基 S′−26	サヌカイト○完形品（右刃）○約1m離れて接合
56-116 4	ナイフ形石器	長さ 37 幅 23 厚さ 8	6.10	○素材は翼状剥片、上端が細くならない○先端は薄く、尖る○基端は直線○背部調整は、範囲小さく、先端まで至らない○断面は三角形	X′−20	サヌカイト ○完形品（右刃）
56-116 5	ナイフ形石器	長さ 45 幅 23 厚さ 9	8.90	○素材は翼状剥片○先端は尖る○基端は直線○刃縁・背部ともA面から荒く調整○A面左側上端には打面が残り、中央部には大きな打瘤あり○断面は台形	a′−22	流理構造のみえるサヌカイト ○完形品（左刃）

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
56-116 6	ナイフ形石器 H群	長さ 30 幅 21 厚さ 7	3.85	○素材は翼状剥片○上半部折損○基端は尖っていない○刃縁・背部ともA面から調整をおこなう ○断面は台形	a′−22	流理構造のみえるサヌカイト
56-116 7	ナイフ形石器	長さ 32 幅 26 厚さ 8	7.00	○素材は横長の翼状剥片、B面は原礫面○上半部折損○基端は尖っていない ○断面は三角形	a′−23	流理構造のみえるサヌカイト
57-116 8	使用痕のある剥片	長さ 40 幅 23 厚さ 10	6.30	○不定形な縦長剥片、B面に1条の稜線あり○左刃縁はやや外彎し、両面に非常に小さな刃こぼれあり	T′−23	赤色の鉄石英 ○刃こぼれは使用痕
57-116 9	使用痕のある剥片	長さ 63 幅 46 厚さ 15	27.95	○不定形、大形の剥片○上端は鋭利に尖る○上端部両側の鋭い刃縁に小さな刃こぼれあり	S′−27	黄土色の鉄石英 ○刃こぼれは使用痕○P1.84参照
57-117 10	使用痕のある剥片	長さ 27 幅 28 厚さ 7	5.75	○不定形、小形の剥片○B面下端に小さな刃こぼれあり	S′−26	黄土色の鉄石英 ○刃こぼれは使用痕○P1.84参照
59-117 11	剥片	長さ 33 幅 27 厚さ 5	4.60	○不定形 ○打面に原礫面を残す	S′−24	流理構造が著しくみえるサヌカイト
59-117 12	剥片	長さ 41 幅 41 厚さ 14	18.80	○やや縦長○打面は平坦 ○B面に原礫面を残す	Q′−27	流理構造が著しくみえるサヌカイト
56-117 13	掻器	長さ 50 幅 40 厚さ 18	32.50	○素材は翼状剥片石核の残欠○A面の右下縁をB面から丸く刃部調整○B面右側には翼状剥片を剥離した面が残る	S′−24	流理構造が著しくみえるサヌカイト
60-117 14	打面調整剥片	長さ 49 幅 31 厚さ 9	10.20	○B面には左側に原礫面、右側に右辺からの剥離面あり○A面がヒンヂになった典型的な打面調整剥片	a′−23	流理構造のみえるサヌカイト○新池・穴ヶ谷グループ
58-117 15	翼状剥片石核	長さ 42 幅 58 厚さ 12	31.30	○B面は原礫面○上半部折損○底面は平坦○B面右側縁中央に刃こぼれあり ○P1.85を参照	a′−22	流理構造みえるサヌカイト○二次使用による刃こぼれ
58-118 16	剥片	長さ 41 幅 63 厚さ 15	25.10	○三角形、大きく、B面右側縁に原礫面を残す○A面右側の新しい剥離面を重視すれば、翼状剥片石核の可能性あり	Q′−27	流理構造のみえるサヌカイト
59-118 17	接合剥片	長さ 54 幅 61 厚さ 18	39.75	○翼状剥片石核に、中央で破損した翼状剥片が接合○打面は平坦○翼状剥片剥離後、上端部を両面から調整 ○翼状剥片は上半部がR′−28、下半部がR′−27出土	石核 S′−24	流理構造著しくみえるサヌカイト○約2.1m離れて接合
60-118 18	接合剥片	長さ 35 幅 17 厚さ 8	3.00	○小形の翼状剥片の接合○打面は平坦、底面も平坦	大 X′−19 小 a′−24	流理構造のみえるサヌカイト ○約2.8m離れて接合
58-118 19	翼状剥片石核	長さ 84 幅 68 厚さ 20	10.34	○素材は扁平な礫○翼状剥片剥離の際2つに破損○翼状剥片もヒンヂになっている○上端に小剥片が接合○下端の大きな剥離は、破損後A面側から打撃をおこなっている	石核 S′−28 剥片 U′−26	サヌカイト ○約1.4m離れて接合

表12　表面採集の石器観察表（1～14）

図版	名称	法量	重量	形態・調整	出土地点	備考
61-119 1	ナイフ形石器	長さ 42 幅 18 厚さ 8	6.90	○素材は翼状剥片○両端とも折れて尖っていない○刃縁の約3分の2ほどに刃こぼれあり ○断面は台形	A区の南北溝	サヌカイト
61-119 2	ナイフ形石器	長さ 43 幅 24 厚さ 10	10.35	○素材はB面に原礫面ある剥片○B面を大きく剥離後、B面側から荒くA面ほぼ全面を調整○断面は三角形 ○下端分の丸い部分を重視すれば掻器の可能性あり	C区	流理構造のみえるサヌカイト
61-119 3	掻器	長さ 43 幅 26 厚さ 14	10.60	○素材は不整形な剥片、原礫面あり○下端部をA面側から、5～6回調整して丸い刃部をつくる	A区の南北溝	気泡の多いサヌカイト
62-119 4	掻器	長さ 51 幅 30 厚さ 15	19.20	○素材は不整形な剥片、原礫面あり○下端部をA面側から、7～8回小さく調整して丸い刃部をつくる	C区	緑色のチャート ○P1.88を参照
61-119 5	掻器	長さ 45 幅 47 厚さ 12	19.70	○素材は扁平な横長剥片、打面に原礫面あり○A面に大きな打瘤痕あり○刃部は、下縁から両側縁下半部にわたる広範囲につくられている○B面右縁の刃部調整はとくにていねい	A区の南北溝	サヌカイト
61-119 6	掻器	長さ 60 幅 49 厚さ 13	41.00	○素材は翼状剥片石核の残欠○A面（石核底面）に、両側縁下半部から下端の広範囲に、B面側から小さく荒い調整をおこなう	C区	サヌカイト
62-119 7	掻器	長さ 58 幅 40 厚さ 17	33.55	○素材は厚い横長剥片、打面は原礫面 ○刃部は、A面側から急角度に調整してつくる	C区	気泡のあるサヌカイト
62-120 8	彫器	長さ 40 幅 25 厚さ 14	13.60	○素材は厚い板状の剥片○打面は平坦、打撃痕4点以上○A面左側縁に大小2面の樋状剥離あり○B面には刃部再生以前の左上方からの大きな剥離あり	C区	灰色のチャート
63-120 9	翼状剥片	長さ 32 幅 21 厚さ 8	5.60	○左右不揃い○上・下端とも尖らず、直線 ○断面は平行四辺形 ○石核（11）から剥離されたものである	C区 溝3	気泡の多いサヌカイト
63-120 10	翼状剥片	長さ 43 幅 20 厚さ 10	6.80	○底面は幅広い○上端部はやや新しく折損○下端は尖っていない○断面は平行四辺形 ○石核（11）から剥離されたものである	C区 溝3	（9）と同質のサヌカイト
63-120 11	翼状剥片石核	長さ 68 幅 36 厚さ 11	22.50	○素材は盤状剥片○下端は原礫面を残す ○打面調整は比較的大きく、中心部を山形につくる	C区 溝3	（9）と同質のサヌカイト
62-120 12	剥片	長さ 72 幅 38 厚さ 19	30.45	○不整形、縦長○打面は原礫面 ○A面に小さな打瘤痕あり	A区北側井戸の掘方	気泡のあるサヌカイト
62-120 13	縦長剥片	長さ 43 幅 22 厚さ 8	9.40	○2条の稜線あり○下半部折損○打面は平坦 ○B面の打撃方向は、左側が下方から、他の2面は上方から	C区	緑灰色のチャート
62-120 14	叩き石	長さ119 幅 25 厚さ 18	91.20	○柱状の河原石○打撃痕は両端やや内側に集中○A面上端部左側消耗激しい(約2㎜)○打撃痕には長軸方向と、それに直交する2種があり、上端部は左側、下端部は右側に集中する	B区 中央東側	灰色の粘板岩 ○P1.87を参照

REPORT ON RESEARCH INTO
CULTURAL PROPERTIES,
TAKATSUKI- CITY, NO.11

THE GUNGEIMASHIRO SITE

I Location and Environment

II Process of Research

III Investigation of Site

IV Sites

V Artifacts

VI Conclusion

THE BOARD OF EDUCATION
TAKATSUKI- CITY, OSAKA

1 9 7 8 · 3

Published by The Board of
Education of Takatsuki-city
Made and Printed in Japan by
Shobundo Printing Co., Ltd, Osaka
1978・3

PREFACE

There is a diluvial hill running from the Tanba Hills almost to the centre of Takatsuki-city. The area is important in an understanding of the dawn of culture in the Mishima district. Three rivers, the Rivers Hio, Akuta and Nyoze, run through this fertile plain, and flow into the River Yodo. Between the Rivers Akuta and Nyoze there are such important sites as the Imashirozuka Tumulus and the Shimagamigunga Site. This area is indispensable to understand the culture cultivated by the River Yodo. The recent excavation surveys which have revealed traces of Palaeolithic men, the so-called first inhabitans of the Mishima district, have attracted the attention of the whole country. In the near future, it may be more possible to reconstruct a picture of prehistoric times.

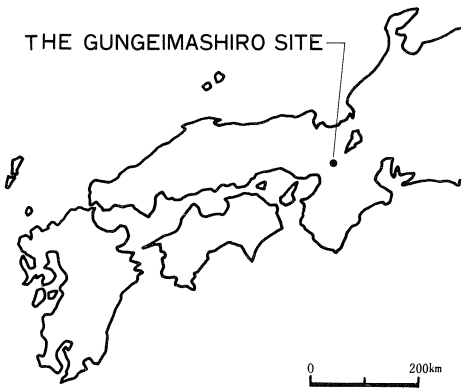
It is our duty to keep and protect valuable cultural places and objects. However, due to the waves of rapid and continuous development, these valuable cultural properties are being lost almost daily, and are difficult to preserve and protect.

The Board of Education of Takatsuki-city excavated the Gungeimashiro Site from 1974 to 1975. This report deals with the results of those investigations. In this report, the artifacts of the Palaeolithic Age in particular are dealt with in detail, but the villages of the Nara Period are mentioned at the same time. It would be gratifying if this report could contribute in any way to knowledge of the Palaeolithic Age or to the record of the ancestors of modern Japanese people.

In addition, we would like to thank the persons and the bodies concerned for their assistance and encouragement.

March, 1978

Shogo Hirai
The Superintendent,
the Board of Education of Takatsuki-city



I Location and Environment

Takatsuki is situated in the northwest of the plains of Osaka, and the River Yodo streams on the south of the city. The city can be broadly divided into three areas, i. e., the mountainous area, the hill area and the plain area. The hill area can be clearly distinguished from the plain area due to a fault. From the mountainous area three rivers, the Rivers Hio, Akuta and Nyoze run through this city and flow into the River Yodo. On the west of the Akuta River there is the Nanpeidai Hills, and the low terrace(Tonda pebble layer)is located on the south side of the Nanpeidai Hills formed by the River Akuta. The low terrace which is tangue-shaped from south to north covers an area of about 8 square kilometres. The height of the low terrace is 14～32 metres above the sea-level, and the relative height with the alluvial plain is 5～10 metres.

The Gungeimashiro Site is located at the centre of the low terrace, and covers an area measuring approximately 0.5×0.4 kilometres. On the west of the site the River Nyoze flows from east to south, and the relative height with the River Nyoze is approximately 1 metre. The low terrace where the Gungeimashiro Site is located has a large number of sites from the Palaeolithic Age to twelfth century, and there are about 10 tumula on the Nanpeidai Hills. On the contrary, on the east of the River Akuta there spreads an alluvial plain directly from the hill area. There are differencies between the east and the west of the River Akuta as regards place, number, scale, etc. Of late, the remains of the Palaeolithic Age were found one after another in the low terrace. Therefore, it becomes possible to grasp the distributions of the artifacts.

II Process of Research

The proposed construction of the Mishima Senior High School by the Board of Education, Osaka Prefecture necessitated excavation of the building foundation. Since 1969, the excavations were carried out sevaral times. The Gungeimashiro Site was unearthed together with the discovery of the villages of the Nara Period. According to the investigation carried out in March, 1970, the relics of the Palaeolithic Age were found in the yellowish brown sandy clay bed which was the actual surface during the Nara Period.

In March, 1973, the area between the Mishima Senior High School and the River Nyoze was decided to be developed. It covers an area measuring 35×130 metres. According to the investigation in August, 1973, the distributions of the remains of the Nara Period were cleared, and the excavation work was started.

The invesigation was carried out from October 15, 1973 to April 30, 1974, and the full-scale investigation of the Palaeolithic Age Site was went on from the beginning of March to the end of April, 1974.

III Investigation of Site

Hitherto, various methods have been used for investigations on the Palaeolithic Age sites. However, the emphasis has been placed upon the spots of the artifacts excavated and the stratification.

The Gungeimashiro Site is the single layer (yellowish brown sandy clay bed). Therefore, the states of the relics excavated and their distributions were throughly investigated. The site was laid out in a fifty-centimetre grid system.

The tool used for excavation was a narrow knife for Western dishes. All the relics recovered were kept as they were until they were photographed and figured. The figures of the relics were written in their actual sizes in order to stand the minute and many-sided research.

Ⅳ Sites

The Palaeolithic Age Site investigated is divided into many Blocks containing stone implements and pebbles. In Area C, eight Groups (Groups A~H) were confirmed. The stone artifacts of the Palaeolithic Age were contained in the yellowish brown sandy clay bed which was the actual surface during the Nara Period. The relics recovered from Groups C to H constituted respectively a similar oval sphere with a major axis of about 8 metres and a minor axis of about 6 metres. Almost the same stone assemblage appeared for each group. One Group consists of four small Blocks. It is shown that a lot of work, such as cooking and making stone implements was done in each Block.

The only pit in this site was found at the southwest of Block F_1, and has a major axis of 1.4 metres, a minor axis of 0.75 metres and a depth of 0.15 metres.

V Artifacts

The relics of the Palaeolithic Age Site can be broadly divided into stone implements and pebbles. The stone implements consist of knife blades, end-scrapers, gravers, flakes with secondary work, flakes with use marks, wing-shaped flakes, blade flakes, flakes, wing-shaped flake cores, blade flake cores and hammerstones. These stone implements were, for the most part, brought to the site as finished tools.

The material used for the stone implements was mainly sanukite. However, chert, indurated shale, tuff, iron-quartz, rhyolite, quartzite and clay slate are also used in some cases. For example, chert is used for one end-scraper, 3 gravers, 3 flakes with use marks, and 7 blade flakes, indurated shale for one end-scraper, tuff for one flake with use marks, iron-quartz for 3 flakes with use marks, rhyolite for one blade flakes, quartzite for one hammerstone and clay slate for 3 hammerstones. This stands out in sharp contrast to the fact that the knife blades and wing-shaped flakes are made of sanukite. Moreover, most of the other rocks, except for sanukite, cannot be found in the Kinki district. These rocks were transported from the Hokuriku district.

A large number of pebbles was found at the Palaeolithic Age Site. However, they were mostly broken through use. In particular, remarkable changes from fire can be seen on the surfaces of the sandstone, mudstone and diabase. On the other hand, there were no marks of thermal changes on the surface of the chert of which most of the pebbles are made, as chert is a metamorphic rock. The pebbles bound and restored are approximately fist-size river-beach stones. It is thought, therefore, that the pebbles were brought from the River Nyoze nearby.

VI Conclusion

This investigation of the Palaeolithic Age Site is the first full-scale excavation survey in the Kinki district, and provides useful reference materials for the study of the Kou Culture which extended all over western Japan.

The site is located in a low terrace dated 26,000±800 B.P. by the C^{14} method. The stone artifacts of the Palaeolithic Age were contained in a yellowish brown sandy clay bed deposited on this low terrace. Observation of the cross-section reveals that there was thick gravel below the clay bed.

This is considered to be the old River Nyoze. It is assumed, therefore, that there was a rapid change of climate before the formation of this site. It became clear that the date of the low terrace (Tonda pabble layer) measured by the C^{14} method was not useful for dating the Kou Culture.

The Palaeolithic Age Site has a lot of pebble groups and stone implement groups. A pebble group, the so-called Reki-gun, is a sort of stone heap. We named it a 'Block', and four Blocks make up one Group. We found eight such Groups (Groups A~H).

Each Group has a similar distribution range of remains and the same number of Blocks. Therefore, it can be considered that one Group shows the sphere of activity of a number of individuals. Observation of the stone implement in each Group reveals a typical stone assemblage of the Kou Culture, and Groups show the close similarity in the working stages as regards the making of stone implements. In particular, each Group has one end-scraper, and a further similarity in that the end-scraper was found at the edge of the central pebble group. Judging from its function, the end-scraper is thought to have been a tool for women. On the other hand, the manufacture of stone implements is considered to have been done by men. A Group including tools used by both men and women possibly shows the territory of a family.

The next problem is that of the place of dwelling (the sleeping place). On Palaeolithic Age sites in Japan, pebbles, stone tools and charcoal grains have been unearthed, but other reliable artifacts have not been found. In general, it can be inferred that a stone hearth was placed in the centre of the dwelling where pebbles and charcoal grains were concentrated. However, from the unevenness of the pebble faces, the place where stone-tools were produced and the binding condition of the pebbles, there is a high possibility that the dwelling itself existed somewhere where there were no remains.

To mention the end-scraper again, the location where it was used is thought to have been limited in view of its function.

Furthermore, considering where the end-scraper was unearthed and the disposition of Blocks in each Group, we can conjecture that the dwelling of each Group was as follows:

Group C : north	Group D : west	Group F : south
Group G : east	Group H : north	

The binding and discriminating work was done for all the stone implements recovered. It became clear from the results that most of the stone tools were brought to the site as finished tools, and that the stone tools manufactured inside the site were unexpectedly few in number.

The stone implements produced were taken to the next camp, and the many flakes remaining from their manufacture were excavated from the layer which also contained a lot of stone implements and pebbles. From this, it can be considered that stone tools were made in one camp when Palaeolithic man moved to the next camp.

Accordingly, the differences in location of the spots where the flakes and the finished tools were unearthed are of great importance in the study of restoring the working situation and further the life of Palaeolithic man. It is thought that a pebble group was used for cooking. From the circumference of the group, wing-shaped flakes, knife blades (Ⅱ) and big flakes were recovered. These tools were generally finished ones, and it seems highly possible that they were abandoned after use at one site.

The stone assemblage of the Kou Culture is shown in Table 1. The material used for stone implements was mainly sanukite. However, there were several other types of rock introduced from the Hokuriku district. This reveals that there was some exchange between the peoples of that age. On the other hand, many Setouchi technique stone implements were found in the Hokuriku district. The distribution runs as far as Toyama Prefecture, Niigata Prefecture and Yamagata Prefecture.

Lastly, some mention must be made of the function of knife blades. Knife blades are predominant in the stone assemblage. It was once considered that they were used for cutting. However, in view of their sharp heads, at present they are thought to be spears. There are two theories of how they were used,i.e., 1) as pointed heads and 2) as arrowheads. It has also been suggested that they were combined tools, but that is not thought to have been very likely at the present stage.

As shown in Fig. 11, the length, width, thickness and weight of the completed knife blades were measured, and compared with the tanged points and stone arrowheads. The width of the stone implements was decided by the shaft to which they were adhered. It is clear from this Figure that the widths of the knife blades and the stone arrowheads are approximately the same, but the tanged points are wider at about 2～3.5 centimetres.

The shapes and measurements of the stone implements are inseparably related with the stone-making techniques. The cross-section of a knife blade is a trapezium and they are heavy, because blunting was done so as to narrow the width of the wing-shaped flake and to sharpen the head. On the other hand, the tanged points and arrowheads are trimmed bifacially and very minutely from indeterminate flakes. Therefore, these have uniform length, width and thickness. They are shaped like a convex lens in section and are light. In this way, the difference between the stone-making techniques influences shapes and measurements of the stone implements. Considering that most of the knife blades weigh approximately 5 grams, it seems very likely that they served the function of arrowheads.

PLATES

1 a. Aerial View of the Gengeimashiro Site
b. Distant View of the Gungeimashiro Site (seen from the south)
2 General View of the Survey Area (seen from the south)
3 a. General View of the Excavation Area (seen from the southeast)
b. General View of the Excavation Area (seen from the northwest)
4 a. State of the Relics Excavated in Group A (seen from the south)
b. State of the Relics Excavated in Group B (seen from the northwest)
5 a. State of the Relics Excavated in Group C (seen from the northwest)
b. State of the Relics Excavated in Block C_1 (seen from the west)
6 a. State of the Relics Excavated in Group C (seen from the west)
b. State of the Relics Excavated in Block C_2 (seen from the south)
7 a. State of the Relics Excavated in Block D_3 and Group F (seen from the west)
b. State of the Relics Excavated in Block D_4 (seen from the west)
8 a. State of the Relics Excavated in Group F (seen from the southeast)
b. State of the Relics Excavated in Block F_1 (seen from the south)
9 a. State of the Relics Excavated in Block F_1 (seen from the south)
b. State of the Artifacts Excavated in Block F_1 (seen fron the south)
10 a. State of the Relics Excavated in Group G (seen from the south)
b. State of the Relics Excavated in Group G (seen from the south)
11 a. State of the Relics Excavated in Group H (seen from the west)
b. State of the Relics Excavated in Block H_1 (seen from the west)
12 a. Knife Blades from Group A (Side B)
b. ditto (Side A)
13 a. Knife Blades, Flake with Secondary Work and Wing-shaped Flake from Group A (Side B)
b. ditto (Side A)
14 a. Wing-shaped Flakes and Hammerstone from Group A (Side B)
b. ditto (Side A)
15 a. Wing-shaped Flakes and Flakes from Group A (1)
b. ditto (2)
c. ditto (3)
d. Flakes from Group A
16 a. Flakes from Group A
b. Flakes from Group B
17 a. Knife Blades, Wing-shaped Flakes and Flakes from Group B (Side B)
b. ditto (Side A)
18 a. Knife Blades from Group C (Side B)
b. ditto (Side A)
19 a. Knife Blade, Gravers, Flake with Secondary Work and Flakes with Use Marks from Group C (Side B)
b. ditto (Side A)
20 a. Flakes with Use Marks and Wing-shaped Flake from Group C (Side B)
b. ditto (Side A)
21 a. Wing-shaped Flakes from Group C (Side B)
b. ditto (Side A)
22 a. Wing-shaped Flakes from Group C (Side B)
b. ditto (Shide A)
23 a. Wing-shaped Flakes and Hammerstone from Group C (Side B)
b. ditto (Side A)
24 a. Bound Flake and End-scraper from Group C (Side B)
b. ditto (Side A)
c. Flakes from Block C_1
d. Flakes from Block C_3
25 a. Flakes from Block C_2
b. Flakes from Block C_4
26 a. Knife Blades and Blade Flakes from Group D (Side B)
b. ditto (Side A)
27 a. Flakes with Use Marks, End-scraper and Wing-shaped Flakes from Group D (Side B)
b. ditto (Side A)
28 a. Wing-shaped Flakes from Group D (Side B)
b. ditto (Side A)
c. Wing-shaped Flakes from Group D (Side B)
d. ditto (Side A)

29 a. Wing-shaped Flake, — Wing-shaped - Flake Cores and Flake from Group D (Side B)
b. ditto (Side A)
30 a. Wing-shaped Flake Core and Flake from Group D (Side B)
b. ditto (Side A)
31 a. Flakes from Block D_1
b. Flakes from Block D_3
32 a. Knife Blades from Group E (Side B)
b. ditto (Side A)
33 a. Knife Blades from Group E (Side B)
b. ditto (Side A)
34 a. Knife Blades from Group E (Side B)
b. ditto (Side A)
35 a. Knife Blades from Group E (Side B)
b. ditto A)
36 a. Flake with Use Marks, Blade Flake and Wing-shaped Flakes from Group E (Side B)
b. ditto (Side A)
37 a. Wing-shaped Flakes, Prepared-platform Flake, Blade Flake Cores, Flake and Wing-shaped Flake Core from Group E (Side B)
b. ditto (Side A)
38 a. Wing-shaped Flake Cores and Bound Flakes from Group E (Side B)
b. ditto (Side A)
39 a. Wing-shaped Flake Core and Bound Flake from Group E (1)
b. ditto (2)
c. ditto (3)
40 a. Flakes from Group E
b. Flakes from Group E
41 a. Knife Blades and End-scraper from Group F (Side B)
b. ditto (Side A)
42 a. Gravers, Blade Flakes and Wing-shaped Flakes from Group F (Side B)
b. ditto (Side A)
43 a. Wing-shaped Flakes from Group (Side B)
b. ditto (Side A)
44 a. Wing-shaped Flakes and Wing-shaped Flake Core from Group F (Side B)
b. ditto (Side A)
45 a. Bound Flakes and Hammerstone from Group F (Side B)
b. ditto (Side A)
46 Graver and Bound Flakes from Group F
47 a. Flakes from Block F_1
b. Flakes from Block F_1
48 a. Flakes from Block F_1
b. Flakes from Blocks F_2, F_3 and F_4
49 a. Knife Blades and End-scraper from Group G (Side B)
b. ditto (Side A)
50 a. Wing-shaped Flakes from Group G (Side B)
b. ditto (Side A)
51 a. Wing-shaped Flakes and Flake from Group G (Side B)
b. ditto (Side A)
52 a. Wing-shaped Flakes, Flake and Wing-shaped Flake Core from Group G (Side B)
b. ditto (Side A)
53 a. Flakes and Bound Flakes from Group G (Side B)
b. ditto (Side A)
54 a. Flakes from Group G
b. Flakes from Group G
55 a. Flakes from Group G
b. Flakes from Group G
56 a. Knife Blades and End-scraper from Group H (Side B)
b. ditto (Side A)
57 a. Flakes with Use Marks and Flakes from Group H (Side B)
b. ditto (Side A)
58 a. Wing-shaped Flake Cores, Flake and Wing-shaped Flake from Group H (Side B)
b. ditto (Side A)
59 a. Bound Flakes from Group H (Side B)
b. ditto (Side A)
c. Flakes From Blocks H_1 and H_2
60 a. Flakes from Block H_3
b. Flakes from Block H_4
61 a. Knife Blade and End-scrapers Collected from the Ground Surface (Side B)
b. ditto (Side A)
62 a. End-scrapers, Graver, Blade Flakes, Flake and Hammerstone Collected from the Ground Surface (Side B)
b. ditto (Side A)

63 a. Wing-shaped Flakes, Wing-shaped Flake Core and Flakes Collected from the Ground Surface (Side B)
b. ditto (Side A)
64 a. Flakes Collected from the Ground Surface
b. Stone Arrowheads Collected from the Ground Surface
65 a. Pebbles from Group A
b. Pebbles from Group B
c. Pebbles from Block C_1
66 a. Pebbles from Block C_1
b. Pebbles from Block C_2
67 a. Pebbles from Block C_2
b. Pebbles from Block C_3
68 a. Pebbles from Block C_4
b. Pebbles from Block D_1
69 a. Pebbles from Block D_1
b. Pebbles from Block D_2
70 a. Pebbles from Block D_3
b. Pebbles from Block D_3
71 a. Pebbles from Block D_3
b. Pebbles from Block D_4
72 a. Pebbles from Group E
b. Pebbles from Group E
73 a. Pebbles from Block F_1
b. Pebbles from Block F_1
74 a. Pebbles from Block F_2
b. Pebbles from Block F_3
75 a. Pebbles from Group G
b. Pebbles from Group G
76 a. Pebbles from Group G
b. Pebbles from Block H_1
c. Pebbles from Block H_2
77 a. Stone Assemblage of Group E
b. Stone Assemblage of Group A
78 Stone Assemblage of Group C
79 Stone Assemblage of Group D
80 Stone Assemblage of Group F
81 Stone Assemblage of Group G
82 Stone Assemblage of Group H
83 Knife Blades
84 Use Marks (1)
85 Use Marks (2)
86 Development of Hammerstone from Group F
87 Development and Detail of Hammerstone Collected from the Ground Surface
88 Development and Detail of End-scraper from Group F
89 Knife Blades from Group A
90 Knife Blades, Flake with Secondary Work and Wing-shaped Flakes from Group A
91 Wing-shaped Flakes and Hammerstone from Group A
Knife Blades and Wing-shaped Flakes from Group B
92 Knife Blades from Group C
93 Gravers, Flake with Secondary Work and Flakes with Use Marks from Group C
94 Flake with Use Marks and Wing-shaped Flakes from Group C
95 Wing-shaped Flakes from Group C
Wing-shaped Flakes, Hammerstone, Bound Flakes and End-scraper from Group C
97 Knife Blades, Blade Flakes and Flakes with Use Marks from Group D
98 End-scraper and Wing-shaped Flakes from Group D
99 Wing-shaped Flakes and Wing-shaped Flake Cores from Group D
100 Flakes and Wing-shaped Flake Core from Group D
101 Knife Blades from Group E
102 Knife Blades from Group E
103 Knife Blades from Group E
104 Knife Blades, Flake with Use Marks, Blade Flakes, Wing-shaped Flakes and Flake from Group E
105 Wing-shaped Flakes, Prepared-platform Flake, Blade Flake Core and Wing-shaped Flake Core from Group E
106 Wing-shaped Flake Core and Bound Flake from Group E
107 Knife Blades from Group F
108 End-scraper, Graver, Bound Flakes, Blade Flake and Wing-shaped Flakes from Group F
109 Wing-shaped Flakes from Group F
110 Wing-shaped Flakes, Wing-shaped Flake Core and Flake from Group F
111 Bound Flakes and Hammerstone from Group F
112 Knife Blades and End-scraper from Group G
113 Wing-shaped Flakes from Group G
114 Wing-shaped Flakes and Flake from Group G

115 Wing-shaped Flake, Wing-shaped Flake Core, Flake and Bound Flake from Group G
116 Knife Blades and Flakes with Use Marks from Group H
117 Flake with Use Marks, Flakes, End-scraper, Prepared-platform Flake and Wing-shaped Flake Core from Group H
118 Flake, Bound Flakes and Wing-shaped Flake Core from Group H
119 Knife Blade and End-scrapers Collected from the Ground Surface
120 Graver, Wing-shaped Flakes, Wing-shaped Flake Core, Blade Flakes and Hammerstone Collected from the Ground Surface

PLATES OF APPENDICES(cased)

121 Survey Map of the Palaeolithic Age Site
122 General Map of the Palaeolithic Age Remains
123 States of the Relics Excavated from Group A
124 Stone Implements Excavated from Group A and their Binding Condition
125 Pebbles Excavated from Group A and their Binding Condition
126 State of the Relics Excavated from Group B
127 Stone Implements Excavated from Group B and their Binding Condition
128 State of the Relics Excavated from Group C
129 Stone Implements Excavated Group from C and their Binding Condition
130 Pebbles Excavated from Group C and their Binding Condition
131 State of the Relics Excavated from Group D
132 Stone Implements Excavated from Group D and their Binding Condition
133 Pebbles Excavated from Group D and their Binding Condition
134 State of the Remains Excavated from Group F
135 Stone Implements Excavated Group F and from their Binding Condition
136 Pebbles Excavated from Group F and their Binding Condition
137 State of the Relics Excavated from Group G
138 Stone Implements Excavated from Group G and their Binding Condition
139 Pebbles Excavated from Group G and their Binding Condition
140 State of the Relics Excavated from Group H
141 Stone Implements Excavated from Group H and their Binding Condition
142 Kinds of Stone Implements from the Gungeimashiro Site

FIGURES

1 Location of the Gungeimashiro Site
2 Excavated Area of the Gungeimashiro Site
3 Landscape of Survey Area
4 Cross Section in South-North Trench
5 Cross Section NO.1 in East-West Trench
6 Cross Section NO.2 in East-West Trench
7 Length and Weight of Knife Blades
8 Length ahd Weight of Wing-shaped Flakes
9 Width of Knife Blades and Wing-shaped Flakes
10 Stone Arrowheads from the Jomon Period
11 Length, Thickness, Width and Weight of Knife Blades, Tanged Points and Stone Arrowheads
12 Reconstruction of the Gungeimashiro Site

TABLES

1 Stone Assemblages Classified by Groups
2 Stone Assemblages Classified by Stones
3 Pebbles Classified by Groups
4 Observations on the Stone Implements Excavated from Group A
5 Observations on the Stone Implements Excavated from Group B
6 Observations on the Stone Implements Excavated from Group C
7 Observations on the Stone Implements Excavated from Group D
8 Observations on the Stone Implements Excavated from Group E
9 Observations on the Stone Implements Excavated from Group F
10 Observations on the Stone Implements Excavated from Group G
11 Observations on the Stone Implements Excavated from Group H
12 Observations on the Stone Implements Collected from the Ground Surface

PLATES
（図 版・図 面）

郡家今城遺跡

a．郡家今城遺跡航空写真

b．遺跡遠景（南側上空から）

郡家今城遺跡

調査地区全景（南側から）

a．発掘地区全景（南東側から）

b．発掘地区全景（北西側から）

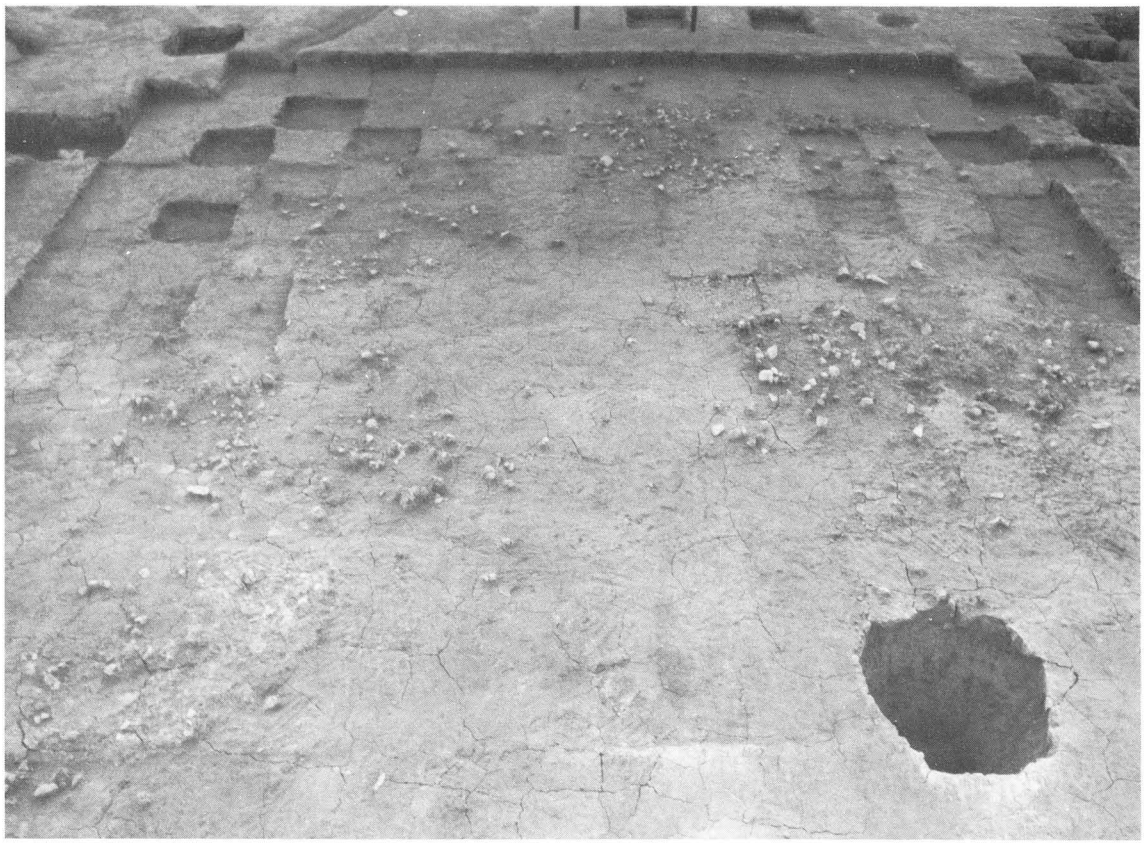
a．A群の遺物出土状況（南側から）

b．B群の遺物出土状況（北西側から）

a．C群の遺物出土状況（北西側から）

b．C_1ブロックの遺物出土状況（西側から）

郡家今城遺跡



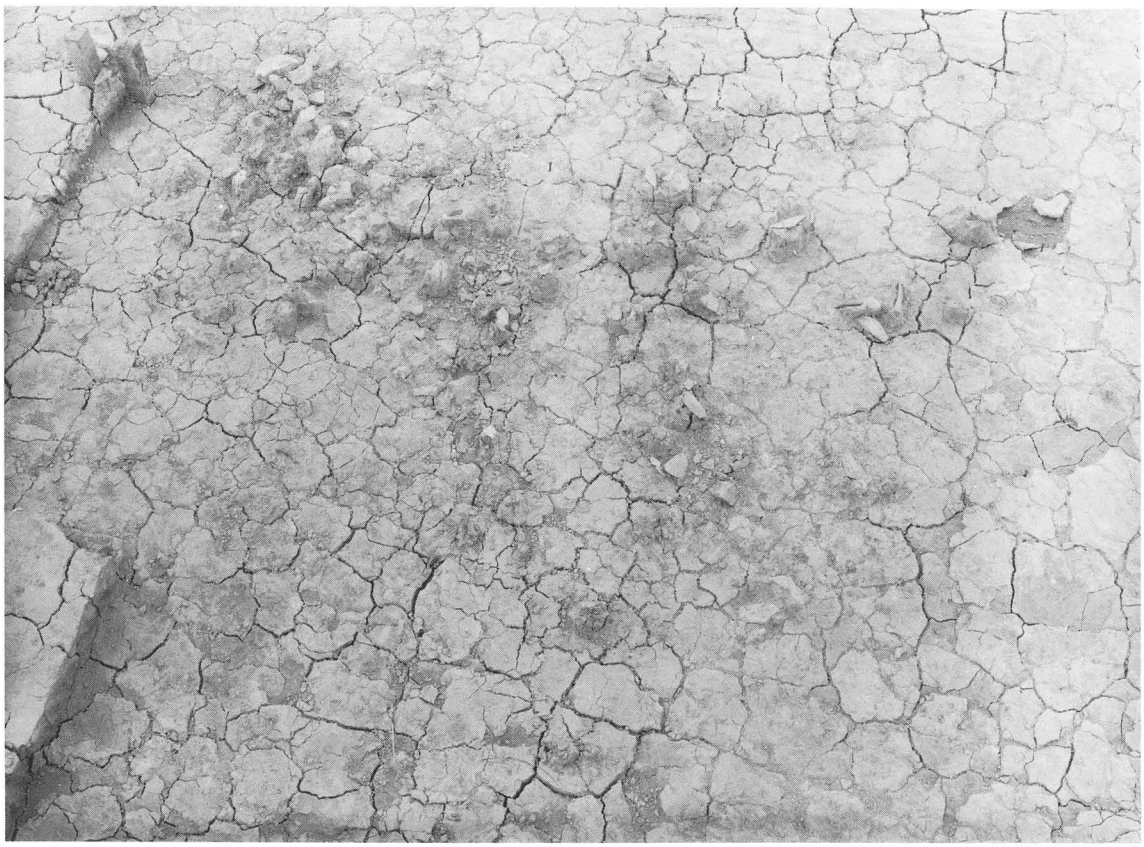
a．C群の遺物出土状況（西側から）

b．C_2ブロックの遺物出土状況（南側から）

a．D_3ブロック・F群の遺物出土状況（西側から）

b．D_4ブロックの遺物出土状況（西側から）

a．F群の遺物出土状況（南東側から）



b．F_1ブロックの遺物出土状況（南側から）

a．F_1ブロックの遺物出土状況（南側から）

b．F_1ブロックの遺物出土状況（細部・南側から）

郡家今城遺跡

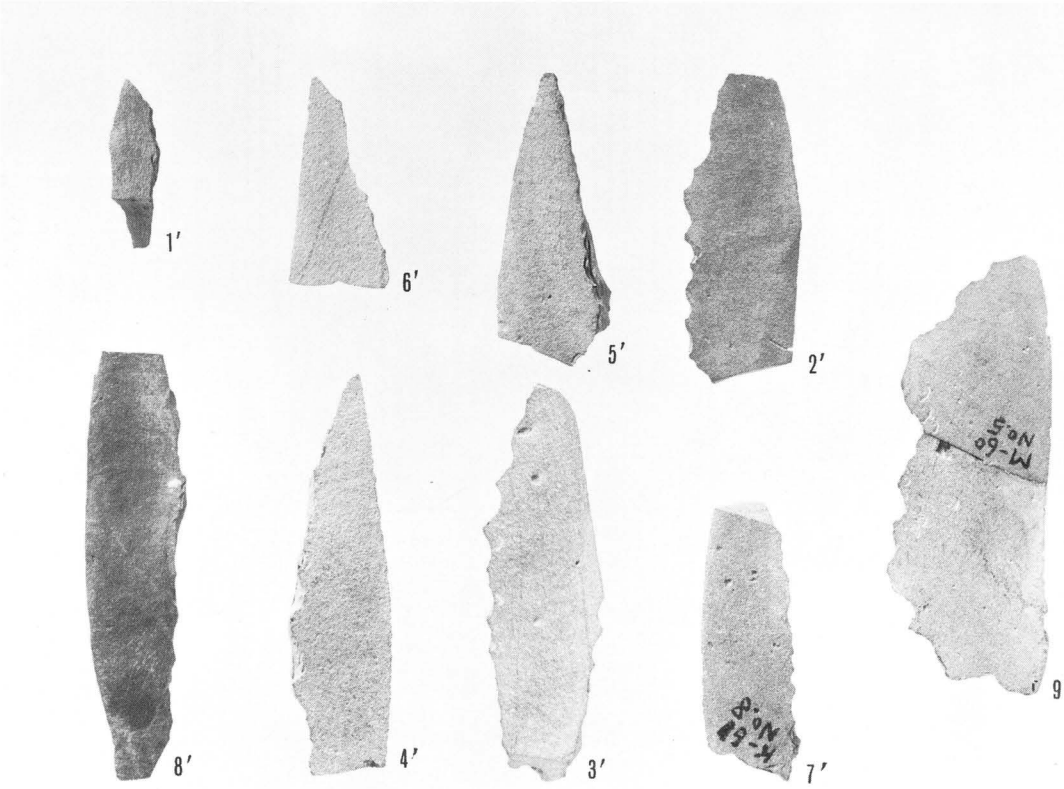
a．G群の遺物出土状況（南側から）

b．G群の遺物出土状況（南側から）

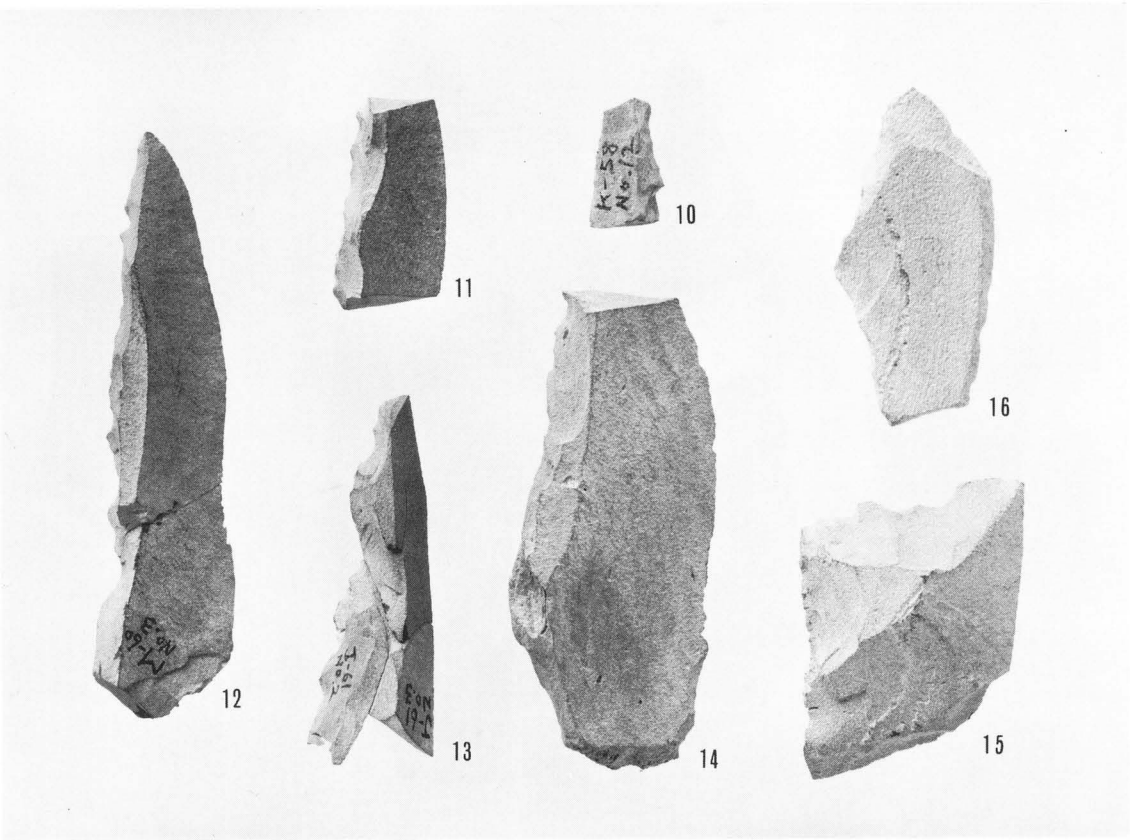
a．H群の遺物出土状況（西側から）

b．H_1ブロックの遺物出土状況（西側から）

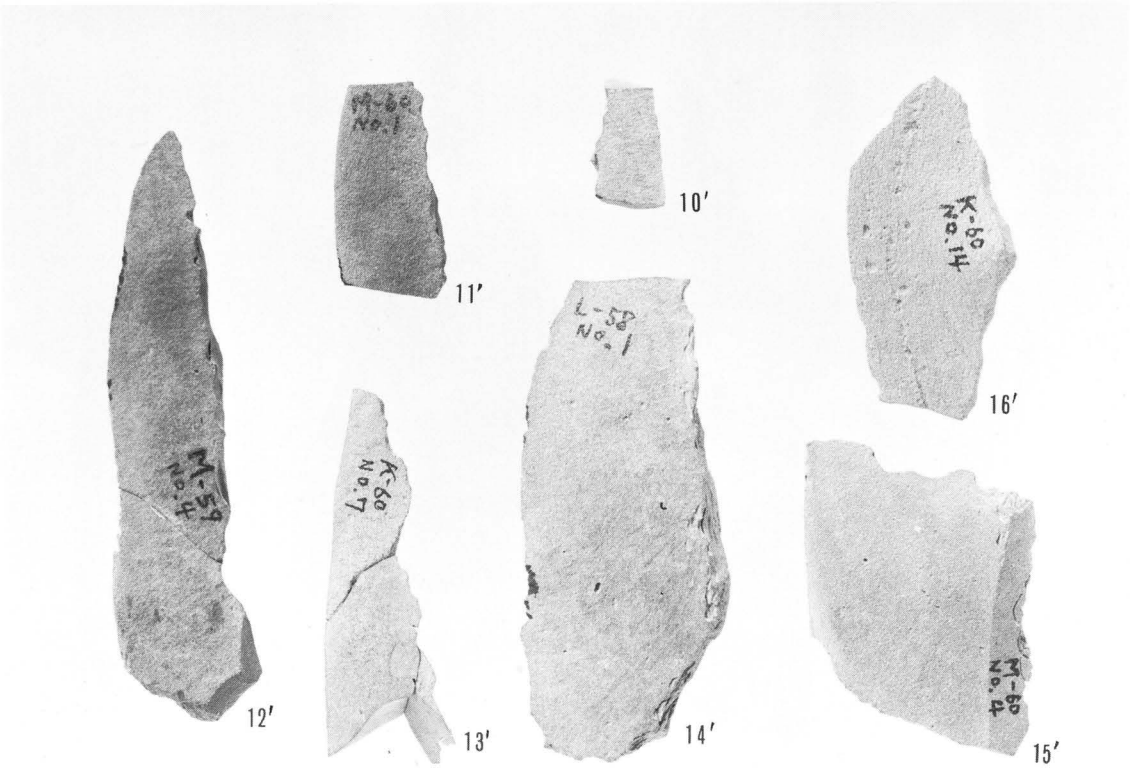
a．A群出土のナイフ形石器（B面）　約1/1



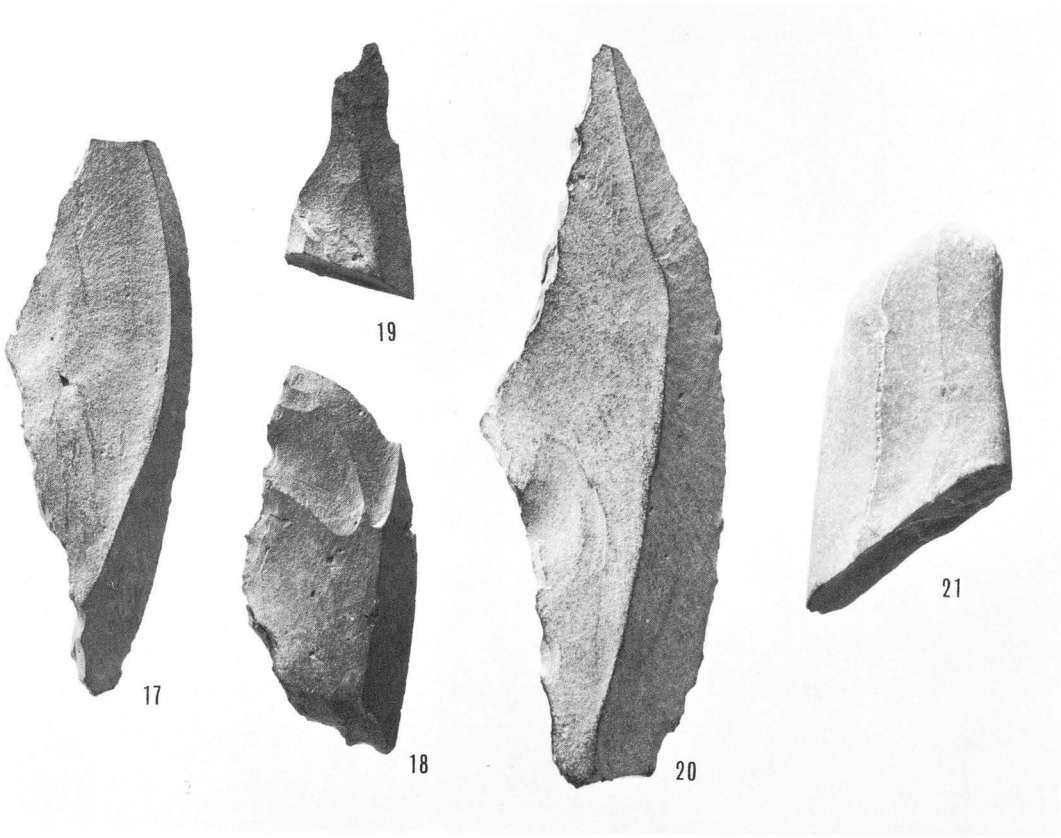
b．同　上（A面）



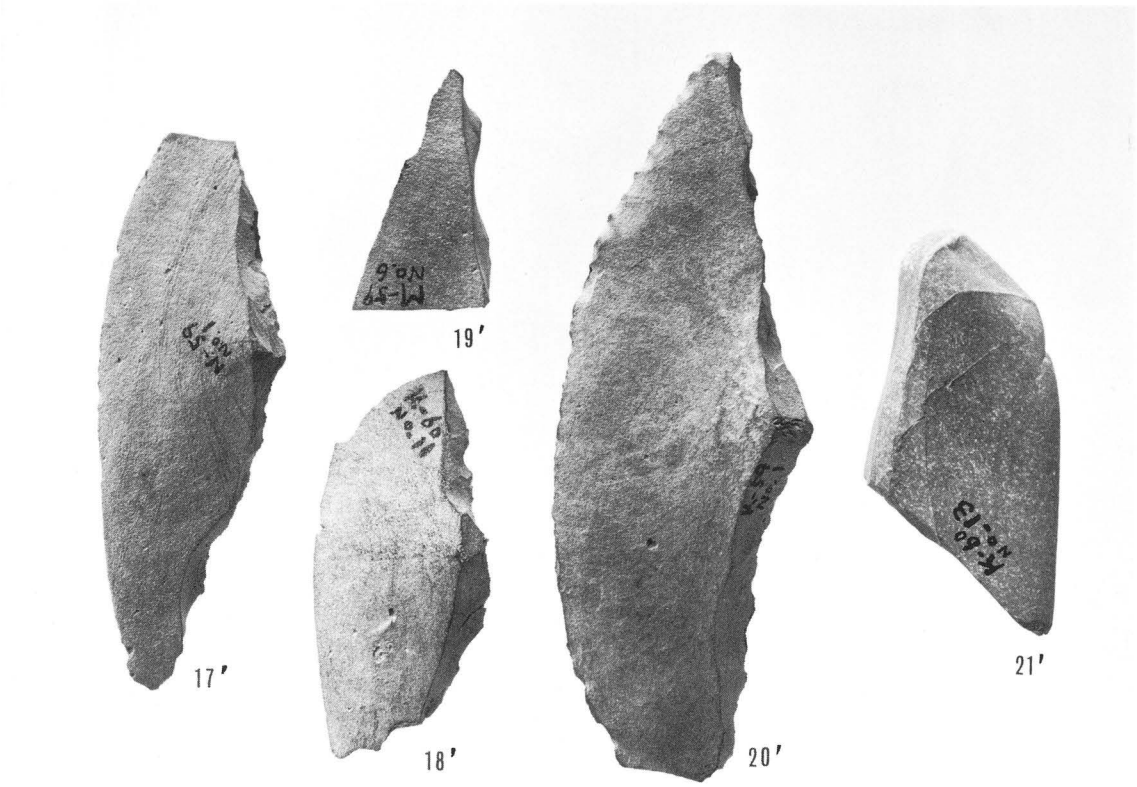
a．A群出土のナイフ形石器・二次加工のある剥片・翼状剥片（B面）　約1/1



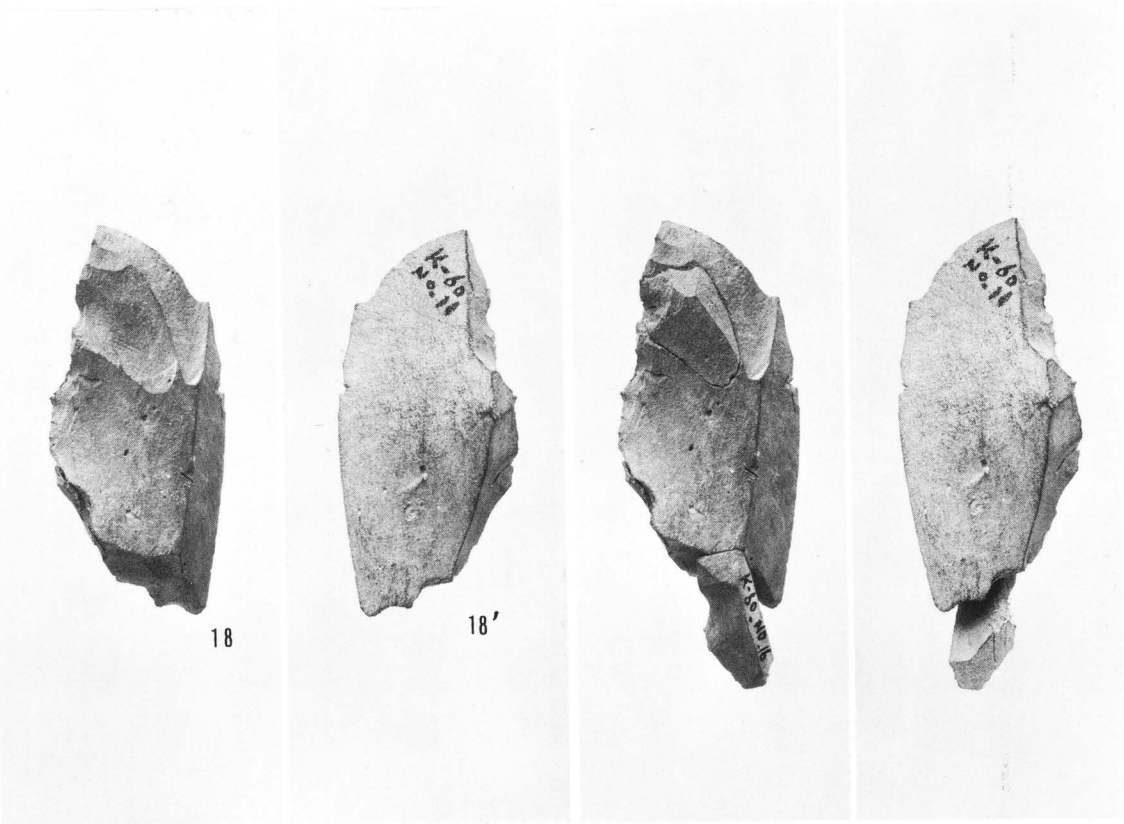
b．同　上（A面）



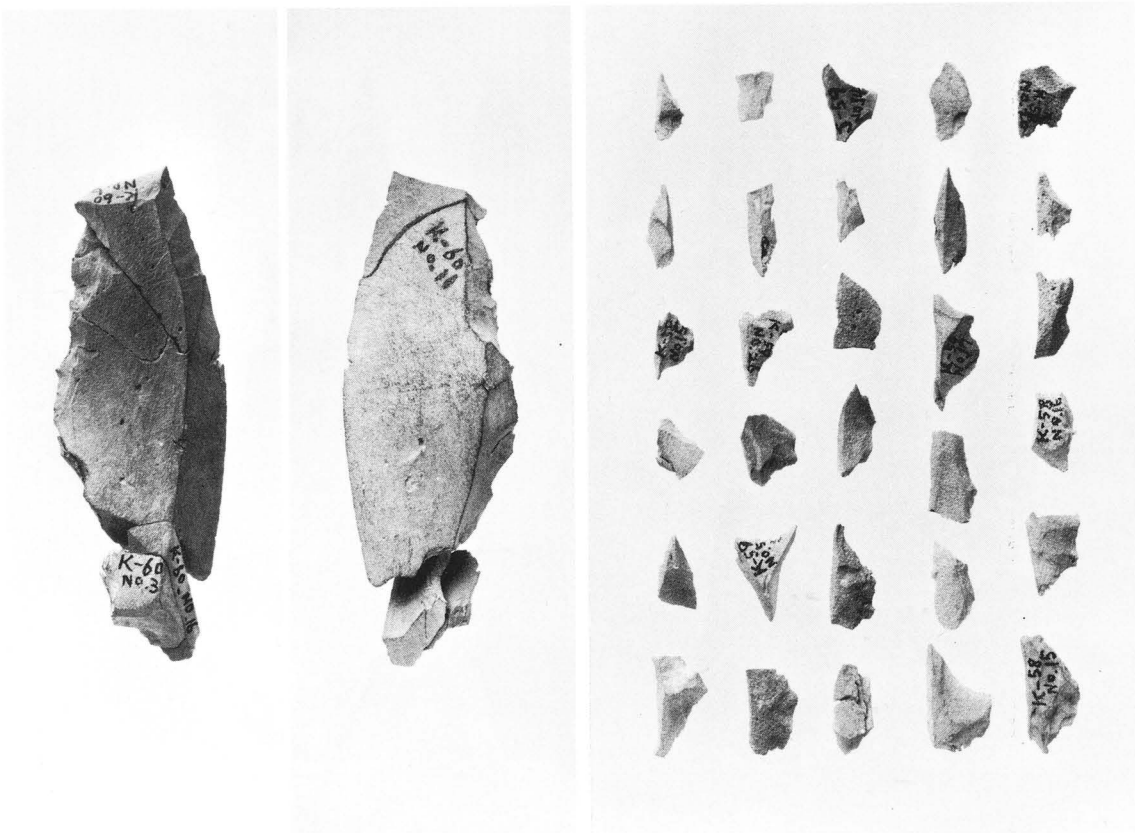
a．A群出土の翼状剥片・叩き石（B面）　約1/1



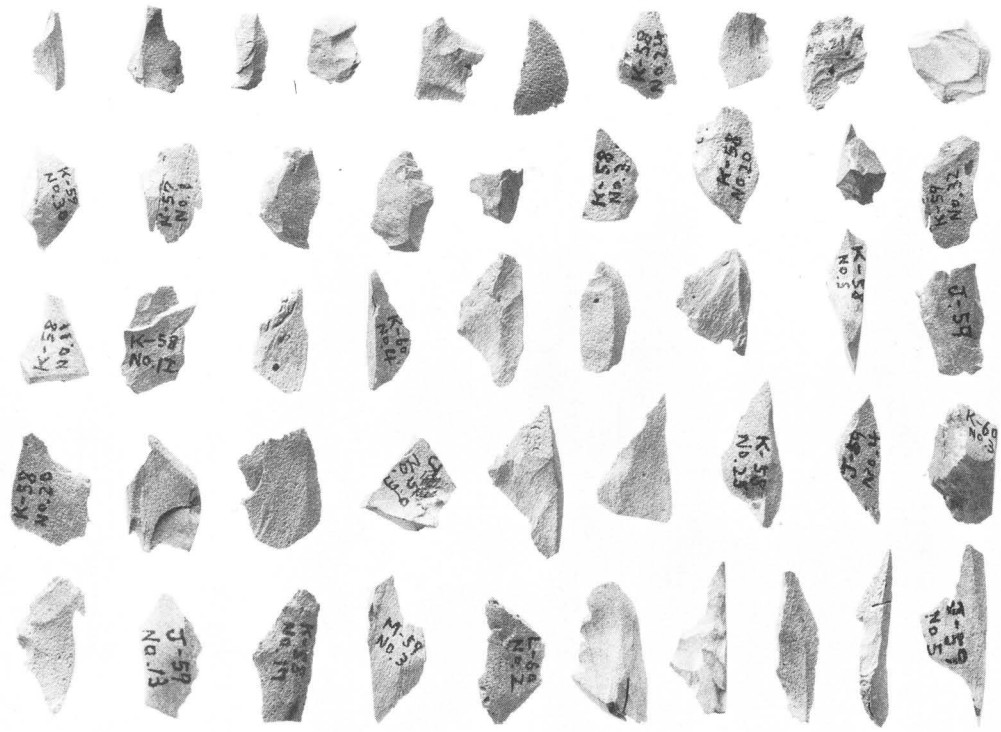
b．同　上（A面）



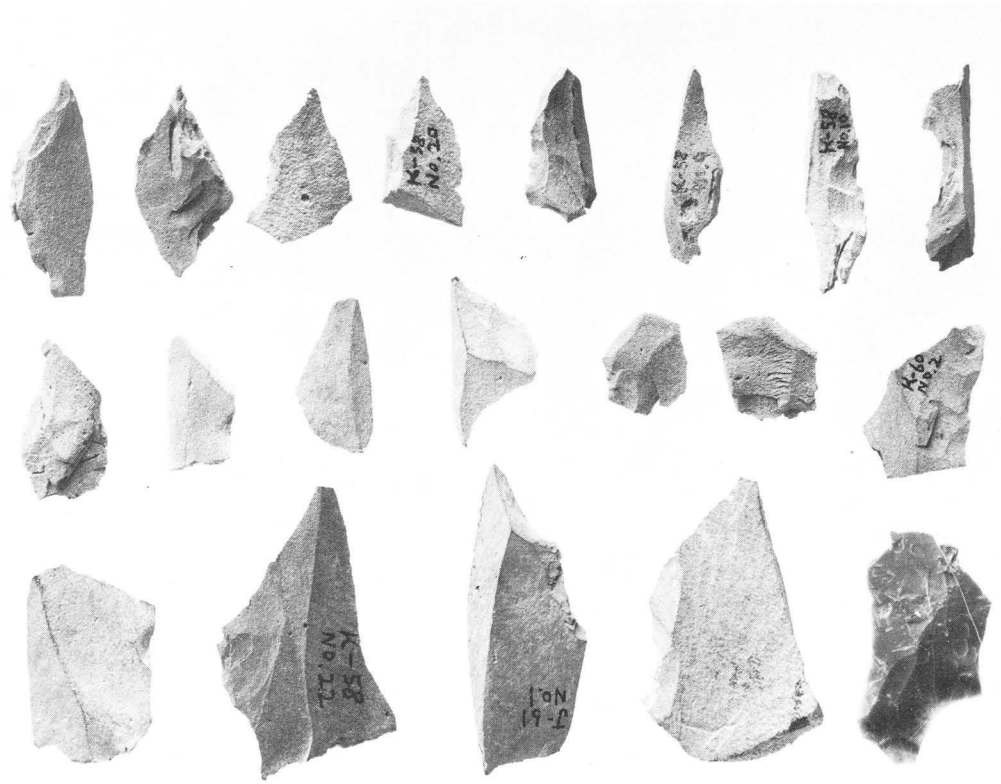
a．A群出土の翼状剥片と接合剥片(1)　　b．同　左(2)　　約1/1



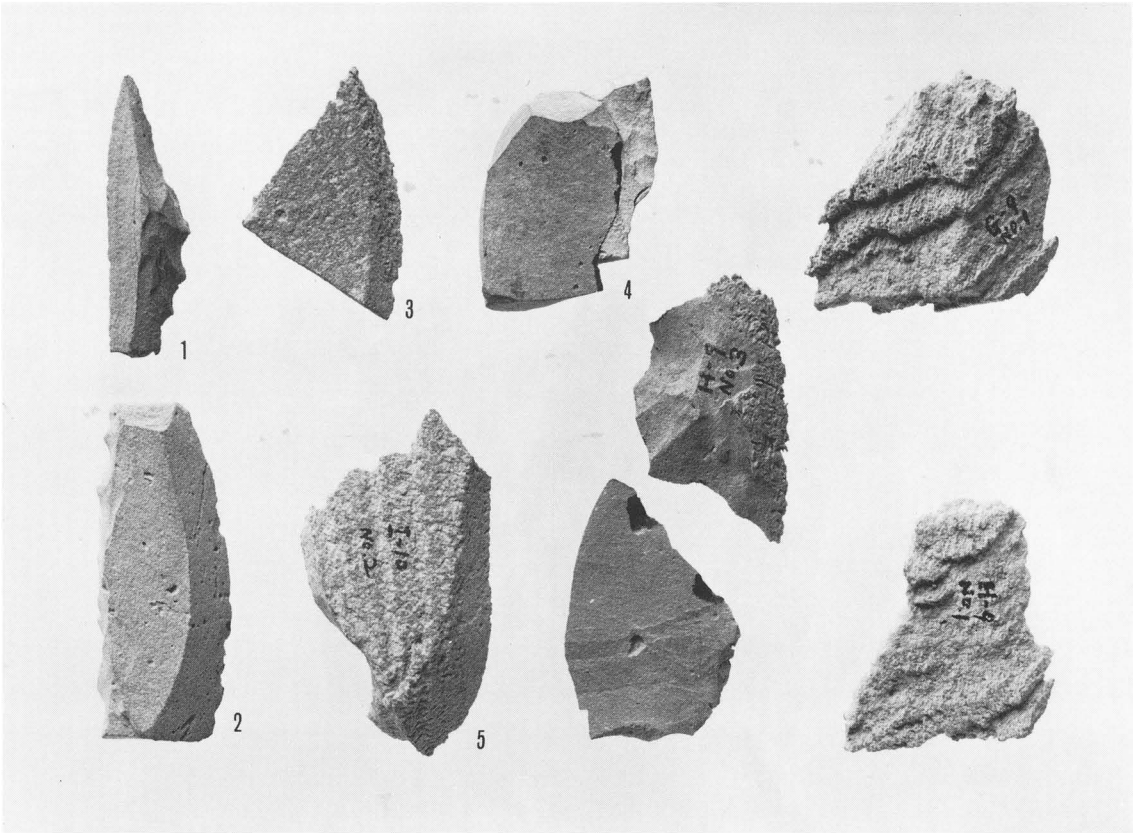
c．同　上(3)　　d．A群出土の剥片　　約1/1



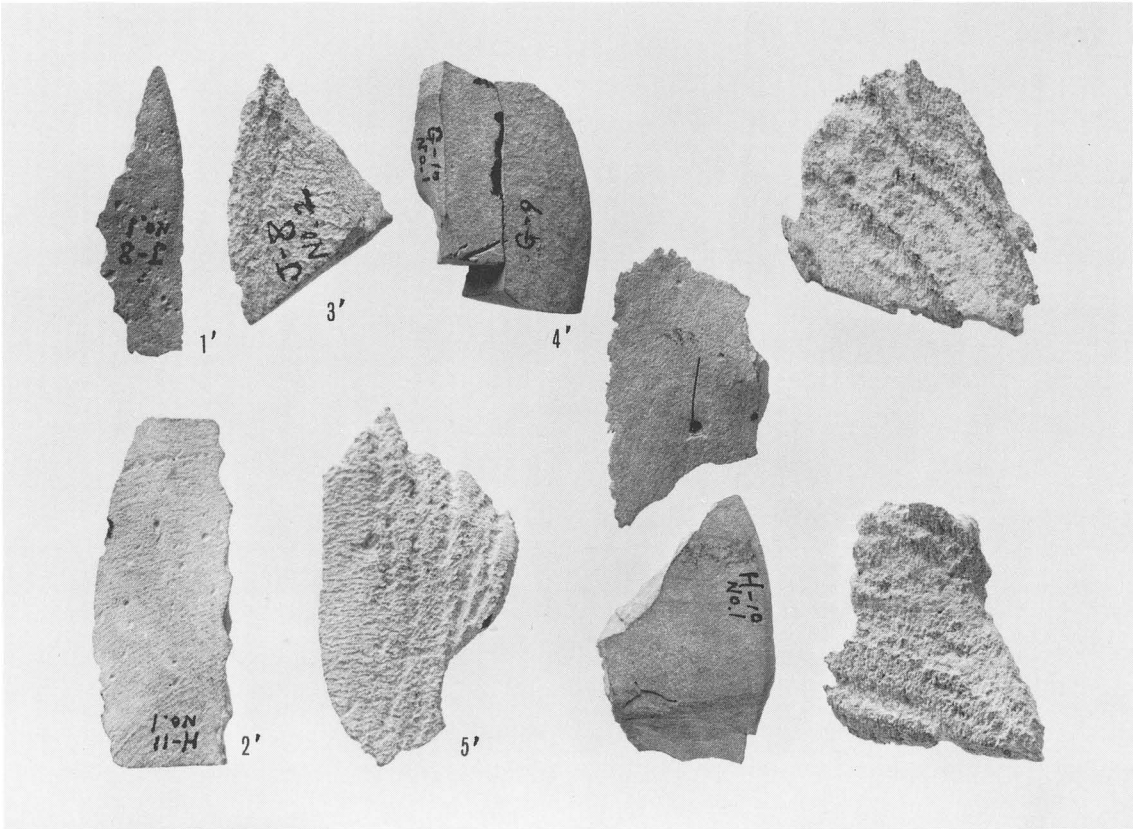
a．A群出土の剥片　　約1/1



b．A群出土の剥片　　約1/1

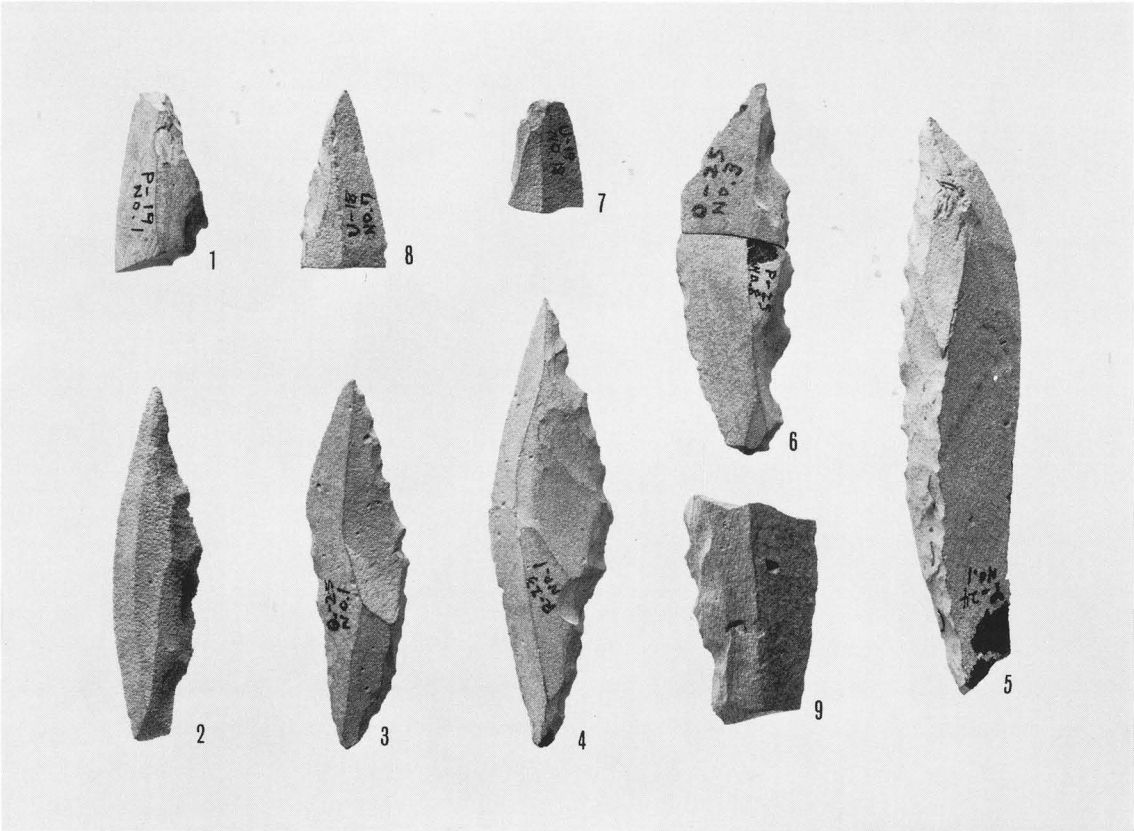


a．B群出土のナイフ形石器・翼状剥片・剥片（B面）　約1/1

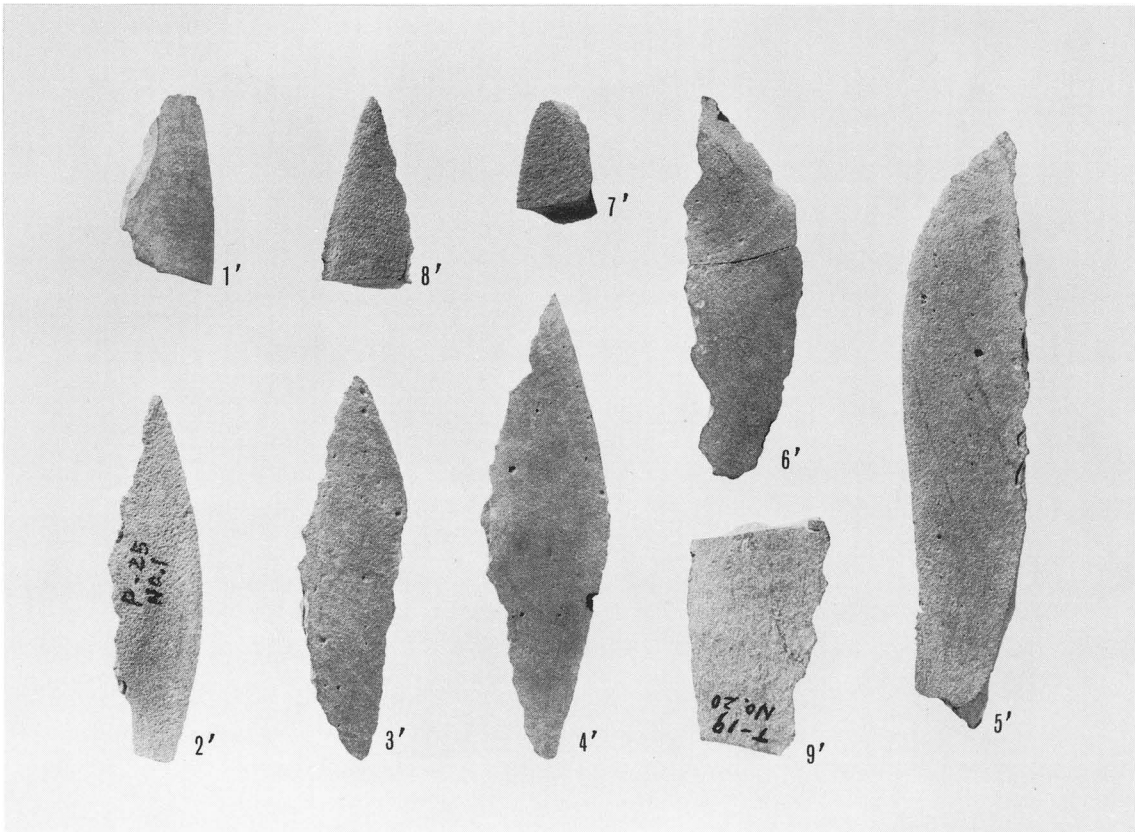


b．同　上（A面）

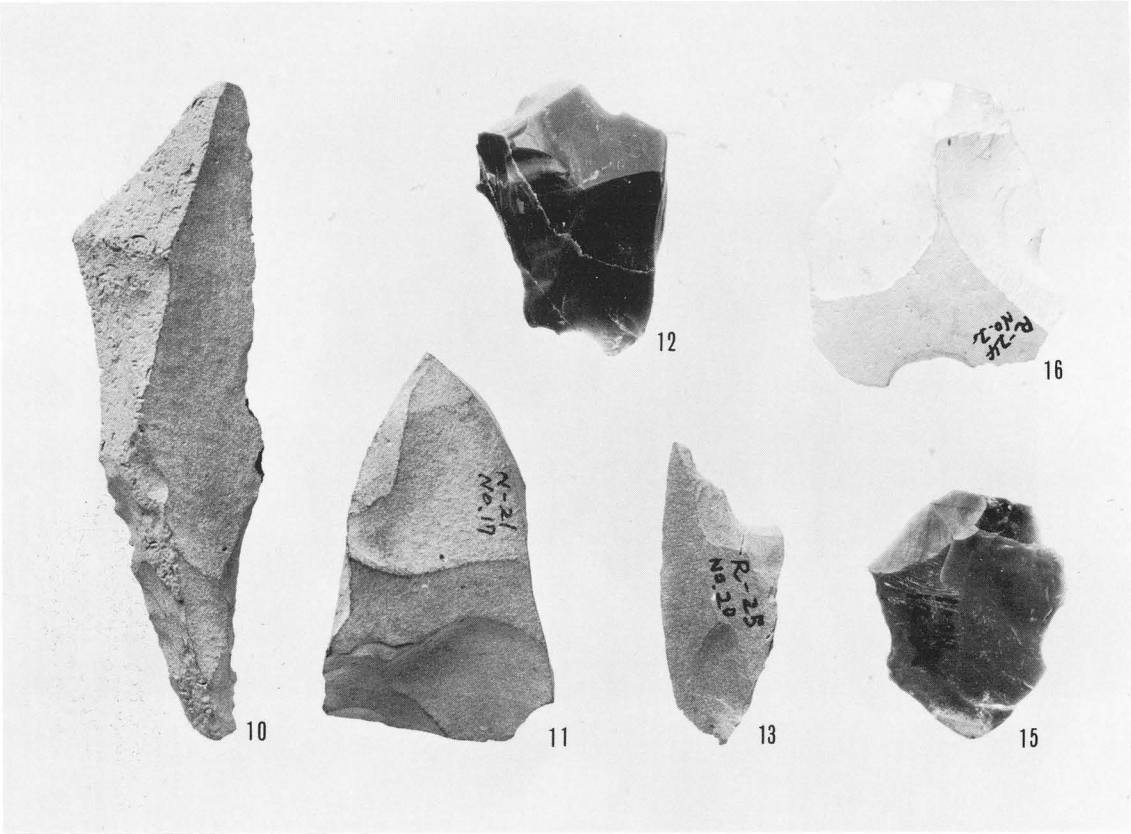
郡家今城遺跡



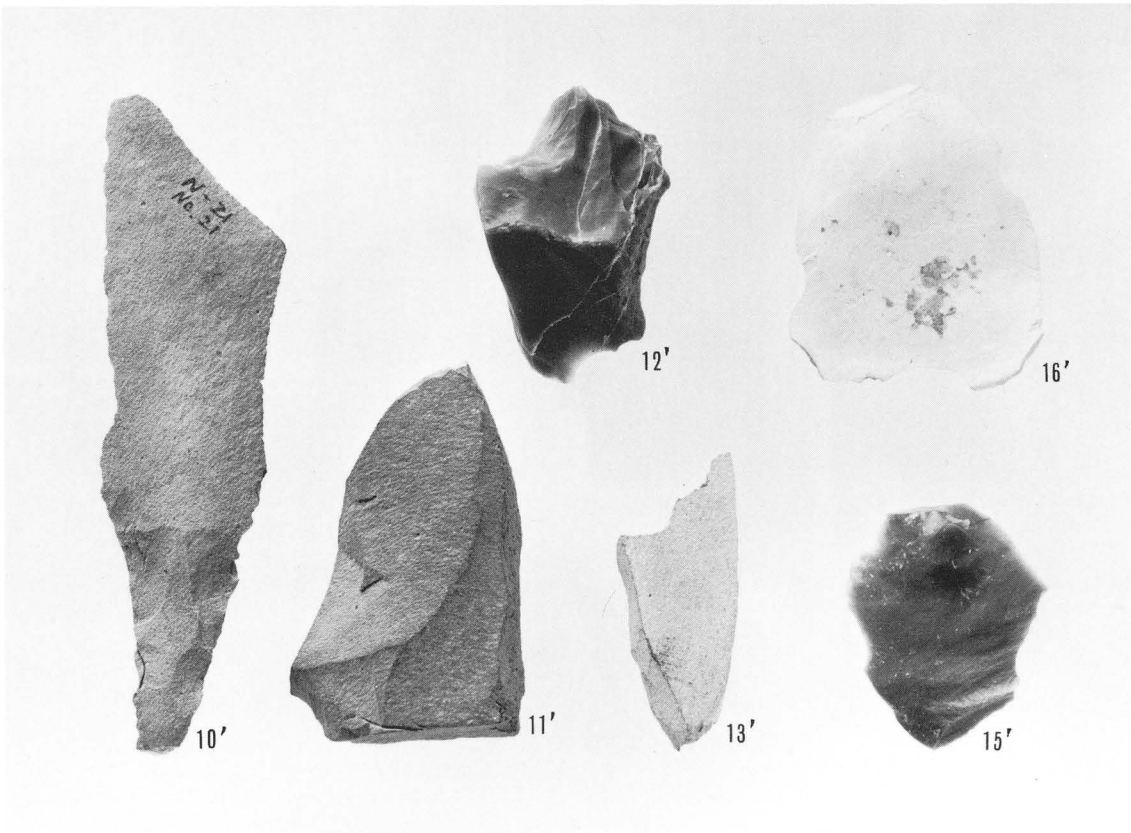
a．C群出土のナイフ形石器（B面）　約1/1



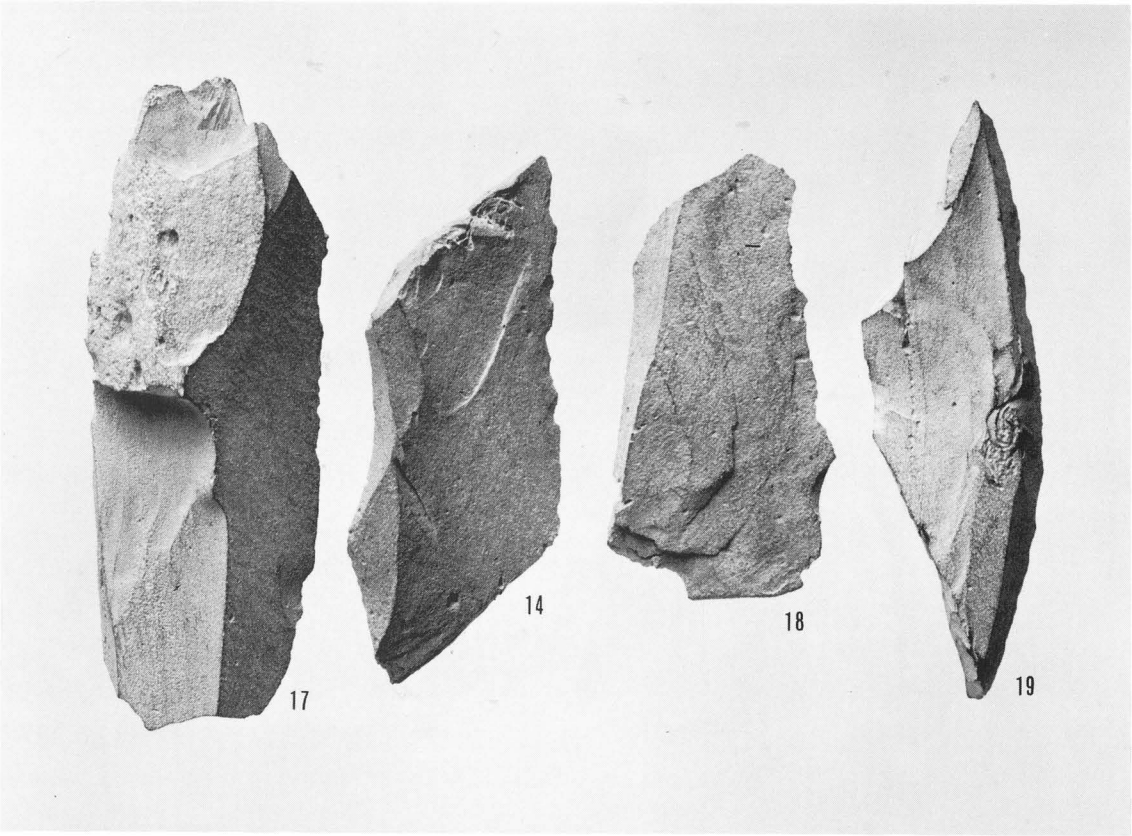
b．同　上（A面）



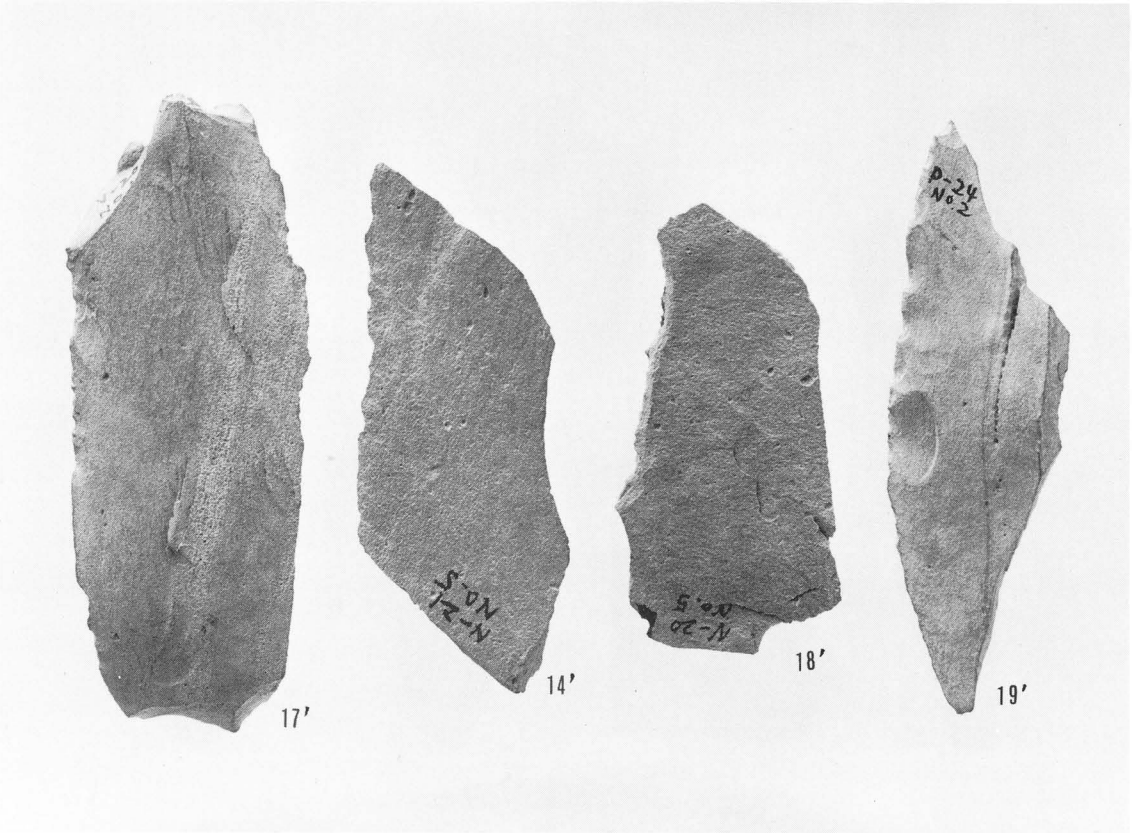
a．C群出土のナイフ形石器・彫器・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片（B面）　約1/1



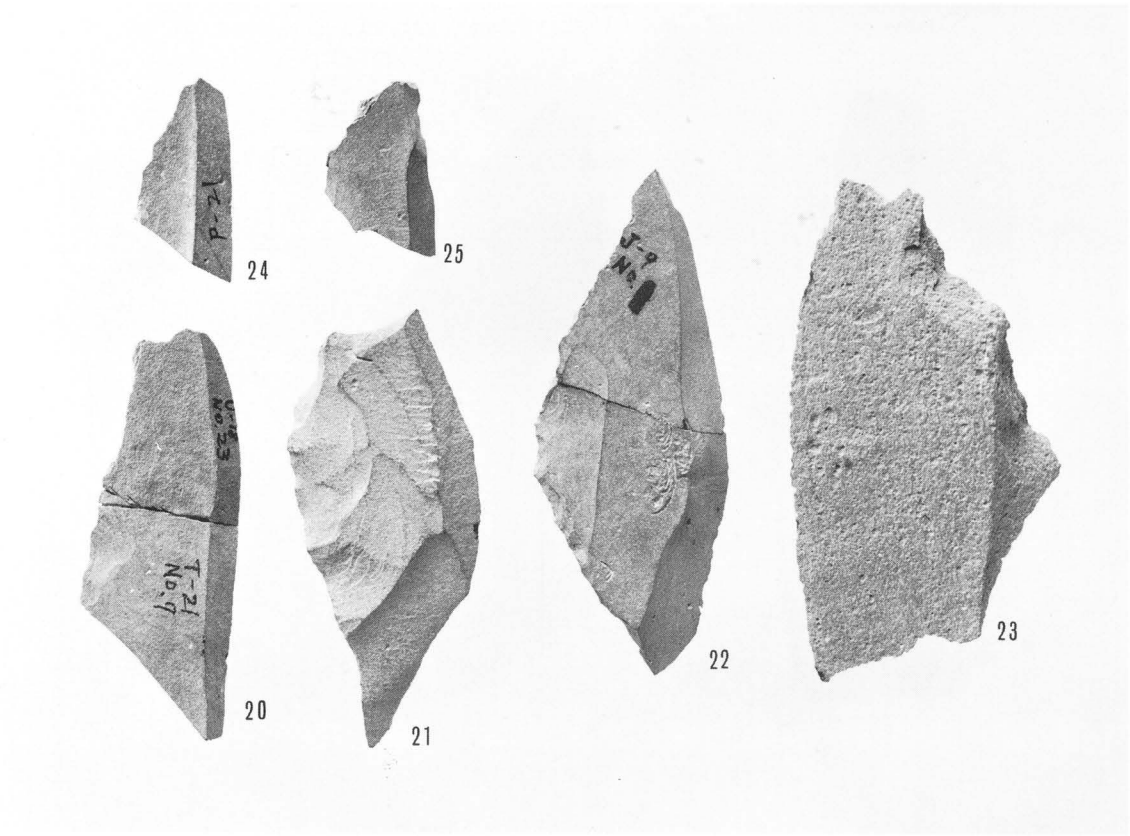
b．同　上（A面）



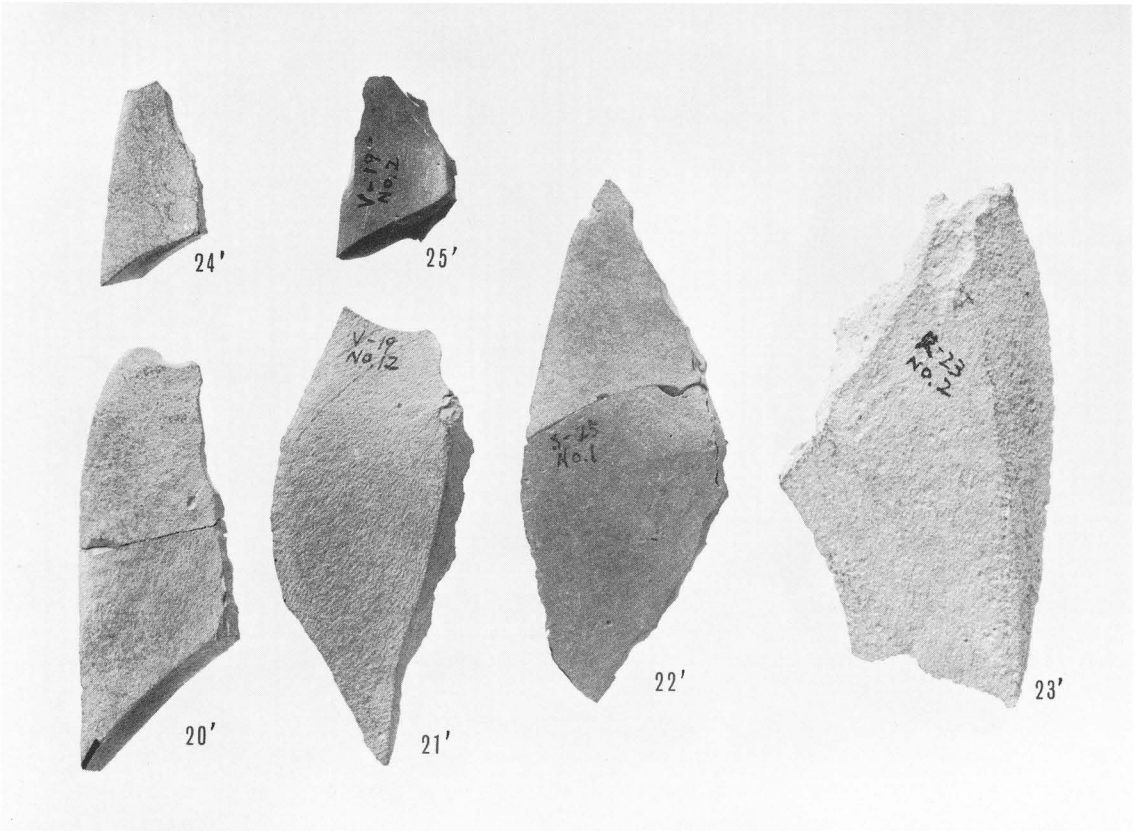
a．C群出土の使用痕のある剥片・翼状剥片（B面）　約1/1



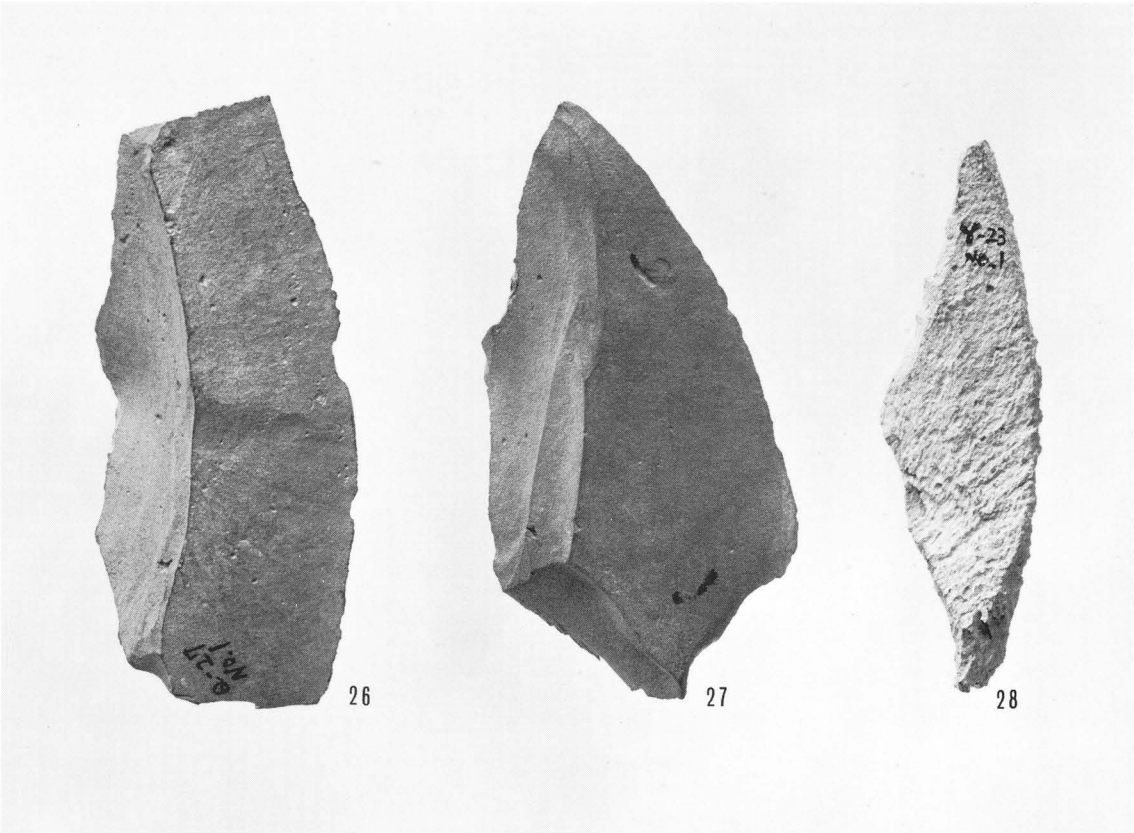
b．同　上（A面）



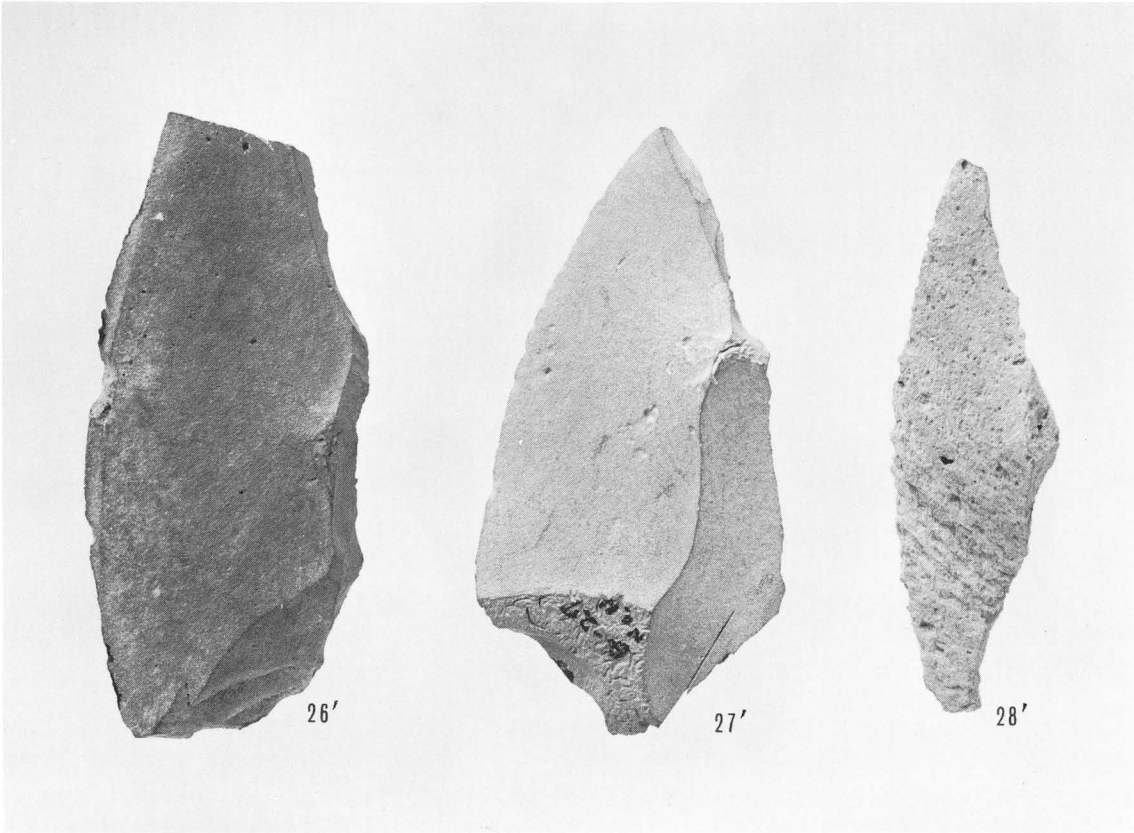
a．C群出土の翼状剥片（B面）　約1/1



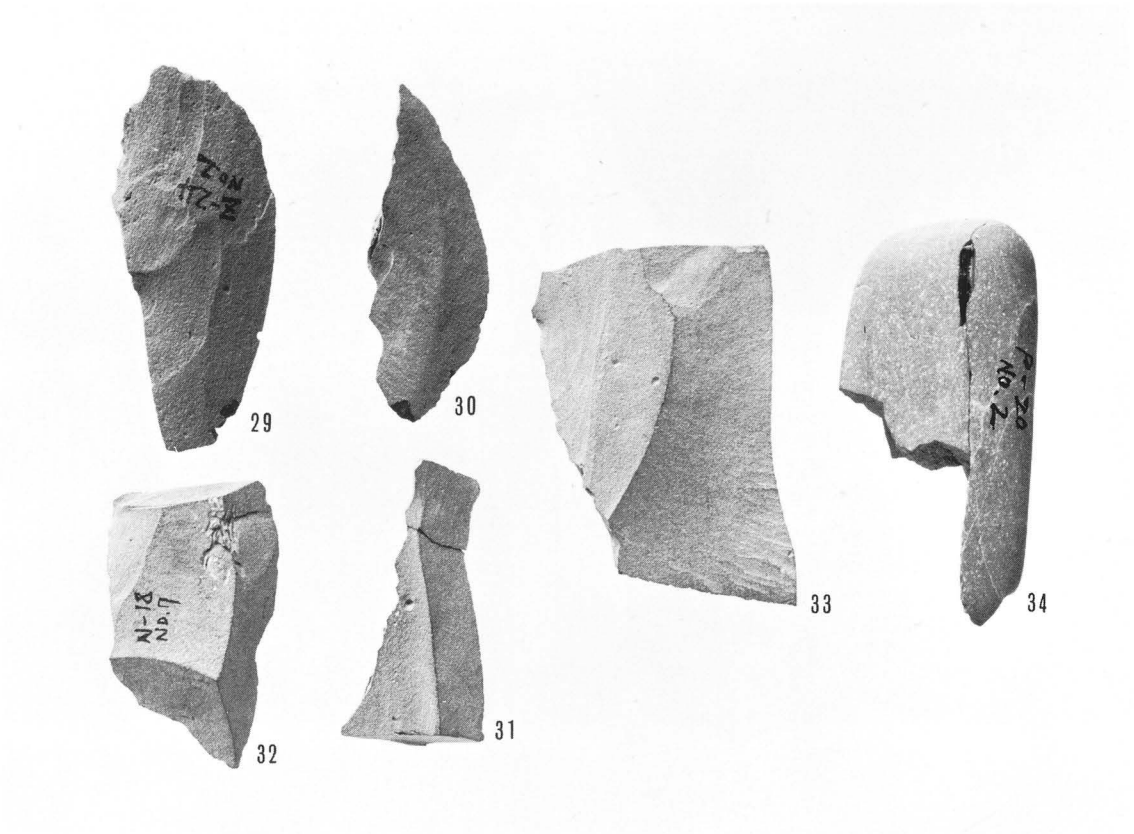
b．同　上（A面）



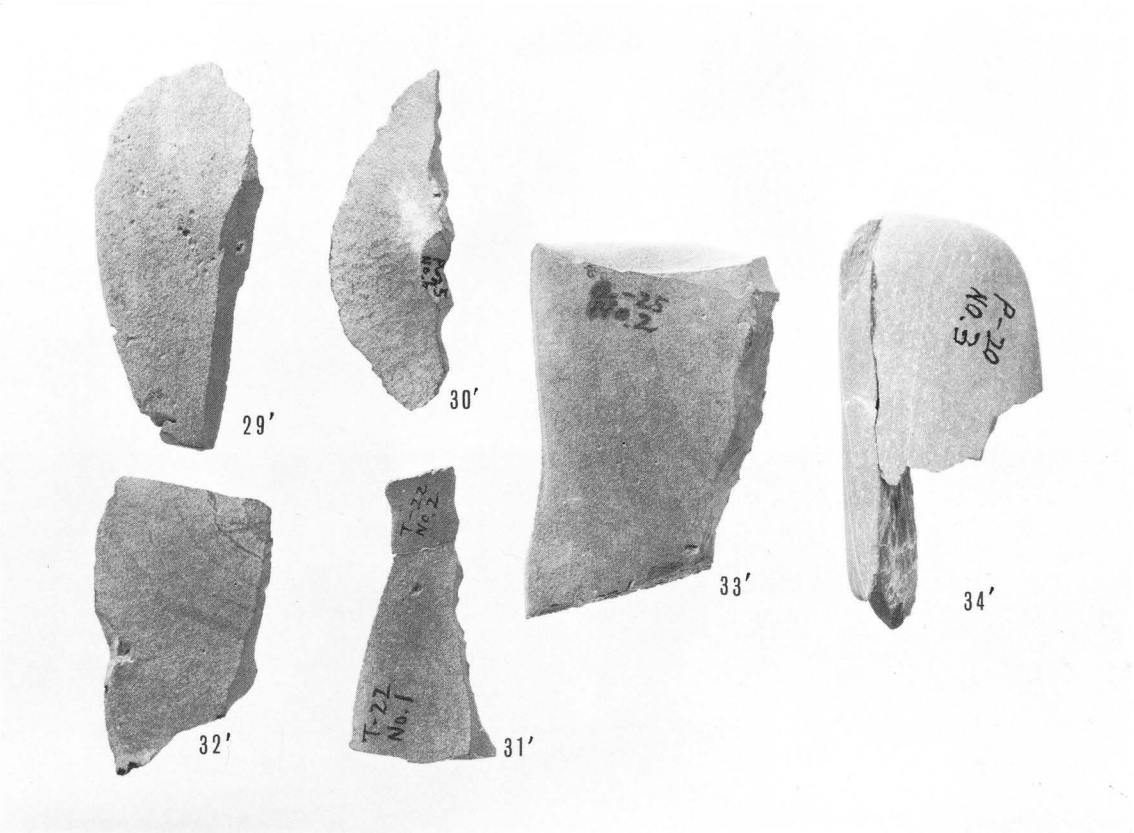
a．C群出土の翼状剥片（B面）　約1/1



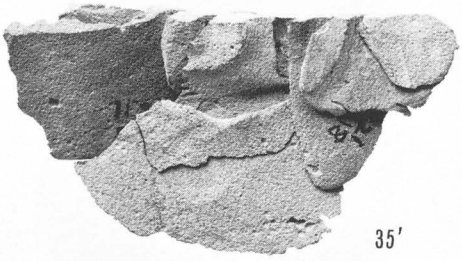
b．同　上（A面）

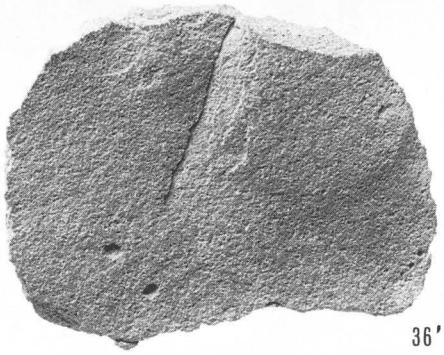


a．C群出土の翼状剥片・叩き石（B面）　　約1/1

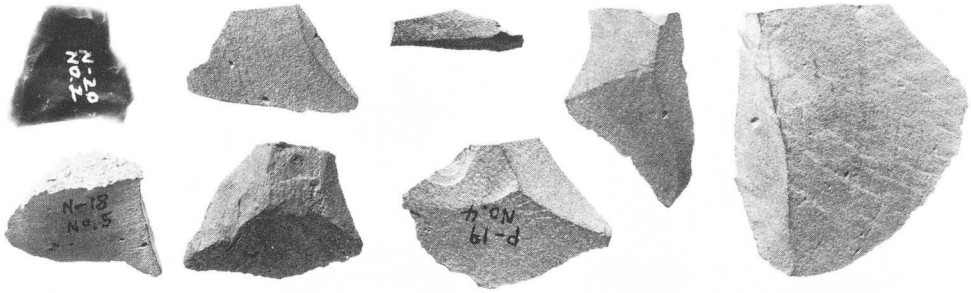


b．同　上（A面）

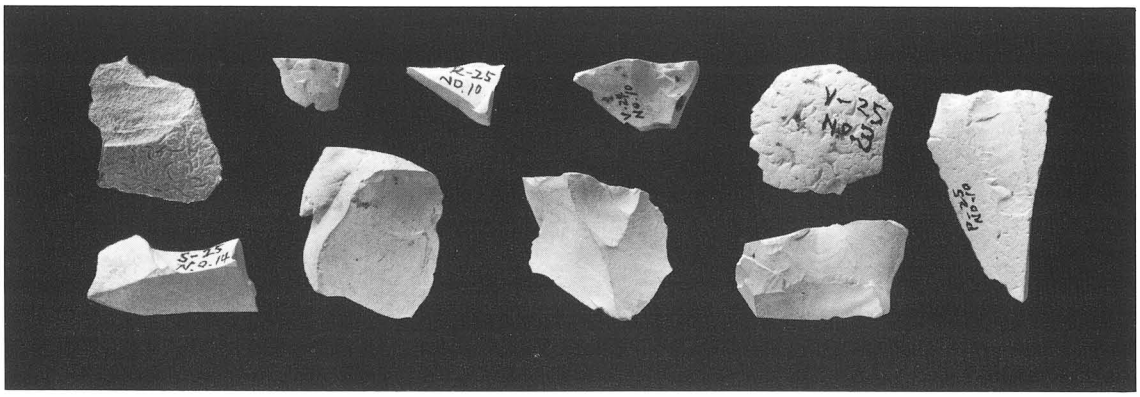




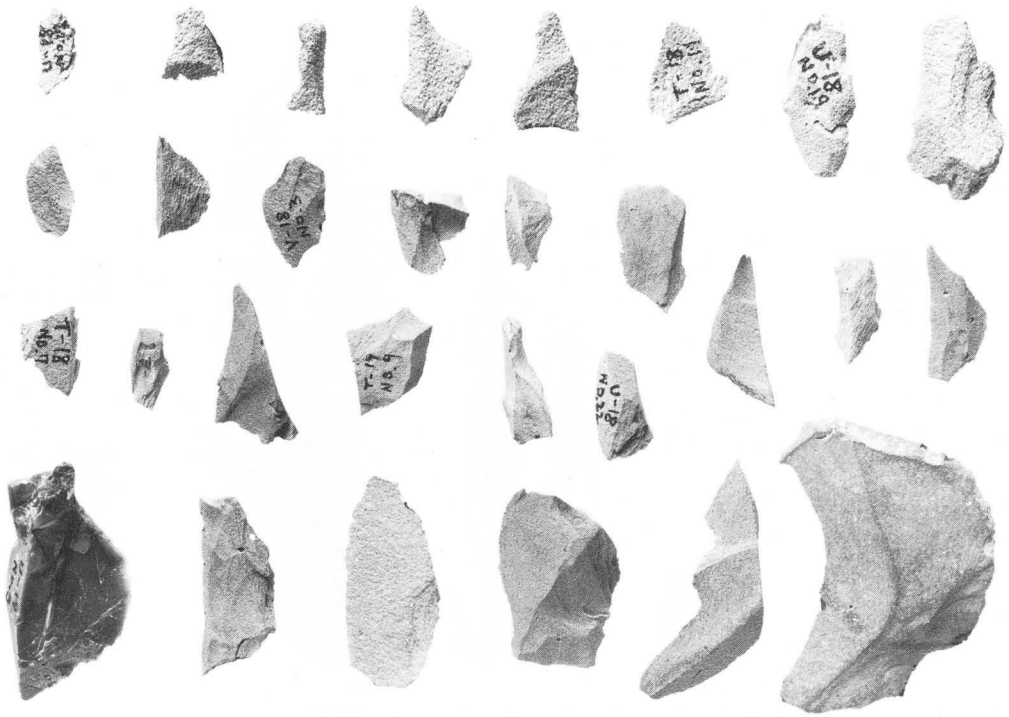
a．C群出土の接合剥片・掻器（B面）　　b．同　左（A面）　　約1/1



c．C_1ブロック出土の剥片　　約1/1



d．C_3ブロック出土の剥片　　約1/1

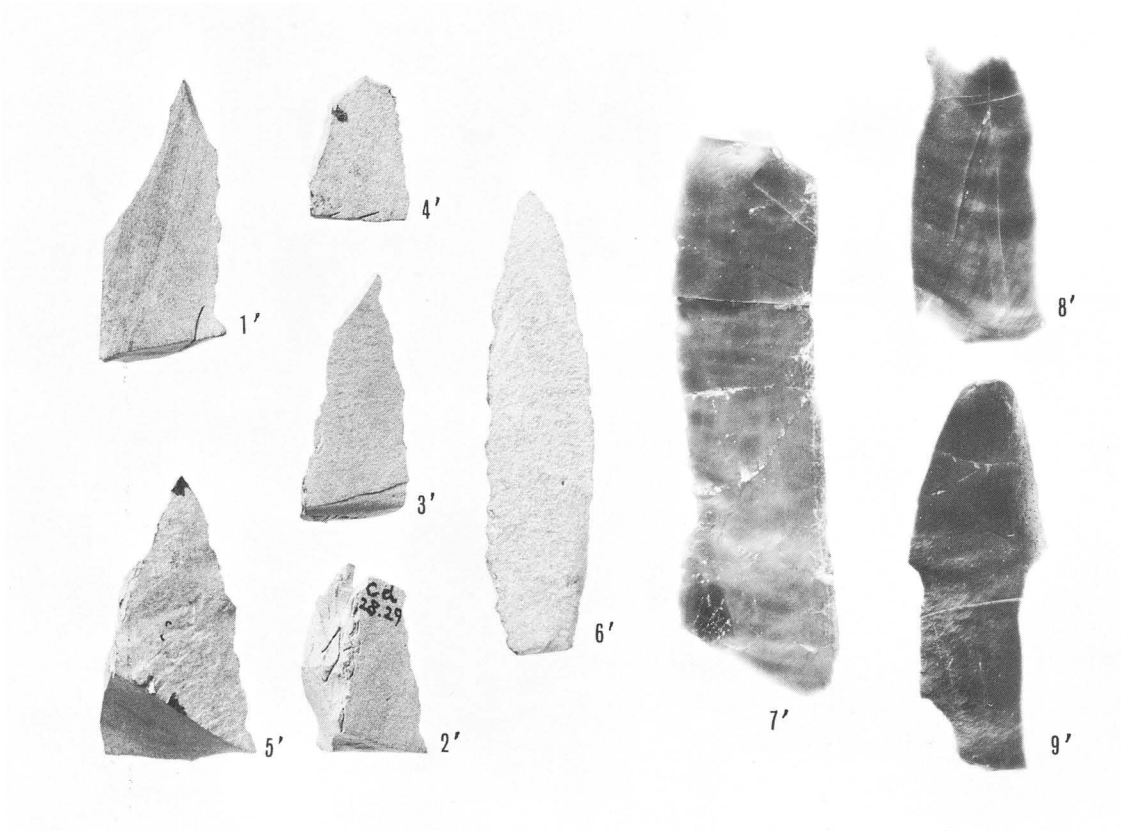


a．C_2ブロック出土の剝片　　約1/1

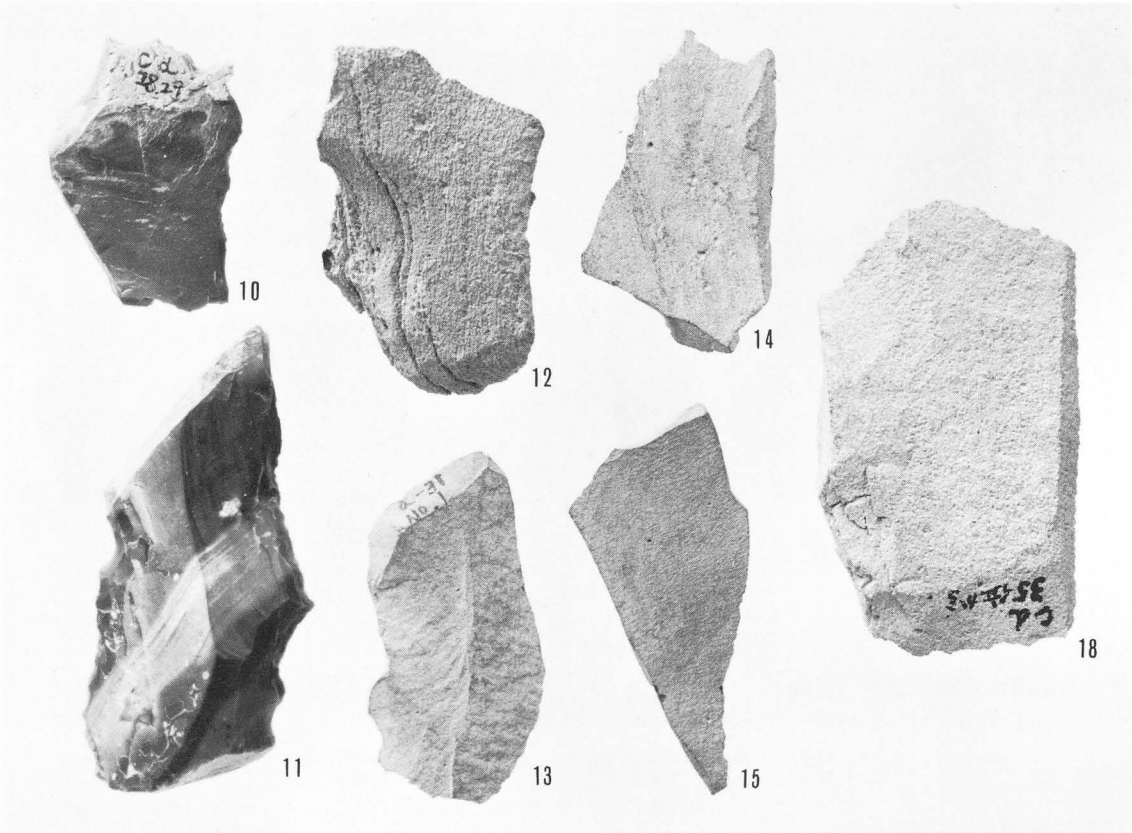
b．C_4ブロック出土の剝片　　約1/1

郡家今城遺跡

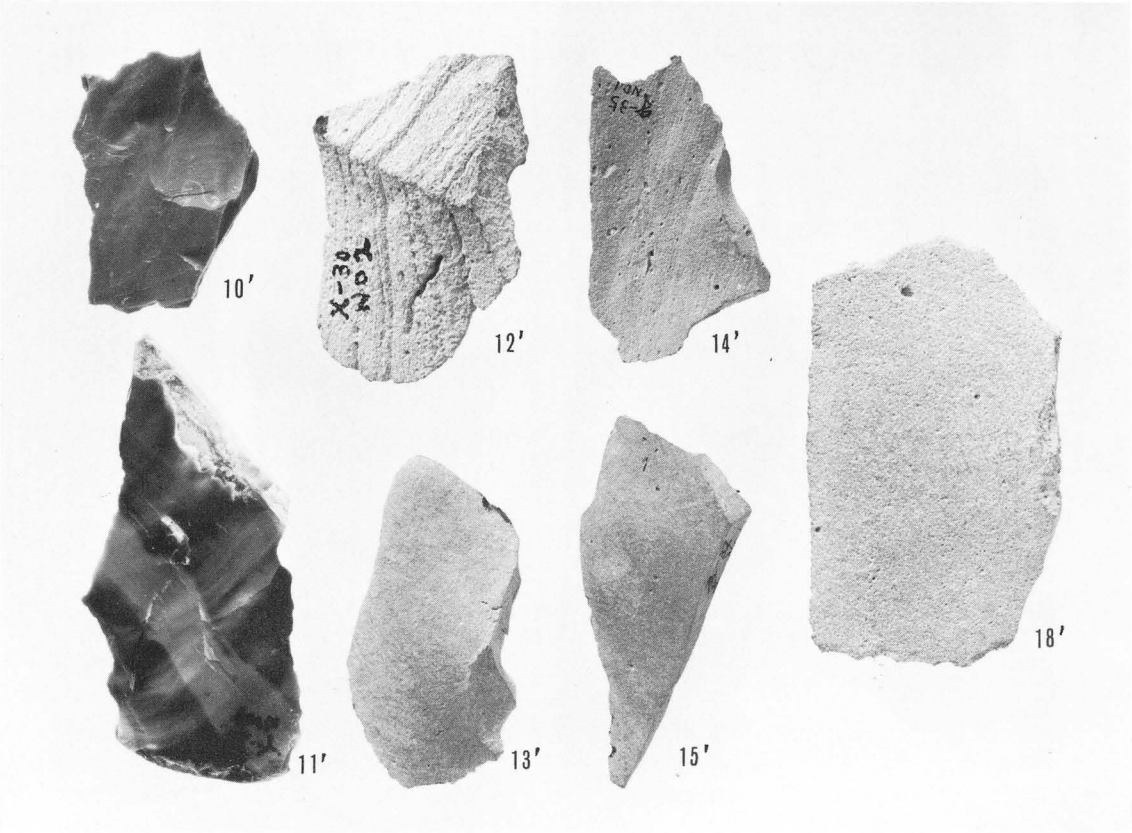
a．D群出土のナイフ形石器・縦長剥片（B面）　約1/1



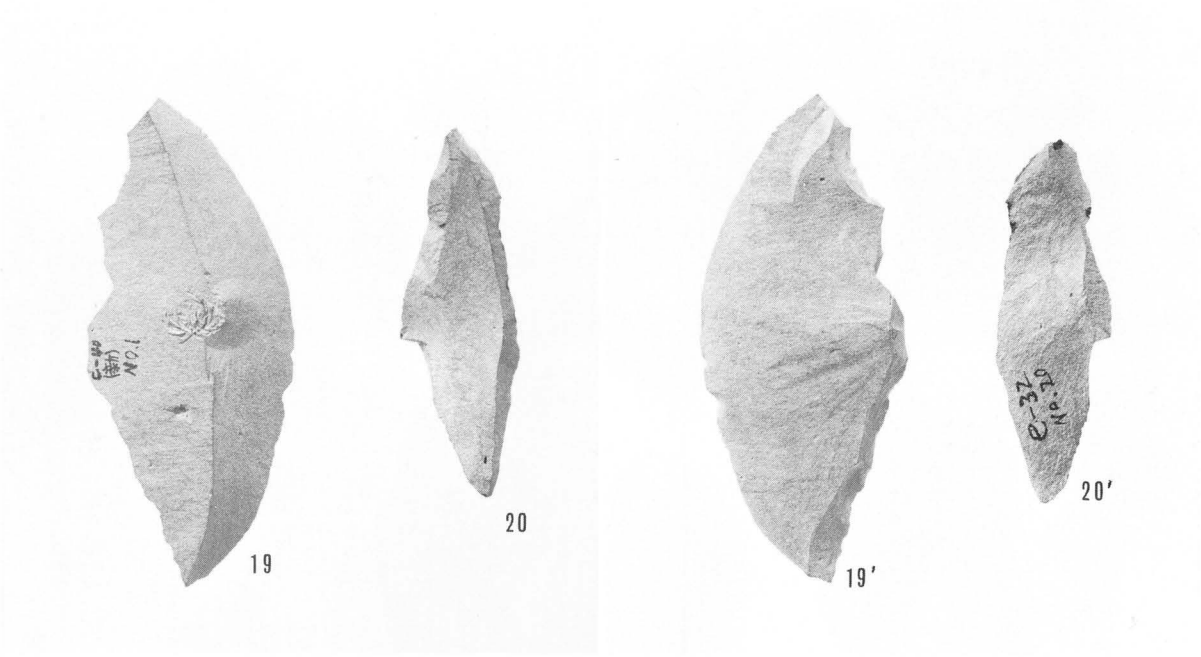
b．同　上（A面）



a．D群出土の使用痕のある剥片・掻器・翼状剥片（B面）　約1/1

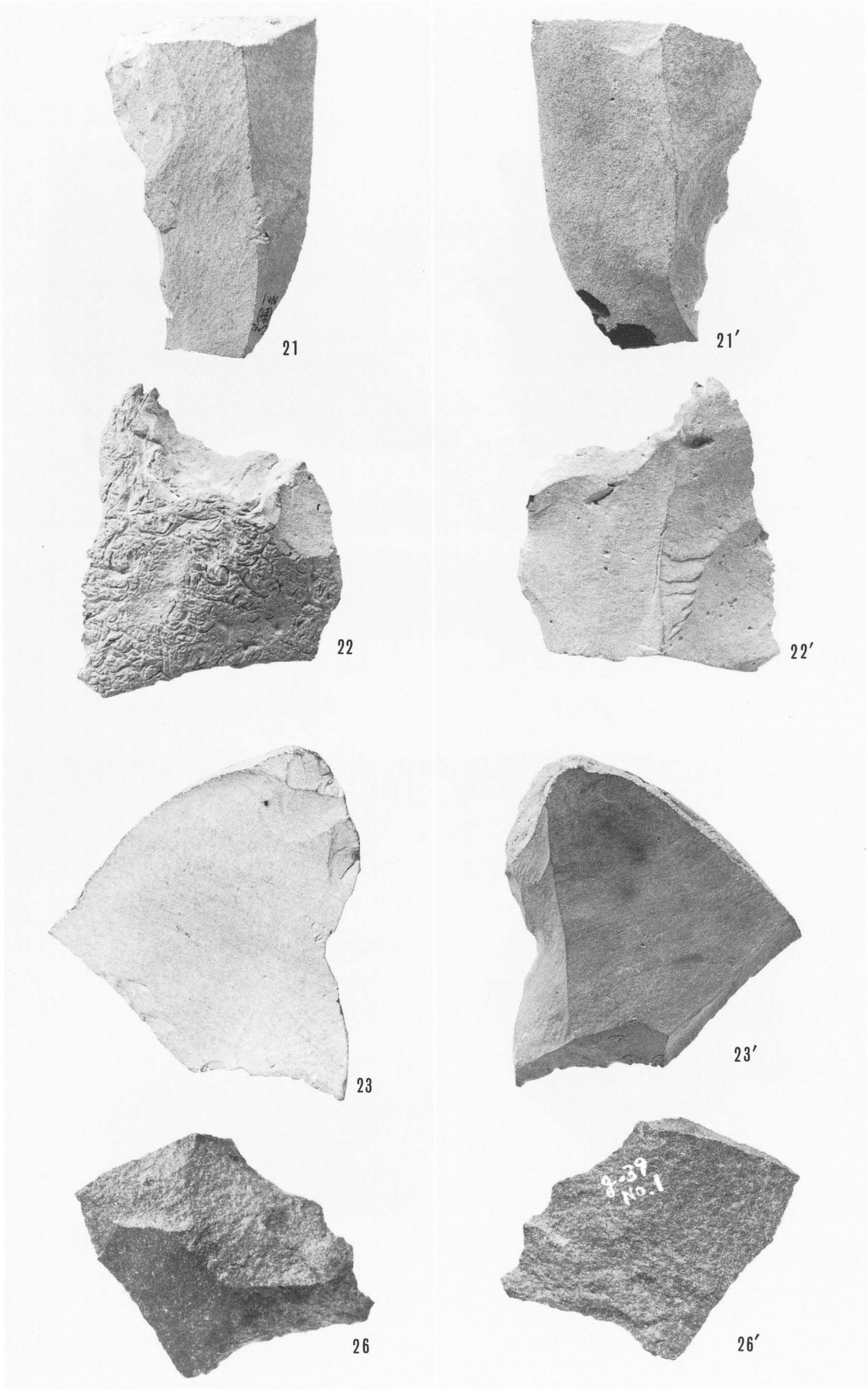


b．同　上（A面）



a．D群出土の翼状剥片（B面）　　b．同　左（A面）　　約1/1

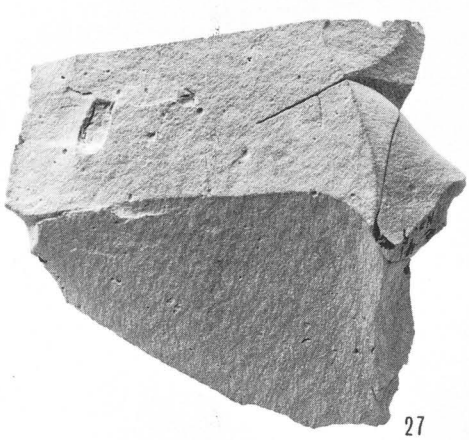
c．D群出土の翼状剥片（B面）　　d．同　左（A面）　　約1/1

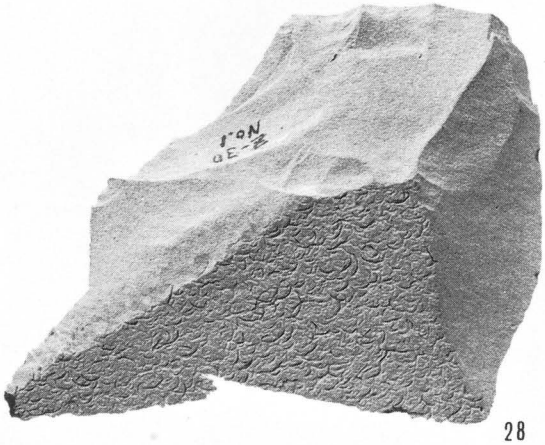


a．D群出土の翼状剥片・翼状剥片石核・剥片（B面）

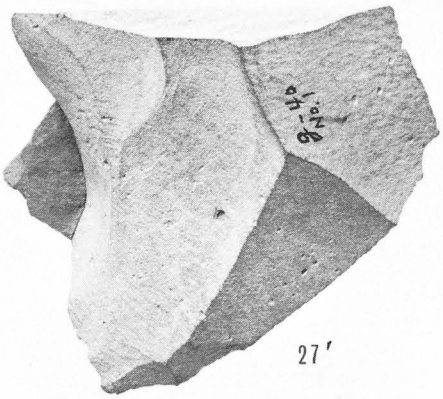
b．同　左（A面）

約1/1

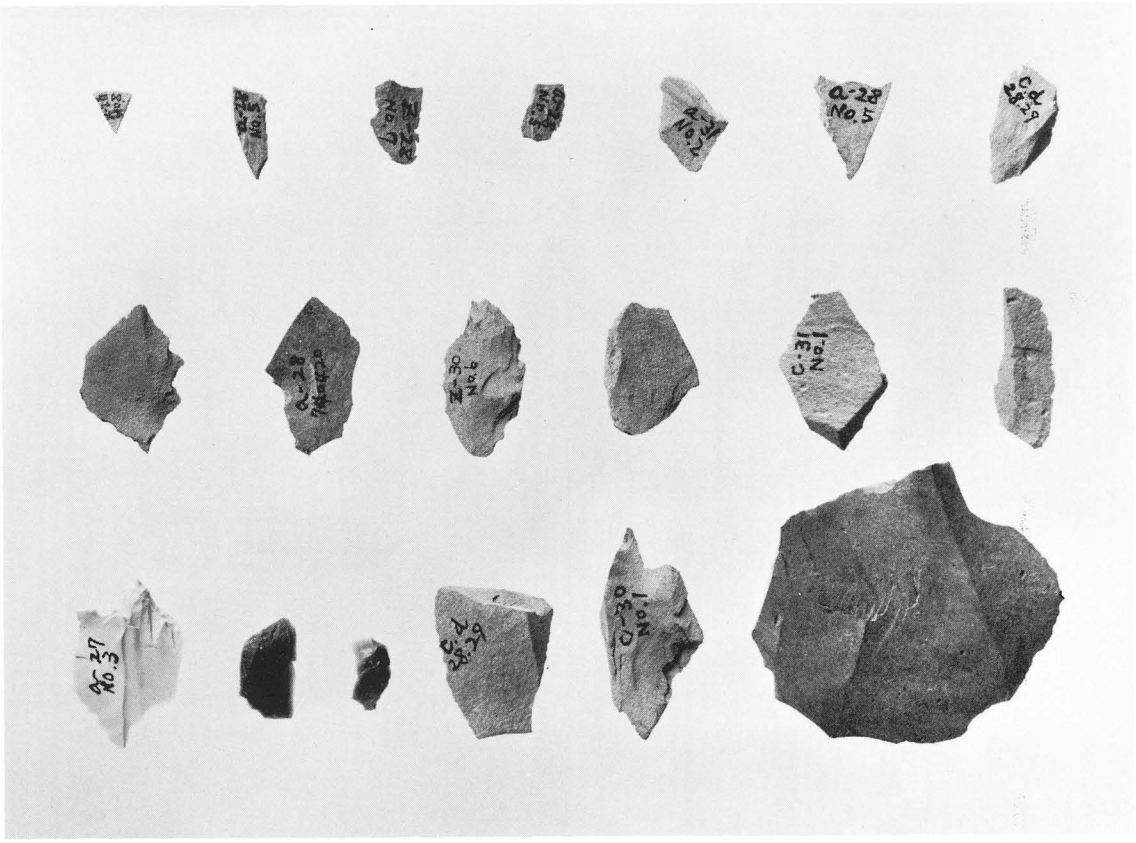




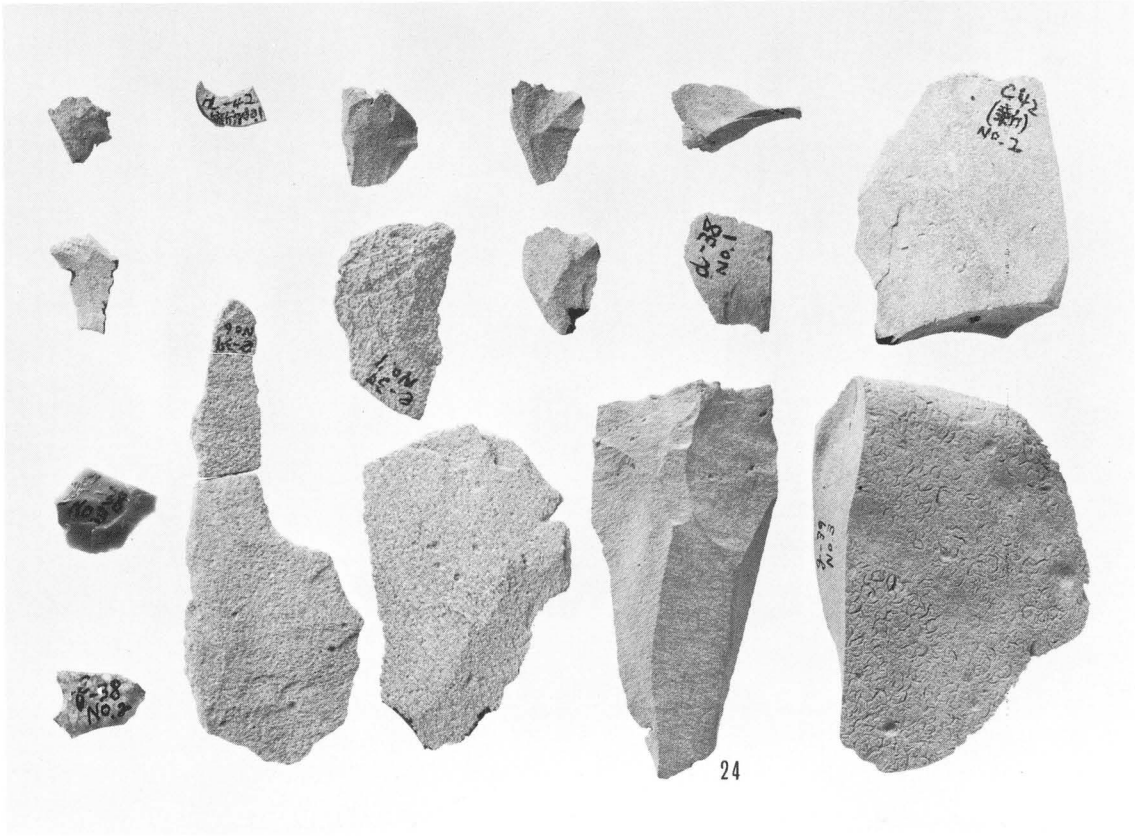
a．D群出土の翼状剥片石核・剥片（B面）　約1/1



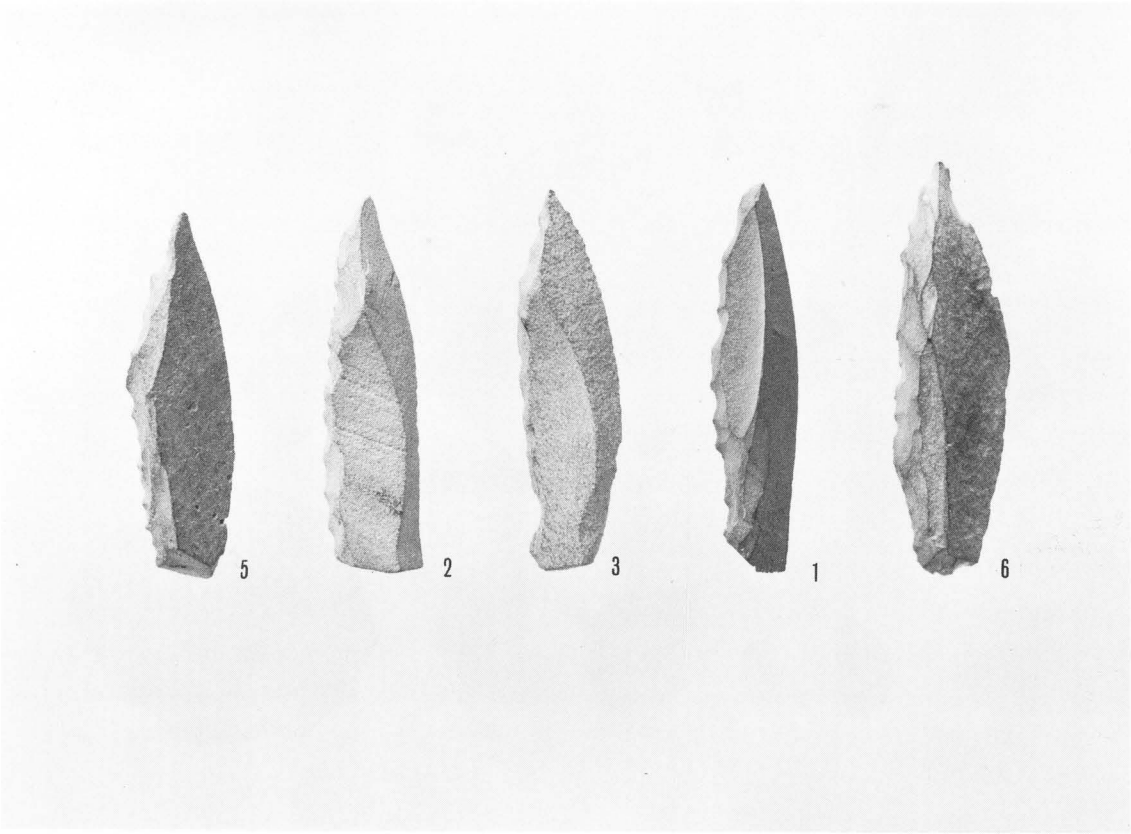
b．同　上（A面）



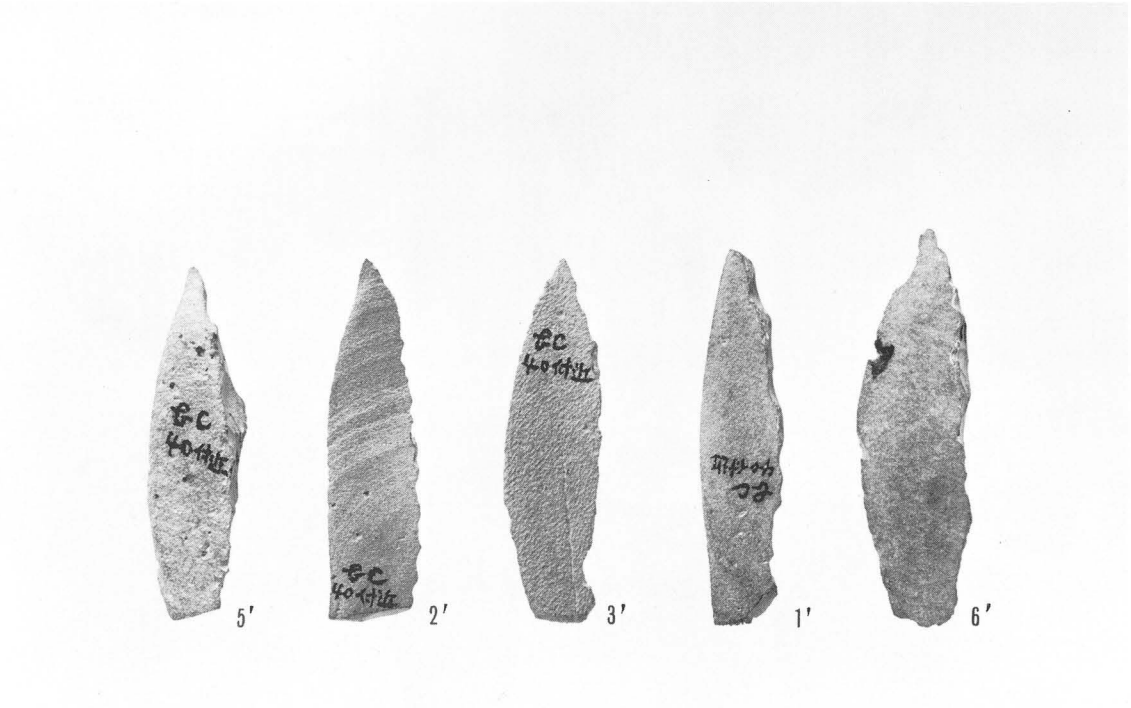
a．D_1ブロック出土の剥片　　約1/1



b．D_3ブロック出土の剥片　　約1/1



a．E群出土のナイフ形石器（B面）　約1/1



b．同　上（A面）